昭和十二年八月上浣起筆

丁丑雜記

七

特別
イ4
1919
488

176753

丁丑雜記

余の印譜を竹紙木版と影写す、写真版よりも好もしきことあるなめり

印架 二枚の版に木元章の大字螺鈿装幀 版を刷りて中の楊影のとす

山陽蘇氏印略序 数面

瀧和亭畫汪啟淑肖像 横幅 冨田渓仙の為画しもらふ

支那名家印

完白 陳曼壽 徐三庚

吳大澂

日本名家印

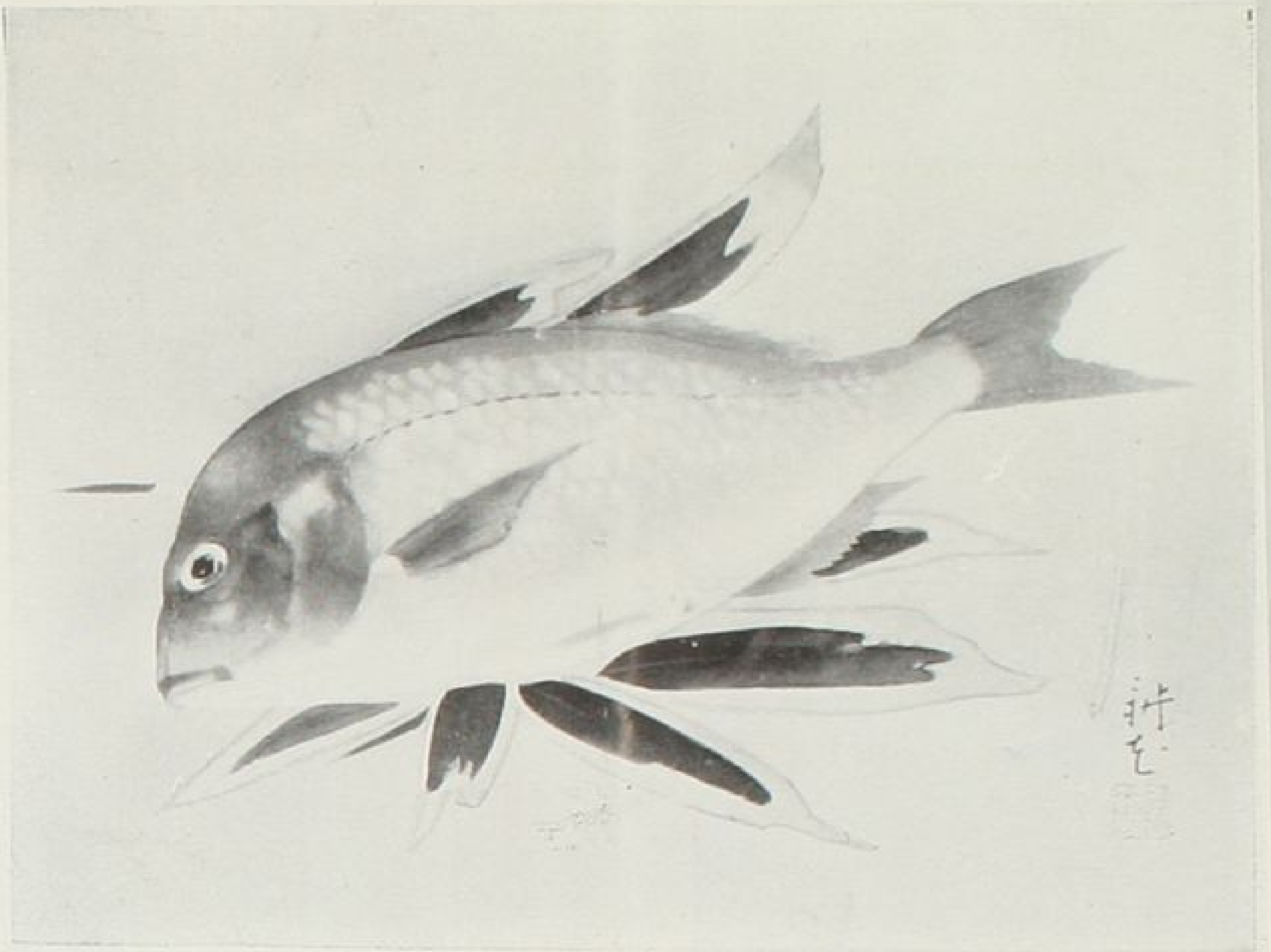
倭古印二顆 高芙蓉二顆

池大雅二顆 前川虚舟 趙

陶南

F 38- 9274

鯛 山村耕花



水郷 中川紀元

近世名家印　敬所　大江　蔵六　道所　林谷
蘭台　芸巖
官印　薩摩政府　水原縣
蔵書印　尾藩二洲　待谷徳翁
五峯書鶴血石歌　一幅　外影幅
五浙人名印譜　書所　一幅

印話屑稿の目次左の如し

篆刻略史
印の六大趣味
印趣味の鼓吹
名家私印の保存

榛原製

蔵書印の考察
五峯と印の交
交つた印人
印道楽と素人画の事　半逸
松石山房の事
中井敬所
旧山大江
中江杜徴
濱村蔵六
池永道雲
細川林谷
芙蓉と乗山

森川竹窓
印人の習ニ癖
秋室印剰、漢銅印叢の事
款識閣、拔雲閣 蔵印の事
大隈侯の印と木堂
琳琅閣と梔園印并鶏血石
刀畔加藤如泉鶏血石 歌分刻百顆
池大雅印
趙陶斎印
乾隆皇妃の玉印

郷里二画家の印
自修印譜の事
鈕の作為
印の鑑定
震火に失つた印
模刻蘇氏印略 山陽序文
一茶の印 并書の印
素人作の印
印の掘出し
幼年時何が印趣味を教へたか
雑印 熊印

獄中雑作の歌

北海道の地名歌

石を詠む

古蝦夷の遺跡を見る

榛原製

○京都の便利堂からは天正本節用集二巻を複製して出して來た。岡田希雄の解説が附屬してゐる。これは山岸文庫の原本を複製したもので、天正本の節用集は未だ此外にもあるところの上下二巻で巻末に左の識語が刻してある

右此板木者泉州大鳥郡堺南庄石屋町住御居有是
石部良冊圍于時天正十八年庚寅履端吉辰

此の石部了冊は天正二年に四體千字文を刻して居るが、此節用集は板木を所有する故に出版したらしいから、板木は天正十八年以前のものと見るべきかも知れない。さうすると識語のある最後の一枚は後の刻であるとも見られる。何んにしても珍本で、堺の歴史を語る好史料である　八月十三日記

便利堂の複製本目次は左のやうで全部家藏にしてある

榛原製

貴重圖書影本

第一期刊行書目

- 承徳本古謠集　一卷　近衛公爵藏　1
- 百萬塔陀羅尼　十一種　法隆寺藏　1
- 慶長勅版長恨歌琵琶行　一册　林森太郎氏藏　1
- 至徳三年版法華經音訓　一册　岩崎文庫藏　1
- 寛永延寶はやり小うた　一册　帝國圖書館藏　1
- 建暦元年版注十疑論　一册　愛知縣極樂寺藏　1
- 小竹集　一册　京都帝國大學藏　1
- 教長古今集註　二帖　京都帝國大學藏　2
- 長崎見聞誌　二册　久原文庫藏　2
- 野山獄讀書記　一册　山口縣前原家藏　1

第二期刊行書目

- 作文大體　一卷　京都觀智院藏　1
- 嘉應鈔本今樣歌　一卷　河内金剛寺藏　1
- 字鏡　三册　岩崎文庫藏　3
- 香字抄　一卷　猪熊信男氏藏　3
- 法華經單字　一帖　京都矢野豐次郎氏藏　1
- 山家心中集　一帖　宮内省圖書寮御藏　1
- 院本「曆」　一册　大阪貴田恒一氏藏　1
- 萬葉集第十六卷　一帖　京都帝國大學藏　1

第三期刊行書目

- 官務文庫記錄　一册　宮内省圖書寮御藏
- 指微韵鏡私抄略　一帖　岡井愼吾博士藏　1
- 香字抄　一卷　京都帝國大學藏　3
- 古鈔文机談　五册　菊亭侯爵藏　3
- 古鈔唐大和上東征傳　一帖　古梓堂文庫藏　1
- 天文十八年版節用集　二册　岩崎文庫藏　3

貴重圖書影本刊行會發行

會費毎月一回五圓參拾五錢　數回分ヲ以テ一部ヲ辨スルコトアリ　書目ノ下ノ數字ハソノ回數ナリ

移動談話室

☆…暑さは水道に敏感に響いてその使用量はグングン上つて行きます、まづ昨今の暑さですと一日の使用量は約百二十萬立方メートルは珍しくなく、この水量は丸ビルを桝に見立てゝ約五杯に當り、またその料金は一立方メートル七錢の單價でザッと算出しても八萬圓からになります

☆…この給水の萬全に市では多摩川、江戸川之に加へて掘井を行ひ貯水の堅陣を敷いて居りますが、一番多く御用に立つのは多摩川です、村山、山口兩貯水池にはいつも丸ビルの桝で約百二十杯に當る三千萬立方メートルの水を用意してゐます

☆…ところが年毎に人口増加で現在の給水設備はその飽和點に達し心細くなりましたので二千四百萬圓の巨費をかけて世界第二の大ダムをいま工事中の小河内貯水池に造ることになつたのです、この貯水池は六年後の昭和十七年に完成の豫定ですがその貯水量は同じく丸ビルの桝で約七百杯にもなります

☆之が出來たら大安心――と思つたらなかなかもつてさうは參りません、更に人口約八百五十萬を對象に一日最大給水量二百萬立方メートルといふ第三次の擴張計畫にかゝらねばなりません、そこで市では今から荒川、利根川、富士山麓の柿田川相模川等に水源を求めて調査をしてゐます、皆さん水を愛しませう!

此の盛暑に際而ちきことも夷人と
旬日水道戒めあんかと気をもめる術
欲すい十数の新らしき水を愛すこと
すら乙の宜一偶あり、偶と新聞紙
をえんむ一閲に右の記事あり、此の今
一日使用の水量は丸ビルを桝と
見て五杯を要し其費ハ萬圓
と云ふ量と為るを得ず人口の増加する今
後の為めには更に新たなる水源を擴張せ
ざるべからず、十七年頃には第二次の擴張をな
すと云ふ。

日本所収印譜の蔵家丹羽氏に就て往年印譜に著し
て絞つたものと想ふ、今取り出して見れば、巻首に稀珍の鬱宝あ
り、金井之恭の序あり、巻尾に高林碑出羽の跋あり、巻
首の二印と巻末の印の外、各人各印を収め六十顆を収
め、碑出羽の跋中に廣瀬刊まで左氷川浅草街に自所蔵
と為す、廣瀬の名は詳かならざる人と為す、兎に角判る
と思ふ。 此譜明治三十一年十二月廿日印刷 片桐

編輯書者川人として名が出てゐる。印譜の末頁に澂印一顆
あり、天云人々是適酒不嘗沽とあるを鈕に書不外史篆
とある。余此印譜を見るに冊子に綴られ寄贈を受
く八月十四日也。

日江霞印影二巻　八百芙蓉一筆印人の印百顆
を集めたもの、巻首に芙蓉の文房四用八顆を収
め、其しも芙蓉の花なき、以下数十式の刻を収め、中
に木村蒹葭堂前川虚舟武元登々庵篠崎小竹寺方
り自ら巻尾に稲毛屋山の刻数顆を収め、其の於くる
刻者の多くは皆南畴の名すらふること其の刻の
佳なるに由つても知らる。其巻首に篠崎小竹の文庵道の
序あり、次に浦村世斎の序あり、巻尾に稲毛屋山

の跋あり、又十時梅厓の題詩あり、篠庵道の序を
寄せてゐる。芙蓉が洛の東山に閑人を介して篆刻を試
みた時印譜の名を命して東山雲鶴篆とした。
芙蓉は其時に云ふと共に他の跟集に於て同じ名を俗
する時其の印譜を江霞印影と題すと。可笑しい、此印
譜即ち芙蓉の遺志に従ふ也。而して此の印譜の讃
跋稲毛屋山の輯むる所なるを跟著は出版せん事を
石部を限りとあり、彷彿として剞劂のみなも、刻者の名をた
ゞ記して他日其係を考證せんことを期す

高芙蓉　石堆中公世　独遊南木世粛　九疑山人鳳
伊万曽歴左堅　過石赤松滄洲公　石鼓川霞舟
楞亭森子孫　尊亭名和贊大　鄭古高士孫

南江源松伯　蘆澥梓環中　可亭黒遠三
柏堂森離吉　藍臺武田子玉　蓮真篠承卿
以上上巻
赤松天太龍　淇水原孟栄　春嶽昌世覧
梅園長公禅　奉時周以建　晴月江識慶
関石岳湯臣　西渠西子民　春渓森仲先
麟州井擴龍　探芳楠子郎　篁亭鳶子巖
岳裕坂伯比　偏齋江篤夫　金波源楊叔
元泉村世濟　松軒山孟昭　芝園川楽桐
石隠牧君平　屋山毛直道
以上下巻
通計三十七家

〇三條公歴世印譜一冊二冊 此印冊條公の家に惟一の存するもの吉田年達歿後其の遺篋より出づ、年達今の公爵に篆刻を教へまゐらし公の門に至る、此印譜恐らく公の贈る所なるべし、印の編輯は中井敬所の自ら手にまかせ印の注記索引共に敬所の自筆也、才一巻は季時、実起、公修、実萬四公の印を収め、才二巻は全部實美公の印を収む、索引目録に徴するに總計二百卅八顆の多きに及び、当時知名の篆刻家の作を網羅す、實條公は印を好まれ、其の愛玩の印は對鷗荘印堂の印譜によりて世に伝はる、此印譜に収むる所は皆な公の私印也、此印譜の成る明治二十四年五月十九日なること敬所の記によりて知らる 標題一行 清印章 清印冊 なりしなり、此譜

求めて得つゝあることであらう、珍しい事で可也（昭和十二、八月末日）

日支の戦闘は各所に開かれたが、日本はいつも受身で彼等の挑戦で初めて起つ隠忍も非常の形勢になるまで遠慮で、とかく難儀であるが、いざと起ち上がると、直ちに敵を粉砕し、其の神速の働き実に驚くべきものがある。日本の戦闘を能く表はす大を遂げ新分野に数拾萬と努めつゝあるが、彼等は終に上海を支那化せしめ、之は極めて日本国としても困るのである。上海は国際都市で各国の集合地であり、北支などと較べるものではないのである。彼等は外国までも脅やかすことをやり、其の実法外国の干渉を招かんと画策しつゝあるのである。支那のことに於て始めて飛行機を使ったが、其の数二十機を称せられ、或は外国人をして操縦させてゐるのか知らぬが、爆撃下の禍は日本を外れて却って支那自国の民家の人を殺し、外国人を殺害し外国の建築を破壊し其の無軌道の跳梁は諸外国は勿論自国民にまで怨を買ってゐる。昔碇泊の軍艦にまで爆弾を投ぜんとしたが中らず、英艦に爆弾を投じて脅かされてゐる。日本も飛行機で応戦し、敵の一機を撃落し、又高射砲で二機を撃落したと公表されてゐる。彼等の操縦は拙いことが知れる。彼等は操縦に慣れぬ飛行機を弄ぶんだことを、其の行動が無軌道で、国際的の怨恨を増しつゝあるのは自業自得と云ふ外ない。彼等は避難民まで爆死させても顧みない暴虐の其の野蛮さを暴露してゐる。昔の如き武人と終日間断なく、彼等は戦闘を続けてゐる。夜来ラジオは十時半まで報

を經く、臨時閣議は十時半より開け、午前の二時迄かかり、従来の不擴大方針を一擲することに決したと云ふから、不日宣戰の布告をするに到るであらう。

昨十四日の事を書き終ると、今朝（十五日）の朝日紙は公電として、敵の抗州廣徳両飛行場を爆破し大損害を與ふ、格納庫五、飛行機二十數台を爆破したと傳ふ。抗州廣徳は南京の東南方約七十マイルにあり

榛原製

宣戰布告に—縁の深い八月—

日清、日獨兩戰爭は何れも　暑い最中大詔渙發

日支事變は今や華北の野は素より華南支那の両も風雲危急を告げ全面的衝突不可避の情勢は日と共に濃厚化しつゝあり支那側も飽迄長期抗日を決意して國交斷絶をも辭せざる體制をとつてゐる、この折柄明治、大正の戰史を顧みると八月と言ふ月は宣戰布告にゆかりの深いのも何とはなしに緊張を覺えさせる感な[illegible]もする

◇日清國交斷絶

明治十八年我が全權伊藤博文は清國全權李鴻章と天津に會し今後日清兩國は朝鮮に對し同等の權利を有し、萬一出兵するやうな時はお互に相談してやる事に定めたのが世にいふ天津條約である。その約束を清國が無視した爲めに起つたのが日清戰爭である。

明治二十七年朝鮮に東學黨と稱する保守的主義者の內亂が起つたので清國は屬邦保護を名として兵を牙山に上陸せしめた。わが國も亦大島義昌少將の率ゐる混成旅團を編成して京城に派遣し、公使館や居留民を保護したが、亂平らいだ後も、清國は朝鮮はわが屬國であると頑張つて己れは撤兵せず[illegible]に我にのみ撤兵を迫つた。ここに於て國交斷絶、戰端を開く事となり八月一日我に對し宣戰の詔勅が下つたのである。

◇日韓併合

日露戰後のポーツマス條約に基き韓國と日韓條約を結び、わが國は統監府を京城におき、韓國を保護する事となつたので諸外國の使臣は何れも京城を撤退した。そして伊藤博文が統監に任ぜられた、のち明治四十三年陸軍大臣寺內正毅統監を兼ね同年八月二十二日併合條約成り韓國皇帝はその統治權をあげてわが國にゆづつた。此の時韓國を朝鮮と改稱した。

◇獨乙に對し宣戰

歐洲大戰の余波は遠く東亞の天地にも及んで來た。我國は日英同盟の誼により大正三年八月十六日ドイツに對し最後の通牒を發して日本や支那の附近に在る獨艦の退去と武裝解除を促し又膠州灣の租借地を日本にまかせ、日本からこれを支那に還附する事を申込んだがドイツはこれに應じないのでやむを得ず八月二十三日ドイツに對する宣戰の大詔渙發し、わが海陸の精鋭はすゝんで膠州灣に向ひ、陸軍は神尾光臣中將の率ゐる久留米師團がこれに當り十一月七日青島の堅壘を陥れ、續いてわが海軍は南洋に於ける獨艦隊寄港地諸島を占據した。

○自分の家祖に就ての何事も知る所なし、若かくして歿
し、為めであらうが、然し偶堂文集に録する所に依れば
帯路潤家は士元、父は次郎左衛門、潤人と為り
慷慨にして気を好み任達にして大志あり、年二
十東都に遊び業を江村北海に受け声名を
馳騖すとある
唯これのみだ、其の若くして歿したるか否は其後を受
く即ち我曾祖翁なり、偶家は数寄次郎吉と称す、我
草廬に就て考ふ、北翁に就ての家に伝ふることもなき
而も其代偶兄弟の祖父市島六之丞につき茂山鉄太郎の近世
城佐の人物偶然代々偶堂文集に採りたるが如く語る
市島六之丞は北蒲原郡市島氏の族なり、其祖父某

藩主溝口侯の加賀より封を新発田に移さるゝに及び随
ひ従って来り封内五十公野に占む、其二子あり、長子
は孫右衛門と称し、次子は次兵衛と称す、某歿するや
及び孫右衛門其家を継ぎ、次兵衛をして別に家を
為さしむ、次兵衛初め富家なりしを愛ずる所甚だ厚
く、賄多く資を擲ち、然れども屈せず力穡怠らず、数年
ならずして生産富家と等しきに至れり、次兵衛四男あ
り、昆は又兵衛と曰ひ、仲は甚七と曰ひ、叔は八郎兵衛
と曰ひ、季は即ち六之丞なり、六之丞吉原に帰りしも
能く農事を為し、且つ任侠にして施を好む、父之
を愛重し、特に鍾愛を加へ、以って嗣と為さんと欲す
昆又兵衛最も先づ六之丞の賢を推し、避譲せんとする

原ニ居リ、而して仲甚七ハ新田ニ處リ、叔ハ今兵衛ハ
東衛ル後ヲ、遂ニ六之丞をして嗣しむ、是に於て次兵
衛多年蓄ふる所の貨財を挙けて昆仲叔三人ニ
分つ、而して六之丞ハ第九番田地を受け得る、次兵
衛寛永十五年正月を以て歿し、六之丞其跡を継
く、六之丞乃ち子孫ニ謂つて曰く、吾貴す子を以て嗣
ニ宗祀を奉す、豈吾豪氣なるものや、已むを得さん
ばなり、吾ハ窮かれ自ら以為らく、命を奉し遺教
を守らは幸ハ罪なきなん、是の故ハ夙夜力耕
し以て先を奉事す、今亦已に是なり、亦何をか望
まん、其後二十年にして西河連りに決し、田土荒廃
し、未經なきこと三歳、饑饉往々として餓莩所
リ、

榛原製

其民毎ニ溝ハ有司之を憂ひて出す所を知らす、遁
ち五十八名の民の蓄積あるこふなきをもし、價を約束
して以て穀を出さしむ、西河の民就て之を糴す、
六之丞其間に在らす、然れとも六之丞穀を糴す
るハ則ち必す其價を殺く、其後三年にして三十八公
野饑う、六之丞即ち其の仲兄ニ謂て其廩
米二百苞を乞ひ以て窮民ニ貸し、輒ち山蔵の
熟するを約す、而して歳復歉なるを以て窮民償
ふ能はす、六之丞乃ち窮民を集め之ニ謂て曰く
吾公等ニ貸する所の者、有年を期するのみ、而して
歳復歉す、明年の熟を度るも、公等亦何んぞ
兩歳の虧耗を補ひ、以て相償ふことを得んや、

君肯て貸與せず、之に因つて其券契を燒く、窮民皆
驚異感服す、然り而して芝田に過き仲之に謝するを
欲するを以てす、仲見之れを辭り名を求めざるを爲
し、志つて許さず、六之丞即ち罪を謝して、不破三戒を
革めて以つて之れを子錫家に附し、其價を贖して以
つて仲見に償ふ、既にして妻子と共に牢禍寛かならず、
然れども六之丞孝悌猶ほ故の如し、是に由つて
郷黨甚だ其長者なるを知る、享保十九年正月為
みを歿す年五十五、其長子長左衛門嗣ぐ、初め六
之丞病未だ危からず、長左衛門を謂て曰く、吾
為に諸兄弟の徳を存するの故を以て、生平
惴々として先子の德銘を墜さんことを恐れ、

乃ち今吾に祖宗の遺を藉りて、舊田宅を全うし、以て
首領を保つを得たり、嘗て祿積の贏を以て山崎
五家の田を購ひ益せり、然れども吾甚だ其田主を
愍む、夫れ人生足るを知るを貴ぶ、吾贏餘
を子孫に貽さば、徒らに之をして怠らしむるのみ、
其後命ずる所は、舊田宅を以て之を
即ち山崎五家の者を召し、竟に其田券を焚
り以つて之れを卸與す、五家の者大いに喜び以て
踊躍す、六之丞既に嗇を厭ふて愉快
とする、長く今日先沢を受くるを得たり、又實
言ふ人と遂ふて起ふ
吾れ嘗て父祖の遺書を精讀せず、吾一族五六之丞

の如き蠻行の人ありしことを知らず。慙汗々々（昭和十二年八月十五日）

○現代の野菜で字を知らぬ者がいくらもある。セルリーは和蘭三つ葉と云ふてゐるが其字は塘蒿とかく。パセリーは香氣が高いので飾りとして皿に盛るが其字は旱芹と書く。アスパラガスは日本うどの名あるが其字は石刁柏と書く。アサツキ、ラツキヨウの野菜は本字を書くとまごつくが前者は胡葱後者は薤と書く。キヤベツはどうかくか甘藍の二字が普通である。

○永平寺の貫主の死亡廣告に病死の字を忌み四大不調の四字を用ひてゐる。不治の病に罹つたことを標示するとて紅葉山人が荘子の語を籍り化及我の二字を印に刻したことを想ひ出さしむ。

榛原製

○今度戦禍に罹つてゐる上海の佛租界には Room to let の看板をかけた家がいくつもある。これは武器を携へて一時の戦時間でも住居の出来る家で女子が男子の身体検査をする所である。或は massage と云ふ掲牌をかけてゐる所もある。ここに奉仕する女性を白色奴隷とよんでゐるのはおかしい。

○支那がいつも國際都市上海を戦爭の舞台にするのは外國の干渉を誘致せんとする為めと解釋されてゐるがこれがためへどうとも思ひ難い。○と云ふのは日本の損害は極めて軽微なるも第三國の損害が殊に多い。損害は死傷二千三百餘名と云ふが、此内避難民の数百名があり、此外人の死傷者も少くなく、英國人の經營する高級華

ホテルが損はれ、外国不少の不油タンクが焼失する等、支那
飛行機の反はかゝる禍は、能外国をして多く自国民を多数殺
害してゐることを以つて見るも、彼等の所為はいやがらせを
やつて干渉を誘致するものと思はれるが、若し干渉到つ
とすれば決して支那に利あることにあらず。為すを得るは、各国
は支那の野蛮行為に対し皆激昂してゐるに然らば何
故に然るか。或は第二義の和国と見做すべき外国排撃
を行ふのであるか。吾人をして斯く疑はしむるものがないで
もない。或は亦去る分列があるかも知れぬ、高射砲の極め
撃を恐れて狼狽の極、無暗に爆弾を投下
したのであらうか。彼等の行動が斯くの如く無軌道で
あるのは、其の真の意を判し兼ねるのでひとり吾等の

みなさんへ。
此事件勃発以来吾等をして特に痛快を感ぜしめたのは
十四日、吾海軍飛行機四十台が長駆南京を襲撃して
敵の本拠を衝きたることで、此の襲撃の目的は主として
敵の飛行機を潰滅せんとするにあつた。南京南昌杭州
等飛行場のある所を襲つて、勇敢に低空飛行を
行ひ、列なる飛行機を爆撃し、此一挙にて敵の飛行機
六十を破壊し格納庫十棟を焼き、而して吾飛行機は
一七機を失ふことなく帰還したが、斯くの如き戦史に稀なる
ことは、大いに敵の心胆を寒からしめ、亦中外の耳目を聳
動した。

八月十六日記

●竹正物に左の如きことが書かれてある

昔有二婦人一、性好二山水一、日々臨レ窓玩視、遂成二心疾一死、而焚レ之惟心不レ化、其堅如レ石、有二波斯胡一、一見驚賞、重價購去、問二其所一レ用、約下明日至二肆中一驗上レ之、及レ至レ肆已鋸成レ片、毎片皆光潤如レ玉、中有二山水樹木一、如二細畫一然……

奇説として讀めば例の支那流の寓言のやうであるがよく考へると至言であると感ずる

自然の山水美を観ることが多く忘れ難い趣があるのか ひたすら山水画家の夢みるもの。山水癖ある所謂名人は歳年經ての美感を忘れず、往々夢寐の間にありくと想見することが珍しくない。山水美が目について脳のある所に映畫のごとく出来上るものが描かれると覚しい。日本画家の山水は後世えうなることを云ふれ、まいるへが、支那人は寫生に大膽なることを云ふ、映畫が結晶して圓石の如くなる、それを鋸で引けば各片に山水樹木の細畫があると云ふのであるがそれは大膽であるのみならず、山水愛好者の愛慕を極端に現はしてゐる。

○ある畫家の猫のスケッチにこんなのがあつた、自分の家の仔猫をよく似て

ゐる、自分の猫は生れて三ヶ月計りの男猫で黒斑が藤墨いろであるのだが猫画から珠品と變めてゐる、母猫

猫のスケッチ

榛原製

は疾患があつたので、仔猫と病気を患り、外に生れたが、仔猫が
同時に病み出しの猫公をつけたので、自分も病む気を揉んで
獸醫にかけたが、幸ひに回復して今はあいんしてゐるが、自分
等が手しほにかけて助つた丈、愛もけ愛も増し、猫も三公
の時からで〇可愛さ教で子供のので、何を差措いても
分を與へるが、愛と云ふものゝ何ものなれど、愛こそは神が合る
ところが、どうらしく思はる、
〇私は前に俳諧の「日々是好日」に就て二三回說をなし
たが更に又思へば、窮しても楽み、通じても楽むとある
楽天の語が面白く、此の俳諧とある、千井秋丸尾は
其著「とはずがたり」に左の如く云つてゐる
「人しきことは忘れやすし、心のとけゆるぶかれこそ
ばるべし、悲しきことは大やうにてすくなかるし、心緒
ゆるびて嫌なれば多かるべし、あなう憂の世や、あつき
つらしといふめれど、うれしきことは多くてかたくしきにはす
くなかるべし、雨ふりつくことを、わびしくおもへど、年の
半ば、日の光も見まほしけれ、うちわすれぬ、雨もけさ
とし九十日まで過ぐることなし
秋丸尾の俳諧も亦日々好日を理解する人であるこ
とがわかる。
〇或る人集に、清冽な渓水を飛足しても、そこにお茶を
構へれば、其氷るひとし、三伏の盛暑を消すまでに
も適し、窮する自ら誇つて~~[illegible]~~子供を伴ふて
割り、先づ氷を飲ましめ時に激賞を於してゐると、

吾等一向喜ばず、こんなものゝ何がいゝのだと云ふて、父の誇りを害
打消した事は余を或る稚態と見れ。何も習慣が性を為すものであ
ある。我道のみを擇んでみるものは我道のみを最上とする
るのは不思議ならん。我も或る度を踰へて目つめれき
ハ人情に違せず、自分は那須の離館に宿つた時、其の箇
所は洗面所に茂る来る山水に嶽を洗つて、鉄都ては
疾痛するほどの一つのめれさに驚ろき、且つ其れを
厭ふたことがあることを想ひ出す。
○自分の過般帰省の折、白書一汽車に揺られ、蒲原の平野
を馳せ、郷土の山水を飽くほど見た。當日好天氣なれ、一天
片雲なく、揮秋既に行つて、稲伸びること五六寸、満目の水
田も氈を敷くが如く、船人と際限を知らず、丘陵の目
を遮るものなく、一望千里樹木なく川なく海なく遠山なく
一天唯碧、人は萬頃の間を行く。此の平淡の山水は自分は飽
りに見慣れた。曾つてものを感じたことなし。一概に平凡視し
ていたが、此日は何故か不図考へた。吁自分が見慣れた故に平凡
視していた山水は、美山水ならざるを得んや。吾人は過てり
と心に叫んだ。恥づる所があつた。吾等は常に其の奇怪不可の重
畳し、飛瀑の激湍の谿を飾る所でなければ好山水とならず
と為したが、今に及んで眼先ハを悔へるを得ない。造化の
作意は千変萬化、豈に其の峰巒泉のみを絶景と為す
べけんや。造化の傑作とするもの、畢竟人間の見て其れを感
ずるものなんや、であるかどうか、廣大無辺のものを敢て
其のを見ずに、造化の誇つて傑作とするものとこれであるの

知れるものではないか、山人間の生きるべき為めには生化き
於て却つて行き渡りの悪作がなしても居るのであるかも知れないのであるが
が、夫の荒ちかしまやうな老山巖、深く落ちこんだ谿、道なきの
峻嶺などが、多く風化作用や浸蝕作用で其の形
を変化せしめて、生化の側では出来損ないとしてあるのであるか
かも知れないのである。人間は却つて之れを美ならば之れを莫けんば
好山水であるといふも、甚だしく自然に合ふ。詩人の謂はゆる好風景の
風俗僧多しとあるが、好風景の所の耕地が少ないから、僧
は生計の為め頼ひ俗となるさるを得ない。絶景の国土の
人民は多く吝嗇であるといふのも、必竟耕地が乏しいから
の事で、人の空腹を厭はず、山水を作らする事(人間は寧ろ…)が生化
の本意であるとも思はれない。平淡なる山水人間の生を営

む所はこれだ。之れぞ造化が得意とし傑作とする所であらざ
るまいか。吾人の地上の山水を見てヨンナ空想に耽けらざるを
得ないのだ。

日本のやうな環海の島国に於ては、然のみならず種々のフエノメナ
のうちのものは勿論だが、之れが山水を化る重大の要素であつて、雷
河流も渓も沢郷も湖沼も皆之れから生じ、雲雨も霧
露も之れから起く。山嶽谿谷の浸蝕作用も又之れから生じ
てくる。殊して日本は火山国であるから、山嶽の起伏が殊に
多く、奇岩怪石、重巒畳峰、火山作用に生じたものが多く
ある。国の狭い割合に山水美の多いのは此が故である。
吾等日本に生れ出たものは到る処に山を見水を見るが、見れば見る
厭きないのは、斯ることなくして一種山水美に対する趣味を養はされるのである

るので、奇抜の山岳でなければ好山岳で無いと直ちに批判するは
けれども、實は山岳を批評する公平の標的を有つて居らない。
奇抜なのが好山岳であるなら、大陸的の廣漠の山岳も島
国的の山岳も海洋的の山岳も皆夫々特徴があり
互いに其美を争ふものであるから、一概に或るものに偏
するは公平を缺くの嫌ひがある。得るべし。比較種々の山
岳の内何れを第一とすべきかは頗る面倒の問題である。
いくら好風景を好むを許し得るとしても其觀撲が偏すれば
箱庭的であつても之れを名勝とするに足らない。尚ほ深
山に深く秘されてある所の好山岳も人の知り得ない所
にあるよりも及第點を與へるわけにならぬ。あれら名画
鑛山などがあつて種々の設備が起り殷賑の事と

なつて俗化した所などは一も落第一寸である。こんな点は寧ろ
うとい者は絶景と云ふのであるが所に觀撲の狭い為め、人工の為
め俗化したるのでも、今厭みのない所も多く少なくない。
究竟常人は眼光が小で箱庭式のものを好風景なりと賞
したがる。海洋の景色でも多くは瀬戸内ですら閑却し、白
馬山や日本ラインの木曽川などを好山岳に加へることを
むくることもしられ。支那の瀟湘八景に倣つて、金鶴八の勝を
数へても實は根拠箱庭式で、武州金澤八景などは論
するに足らず、近江八景にすら賞玩し慣れる。いく
く廣重や北斎が画しなしても甲州の猿橋式のものは皆
現在は殺されて究竟觀撲の数々大なるものとな
ると、てざと除外したかの趣があつて、交通不便の故もあ

清津峽と小又峽

脇水鐵五郎

先月は昨年調査した新名勝として碁石海岸と香住海岸といふ二つの海岸風景を紹介しておいたが、今月は紅葉期の遊び場所として清津峽に小又峽といふ二つの新山岳風景を紹介しておかうと思ふ。

清津峽といつたのでは何處の峽谷だか解らぬ人が多いであらう。その解らぬ人の中で十人中の八九人までが朝鮮の淸津あたりにある峽谷とでも思ふであらうがそれはとんでもないことである。第一淸津はキヨツと訓むのでセイシンと訓むのではない。

淸津峽は信濃川の一大支流である淸津川と稱する山の中流にある大峽谷に與へられた名稱である。淸津川は若しそれが獨立の河川であつたならば裕に東海道の安倍川や矢作川と對比すべき相當に有名な大河川である筈であるが、越後の山の中に偏在して居る爲に日本的に名を知られてゐない不遇な川なのである。かくいふ筆者の如きも昨年この峽谷を視察するまで信濃川にこんな大きな支流のあることすら知らずに居て申譯のないことであつたと今では思つて居る。

上越線の越後川口で十日町線に乘かへ十日町驛に下車それから七八里田澤村の角間まではどうにか自動車を通ずる。角間から淸津川の谷が急に狹くなつて兩岸に樹木の鬱蒼とした岩壁が峙ち瀨戶峽といふ峽谷を造つて居る。半里計りでこの峽谷を拔けると谷が稍開けて小盆地をなし荏澤小出の二部落が川を峽んで對立してゐる。外界と隔絕した山中の別天地である。

小出橋を渡り淸津川の左岸をなほも半里ほど進んだ處に小出溫泉といふ封建時代その儘の樣な溫泉場がある。旅館は二軒あるが電燈がなくて今だにランプを使つて居ると聞いただけで施設のほどが想像されると思ふ。しかしこれから上流四里の間は鳥否馬も通はぬ嶮岨にて三國街道の八木澤に出るまで雨露を凌ぐべき一軒の杣小屋とてない難場で、この難場が即ち天下の絕勝淸津峽であるから、淸津峽の絕勝を探らんとする物好は先づこの小出溫泉で準備を整へ、足ごしらへをせんければならぬ。小出溫泉は實に淸津峽探賞者のために天與の足溜りである。しかしそれほどまでにして難行苦行を重ねても淸津峽を見た後で不平を言ふ人が一人もないのを以て見ても淸津峽が如何に天下の絕勝であるかを想像して貰つてもよいと思ふ。

日本に於ける峽谷を凡ゆる點から評價して見るに個々の美點は別として總點數が最高となるのが黑部で、これを橫綱の位置に据ゑるとすれば東の大關が淸津峽で西の大關が面河溪、これが公平な批判であると私は信ずる。先づ淸津と面河とを比較して見よう。

河としては勿論淸津の方が大きく水量も多い。隨つて峽谷の長さと大さに於ては淸津の方が優る。けれども水の淸らかな點と谷のせせらぎの面白い點とでは淸津は遙に面河の敵ではない。淸津の主要部は玢岩といふ堅い石で出來てゐてその柱狀節理は寔に見事である岩石美は確かに淸津の方が勝つて居ると思ふ。面河には龜腹といふ一枚岩の大絕壁があつて溪谷の重心をなして居るが、淸津の中心には萬壽山といふ巨大な岩山があつてその中腹の黑岩は龜腹以上の大絕壁である。また面河にはその入口に關門と稱する思ひきつて狹い山の狹間があつていきなり人の肚膽を拔くも淸津にも猿飛・鹿飛(しゝとび)の兩狹間があつて谷の底を流れる溪流が隱れて見えないほどの狹さをなす。その他淸津の立雲峽白雲峽などに匹敵すべき偉大な峽谷部も面河には見當らぬ。岩石美は淸津の方がどうしても一枚上である。しかし溪谷美は面河の方が一枚上

これまでは中國筋や九州や北海道の奇勝風景を全く閑却してゐた。交通の便が開けたり電氣事業などが起つたりして昔し知られなかつた新たな勝地が澤山あらはれてきたから昔しの標準などで山水を月旦することは時代錯誤である。今日は科學的の眼識を以つても山水を評しなければならぬ。世界的の眼光で各種の山水の美を採點せねばならぬ。從來のセンチメンタリズムでこんな好所を隠しも採擇するは尤も不可である。世界人の趣味で参照して取捨するで無ければ公平と云ひ得ないのである。

○吾輩では此所宣傳さんとしに、勝區清津峽は貴台が踏破しないが、右の記で其大要を知ることが出来るからここに收めておく。

榛原製

で十和田の奥入瀬渓と稍趣きを同じうする。これはたゞ水が綺麗なばかりでなく奥入瀬と同じ樣に途が水際に沿うて居る爲に樹木の間を見え隱れに流れて居る谷川の一曲一折一飛一躍の狀態を詳らに觀賞し得るが爲であると思ふ。卽ち自然の庭園とでも云ふべき日本趣味が面河に有つて淸津には無い。いや無いのではないが面河の豐富なのには及ばぬのである。また瀑布も面河の方が遙に多い。かやうな譯で岩石美と溪谷美とは互に一長一短相殺すると見てさて森林美はどうかといふとこれもいづれ劣らぬ美大なる針濶淆混の天然林で風景要素としての役目を立派に果して居る點に於て先づ遺憾なきものと言ひ得る。

次に小又峽は秋田縣大阿仁川の一大支流小又川の支流たる本砂子澤の峽谷をいふもので鐵道省の日本案内東北篇には本名そのまゝ本砂子澤として記載してある。谷の大きさは淸津峽の一大支流芦屋澤にも及ばぬ位で單に風景上より見たのでは幕の内に入れるも如何かと思はれる程度のものなれど、一たび氣を落付けて水蝕と岩石の構造との關係を觀察すると興味津々見れば見るほど面白く嚙めば嚙むほど味があつて天工の微妙にして精細なるに驚き且呆れ如何なる名工も自然の前には頭の上らぬことを悟るであらうと思ふのである。風景として幕に入らぬ小又峽も天然記念物としては三役以上の價値がある。（昭和一二・七・二二稿）

滿洲の濕地干拓

大藏公望

大抵の日本人が滿洲を視察するのは大連又は安東から入つて、奉天、新京、ハルビン、チヽハルと見物して、中には淸津の方へ拔ける人もある位の程度で、凡てが廣漠無限の原野を見て歸るが、あの中に、且亦廣大な濕地がある事を知る人は極めて少ない。

自分も實は十數年も滿洲に居つて、此の濕地の實狀に就いて、何等知る處がなかつたが、昨年秋、佳木斯から飛行機で滿洲の北東部一帶を空から視察し、滿洲濕地が吾々の想像以上に廣大なることを知り大いに驚かされた。

例へば松花江沿岸の富錦からウスリー河沿岸の饒河の手前の山脈地帶約五十キロを除き百キロの間は丸で沼地で其間僅かに二、三軒の農家を見る丈けで眞中邊では前後左右悉く水で丸で海かと思はれる程の所もあり實に大沼澤を形造つてゐる。ウスリー河に沿ふた所も滿洲國側に非常に沼地が多く更に南下して虎林から密山に向ふ邊では此亦大凡百五十キロ中百キロ程の間は殆んど沼澤である。

斯る廣大な沼澤は悉く附近河川の氾濫から來るもので、上記の地方は松花江、ウスリー河、及穆稜河の氾濫地である。滿洲には平原が多いのでそこへ一度洪水が出ると其水の引き途が無く、天日で蒸發する以外は何時迄も滯水し、最近の樣に度々洪水があると、結局今日の如く大面積を水が占領して動かなくなるのが、卽ちこの沼澤の出現の理由である。從て此等の沼澤はその水深餘り大きくなく、其下には非常に良質の穰土が存在してをり、水さへ取れゝば立派な開墾地になり得る譯で、何とかして此濕地を干拓すれば此れにより生ずる利益は蓋し莫大である。

曾て米國加州の牛島ポテトー王の片腕となつて其の濕地干拓事業を引受けてゐられた渡邊金三翁が此點に着眼して親しく滿洲の現地を詳しく調査研究の上昨今頻りと滿洲全般に亘る濕地干拓の必要を說いてをられるのは誠に故ある哉で、渡邊翁の如き經驗家から見れば正に天與の富源が空しく滿洲の天地に抛り出されて居り、其開拓は滿洲開發の先驅者たる我々日本人のなす可き義務であると考へて居られるに相違ない。

つにらなば中国筋や九州や北海道の高峰の風景を全く閑却してゐれ。交通の便が開けるカ電氣事業などが起つて昔し知られなかつた新たなる峰々が澤山あらはれてきたから昔しの標準などで山岳を月旦することは時代錯誤である。今日は科学的の眼識を以つて山岳を採しなければならぬ、世界的の眼光大で各種の山岳美を探らねばならぬ、從來のセンチメンタリズムで己れの好む所を偏しても採擇するは尤も不可である。世界人の趣味を以て參照して取捨すべきで無ければ公平と云い得ないのである。

○吾鄉でも此頃喧傳されだした勝區清津峡のやうな良谷は踏破しないが、右の記でも其大要を知ることが出來るからここに収めておく。

榛原製

○吾郷里の習慣ちこの
ら自分のたらきつれ
のハ、農家の結婚す女
が自分の大きさ作りつ
けの臼（臼）どを石臼
を持つて行くことで、臼
を要する場合ハ自分
のものを使用する
又他の女共と臼挽を競争的にやることもあつた。粉挽
唄を朗らかに合唱するのを快としてゐる。死後臼を墓と
することへ粉挽歌もあるが、石臼を墓標とするは面
白いことである

▲婚姻と勞働協力

一、石臼持參の嫁殿と石臼のエイ　こゝらでは近い頃まで嫁に行くには持參道具の中に必ずイスス（石臼）があつたものです、で女達はめい〳〵自分の石臼を使つて他人のものは使はない、そして或る家で粉の必要がある場合には各戸から嫁達が自分の石臼をもつて援助に出掛けた、それをイススのユイと言つたが一面から言へば一種の解放で女の人達が集まつて「イスイ挽き〳〵死んだらごうする、イスス塔婆に建てて吳れ」などゝ粉挽唄を朗かに合唱し乍ら一日暮らしたものです、そして文字通り死んだ後で石臼を墓標にしてゐるものが何程もある、西遊寺の墓場へ行けば今日で見られましやう（西蒲原郡越前濱村古川金一郎氏報）

（吉岳路所載）

○新井郷治水碑稿漸やく成る。字数八百を限度トせ
初稿二稿略々八百字に垂んとしたるを漸やく冗字
を削り百字を減ずるを得たり、金石文ハ簡なるを要
するを得るを欲す、時文への缺點の往々冗漫に流るゝは在りし余
が甚心ハ簡約事を悪するは在りしも文章ハ尚ほ自ら覚
へず、但し

草稿の紛亂を恐れて、且らく左に
収むることゝす

昭和十二年八月廿一日

新井郷川治水碑

吾越ノ蒲原郡ハ其地名ノ如ク在昔蕪蒲相望ムノ地ニシテ天正年間溝口氏封ヲ新発田ニ受ケシ時封土ハ概ネ沮洳ノ沼澤ナリシト云フ爾後数百年開墾干拓ヲ経テ今日ノ沃土ヲ来シタルモ今尚ホ舊態ヲ偲バシムルモノニ福島潟アリ現ニ五百町歩ノ水面ヲ存ス之レカ排水ノ河川ハ即チ新井郷川ニシテ駒林新発田ノ二川ヲ合セ松ケ崎ニ到リ阿賀野川ニ合シテ海ニ注ク其聚水面積卅四方里流路四里ニ及フ沿岸ノ耕地ハ概チ低平ニシテ落差ナク毎歳春季ノ融雪ト夏秋ノ淫霖ニ會スレバ諸流一時ニ増水シテ氾濫ヲ来スヲ常トス尚ホ同季節ハ阿賀野暴漲ノ時ニシテ諸流ノ溜水ハ共ニ悉ク福島潟ニ逆流シ洪水瀰漫吐クニ處ナク萬頃ノ良田忽チ泥海ト変シ人畜家屋ノ被害十数村ニ及ブ其惨状名状ス可カラサルモノアリ此水害防止ハ早ク寳暦年間山本丈右エ門ニ由テ策セラレ爾来幾回カ企図サレシモ皆其功ヲ奏スルニ至ラス大正二年阿賀野川逆流ト共ニ水害ノ因ヲナセル加治川治水工事漸ヤク成

ヲ告ケ大正四年四月踵テ阿賀野川改修工事ノ施行

セラルヽニ至リ[redacted]降シ治水ノ気運漸ク熟シ[redacted]新井郷ハ

関係諸村ト本川人治水ヲ策スルハ此時ニ在リト[redacted]蹶

起[redacted]シ大正六年水害豫防組合ヲ組織シ阿賀

野川逆流防止ト共ニ松ヶ崎濱村裏山ヲ開鑿シ

悪水ヲ直接日本海ニ放流スルノ案ヲ立テ大正

九年始メテ起工爾来着々工ヲ進メ遂ニ阿賀逆流防

止ノ水門通船ヲ便スル閘門魔所ノ称アル一貫

堀ノ彎曲水路ノ改修等ヲ成就シ昭和九年三月

全ク工ヲ竣ル[redacted]起工以来実ニ十九星霜ヲ閲シ前後斎

昔日ノ患ナク関係郷民始メテ堵ニ安ンズルヲ得

タリ此恵澤ハ偏ヘニ官民共同努力ノ功ニ由ルト雖

当事者拮据経営ノ労亦忘ルベカラズ総工

事費ハ約六十萬円内四萬[redacted]十萬円縣費

廿八萬円組合員擔廿二萬円トス今茲ニ治水ノ梗

概ヲ叙シ併セテ功労者ノ名ヲ右ニ勒スト云フ

字数七百二十八字

○自分の此今はどうしてゐるかと云ふと毎の炎熱と戦ひつゝあつて、敢て避暑地へも行かず、毎年のことであるが家に頑張つてゐる。北支に戦つてゐる将士の苦難を思へばやんぬ義理にも炎熱に苦情など云へる口でないが、ところが凡夫の悲しさで、日本気熱は矢張り日本気分で、九十度を越へた熱さを怖こうがる。照りつけ照りつけたが、二週間に一ぺんでも雨が来て、偶々雷鳴があつても驟雨を催しても、雨はシトマキ程度で其の各番ろうまの恐怖する。但し幸ひまだ人の肺腑を濡ませる麦酒の如き雨一滴があつて、昼も晩も冷蔵の麦酒を傾けるので、敢て旱魃を感じるのが何よりも。日中はからだを持て余しても自分に習慣のない午睡を貪らんとして横臥すれども睡眠を得ないので、年寄りの冷水

旅行記を読み殺しても一向に興味がない。初めて毎日二時間位何か無沙書をして見たいと思ひ出し、十日ばかり筆を把つて頃日譚語と名づけて、短文随筆を百則書くので五日間を費し、又人の勧めるまゝに、木版竹頭と題し印譜を五日間印録したが、コンなことをやつてゐる内の気分の張合もあつて、暑さを自然忘れもしたが、さてそれが済んでの後へ、郷関の知友の碑稿や二三雑誌社から嘱まれた寄稿を兼ねて書くことも仕事とするのだが、のこともなく、来客も暑中メツキリ減つて客を待つ要もないから矢鱈に市中に出かけては暑さをデパートの食堂に冷し~~麦酒~~ビールで渇を医するやうのことだ、朝は五時からでも女中と共に起きて新聞の戦報を貪り読む。

おのが職分の仕事の一つである。デジ丈が歓悦を求むるも亦一
つの仕事であるが、兄弟一日が長く過ぎて、追
迅地獄の刑の長きを歎ぜしめる。近年の筆硯は例を
して随筆を書き溜めて印行の準備をすることが數
年續いたが、本年もまた成らず、これまで知らさる男
熱を餌すべき年歯の漸やく高かし(?)氣力の衰ひなる
因るか、

昭和十五年八月廿一日

ば五十嵐力博士の近著平安朝文学史を讀んだが、今ま
で氣づかなかつた一事を知つた。それは空海の著であ
る有名な三教指帰と聾瞽指帰とは我國に於ける最も古き漢文
小説であるといふことである。此の三教指帰と云ふ書
名は空海が後に改めた名で、此名で見ると儒道釋

三教の論説のやうに聞えるが、實は聾瞽指帰
が最初の書名で、其の序文は唐の張文成の遊仙窟が
引合に出され、亦其書は存在して居るが、日本人は昔から漢
文の淫靡猥褻の説を引き、此等の先輩の著すところ、皆
後識の準的とならぬとあつて、吾が著すことを
こゝいふ許りは小説的に筆を染めて見れ空海の若
氣の識であることがそのめぐし内容に於ても卑猥の
ことは云へが、潜猥さを示しても、宗教書と目すべき
あらうへ。空海は後年改題されたが、若氣の識を
蔽はんとしたのは葉と思はるが、漢文で書かれた小説
としては、日本人の臨説のが先輩でこれは次に述べる
聾乃ち聾瞽指帰であつたものが五十嵐の説

である、尚ほこれに就て去歳自身の此説を立て此所以を記した印刷物がある。巻末に収めて置いた。尚ほ仁孝天皇の四十年忌にあたるのを奉祝する為め真福寺の僧侶が寿歌を献じ又序に我国語を賞揚したことも同じ印刷物に詳述せんとしてゐるが、これも併せて一読すべきものである。

〇上海戦は日一日激しくなつてきてゐる。敵は衆を頼み寡兵を侮つてゐるが、吾軍は毎日一塁を抜き、飛行機は砲台を爆撃してゐる。或は格納庫、或は飛行造廠、或は火薬庫を爆破し、寡兵能く戦つてゐる。吾が一兵は彼の百兵と相当る。某戦と吾軍十兵を損し、敵への千倍の損傷を被つてゐる。一騎当千とは吾軍の事である。未だに宣戦は布告せんが、吾軍は勇猛果敢不撓大義を守つて、国際関係を憚けて平和の終局を企図してゐるが、彼等は吾が此態度を見て降参ありと逆宣伝をなして居るなどは笑止至極である。昨白木屋の事変に際会してを入れが、敵のポスターにいろく出てゐた。日本を攻撃呼はりしてどんなにも悪口を並べてゐるのを見ると寧ろ嘲笑を禁じ得ないものがある。彼等は抗日の大勢に支配されて排斥の要人も今の如く去ることが出来ない。彼等は両国の為めを忘れて破滅に陥ることは火を見るよりも明かである。外国ではまだ干渉の態度も多いが、列国は連盟へ察する支那に通じてゐるらしい。何時これが我軍の態度を覚悟のことだ。結局列聯とも戦ふことになるであらう。我軍の動静は極秘に附されてゐる

が既に手配がしてあるやうに思ふ。本當の戰鬪の苦を敢てし
て戰ふ時であらう。從って艱難でも赤虜共が大軍の出
征は其内に事實となるであらう。支那の内部の恐らくは内輪割
れがあらうと拗れてゐるが、それは彼等が連絡連殺で利
害除味の無いことを自覺する時であらうが、それは決して
遠いことではない。蔣介石の本意は凡てを知ってゐるが、彼が混
亂の巻きぞへを食って國を迫るか知らないが、記錄者は
支那が此運に迫られた收拾の向きを見り得るものは蔣のみ
であるから、蔣の政權は持續するであらうと言はれてゐる。
(八月廿三日記)
支那は日本に勤めて連戰連敗であるが、北方の上海でも
最早時まで殺へてる戰爭戰鬪は進んでゐる。兵器も新式

であることは争はれない。北支では我軍人の深く一路進んでゐる、
飛行機組織も新式のものが多く、九百台もあると言ふが
操縦者が機關であるのでアメリカ機械をそのまゝ使はれぬ
事、分解も出来ぬ。自から獨立して機械を作る能力はない。
操縦者は外人を用ひてゐるらしい。何分にも教團的精神
が缺けてゐる。戰術を教へても戰爭の實際(支那兵)が從って
ないことく、日本とは戰爭の十年早やいと云ふものが本當に
三十年遅れが更に支那の進歩するであらう。大なる進歩を
するから到底支那は日本の敵でない。支那は道徳的に到頭
國を滅亡に歸するものはない。ソ聯の今は既に内から支
那を如何とも出来ないやうだが、それが公然支那を援けても
みて抵抗することはするが、それは今後の成行を見るのは

ないが日本は之れを敵として戦ふ用意があるまいであらう。然し
ソ聯は先に内部にスターリン反聯動があつて之れを剿絶し
た直接ではあるが、短い間の歴道は一相異を動かすことはあるまいも
どんな叛乱が内部に起るとも限らん。且つソ聯が支那を援く
ることはするとも、欧米は恐らく黙過は出来まいであらう。独英
は北兵で既に一つの戦争をもやるし、ソ聯が支那を助けます
ることは、日本が支那を略するとは何等相違もないのみならず
赤化は欧米の最も恐るる所であるから、一層に世界的大戦と
ならぬとも限らん。兎角支那も露西亜も一応日本にうたれ
怒りもあり、復讐の念もあるから、いつか如何しても之れを
打ちのめすまではならないが、東洋の平和は来らない。右等を総殺
し持つての日本の宿命かもしれんが人間を殺すことを何
とも思はん、あ奴を対手にすることとなれば出来る事らは運
命である。　今日防空演習のあるで、サイレンと砲
銃の音をききつつ之れを録する。　八月二十三日午後

○安東山子の和歌を評し、嵯峨天皇御宇の隠遁
僧玄賓僧都は其の僧としてあるべきことをなしつつあつたこと
が江談抄に書かれてある。歌は由つても知れる。彼の伯耆
師に任ぜられた時辞退してその歌は

三輪川の清き流れにあらひてし
衣の袖はさらにけがさじ

大僧都を辞しての

とつ国の山水きよし事おほき
君がみやゐは住まぬまさるなり

と詠み都を離れて待れ未会はせぬ人（等が）衣を供養するのを厭つては

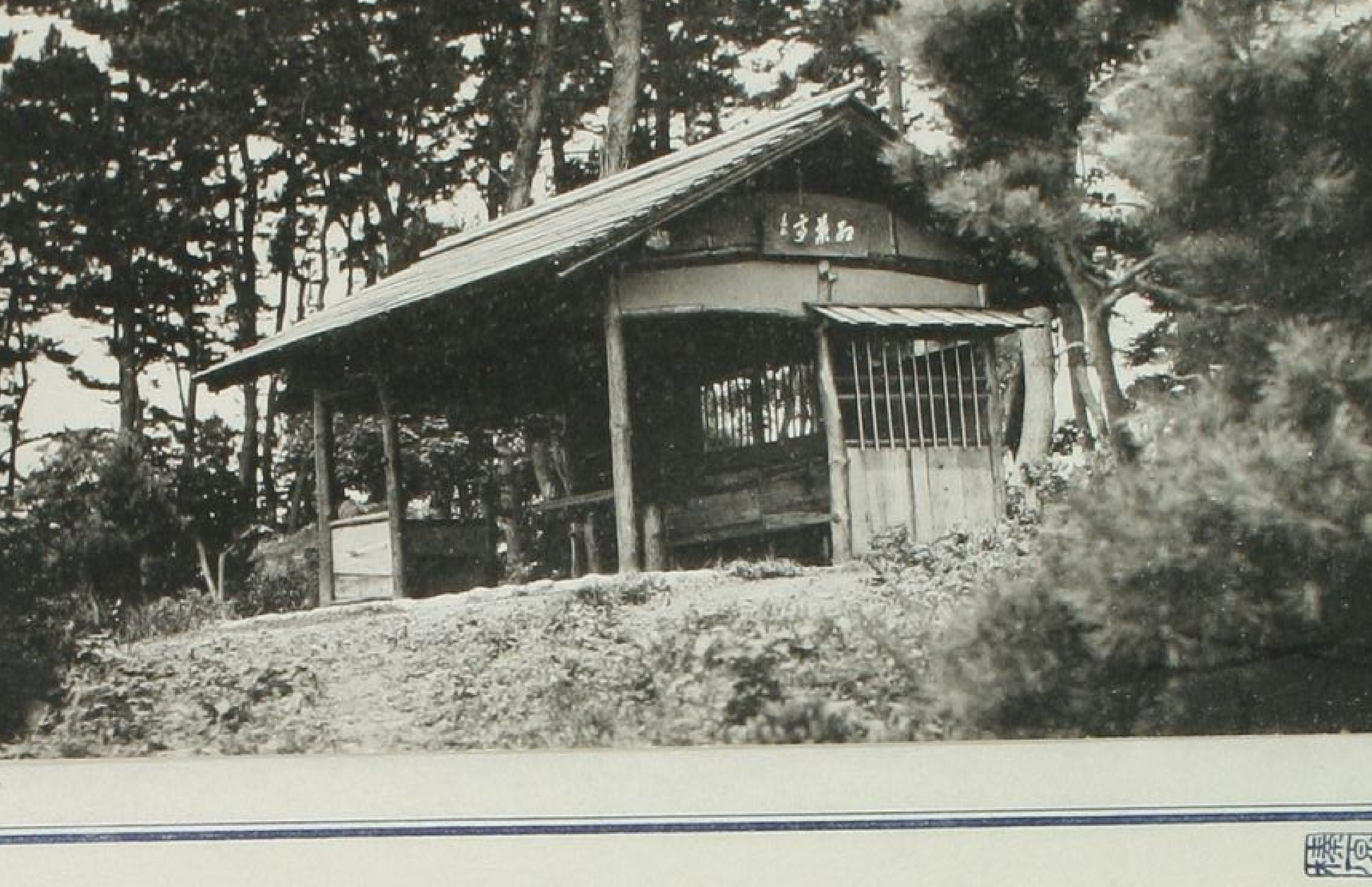
三輪川のなきさの清き唐衣
くると思ふな得つとおもはじ

待人へ何とも暢つて遂に田に立つ案山子までが風に揺れて手招きするのを、お前までが俺れを相手にはしないのかいやなこと〳〵と歌つたものが例のあの案山子の和歌である

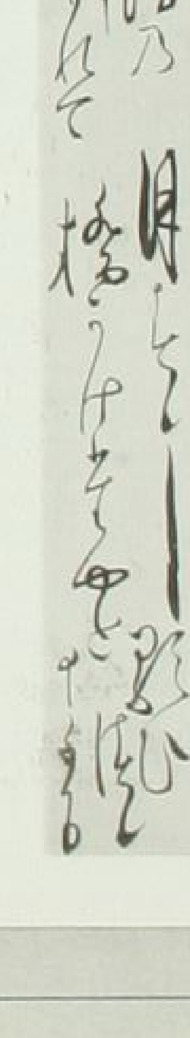
足引の山田のそほづ（案山子）おのれさへ
我をほしといふうれはしきこと

と古今集に詠人しらずとなつてゐるが玄賓の作と推定されてゐる。

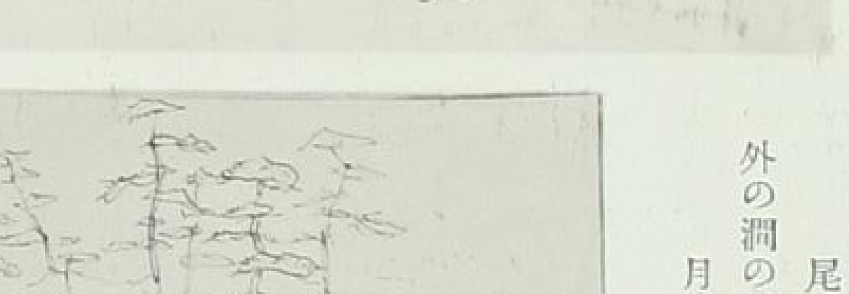
○佐保川小木は秋桜山人の句碑を立てたので、其側に四阿を設けて休息所と云へたらとの計画があり、小木の教育者其後原徹から今は秋桜亭の二字の揮毫を依頼してきたのが本年の四月中であつたが漸やく出来たと云つて端書を寄せて来たが未だ落成式を執行すると云ふことだ。秋桜山の縁で独書を佐保に留めることになつたのは小幽な縁因である。



榛原製



句碑原本
尾崎紅葉先生筆（短冊）
外の澗の月にうかれて
月涼し橋かけたやと歎ひつゝ



扁額原本
市島春城先生筆

亭舎全貌圖
本郷高德先生案

一　今次の日支事変で日清戦争の事が絶んずる憶ひ出され、ラヂオにも当時の軍歌が放送され、新聞にも当時の風刺絵画が掲載せられ、而も当時と大なる相違は新人が日本在留の敵国人に些の危害を与へず、俗辱の言をも吐かぬことである。大国民の襟度が知れる。彼等のポスターは日本人を泥棒呼ばはりをしてゐる。日清戦争当時我国が彼れを罵しくてチャンコロリッウの絵画などで嘲笑して露骨に罵詈であることを考へても、国の襟度の甚しく異なることを想ふ。

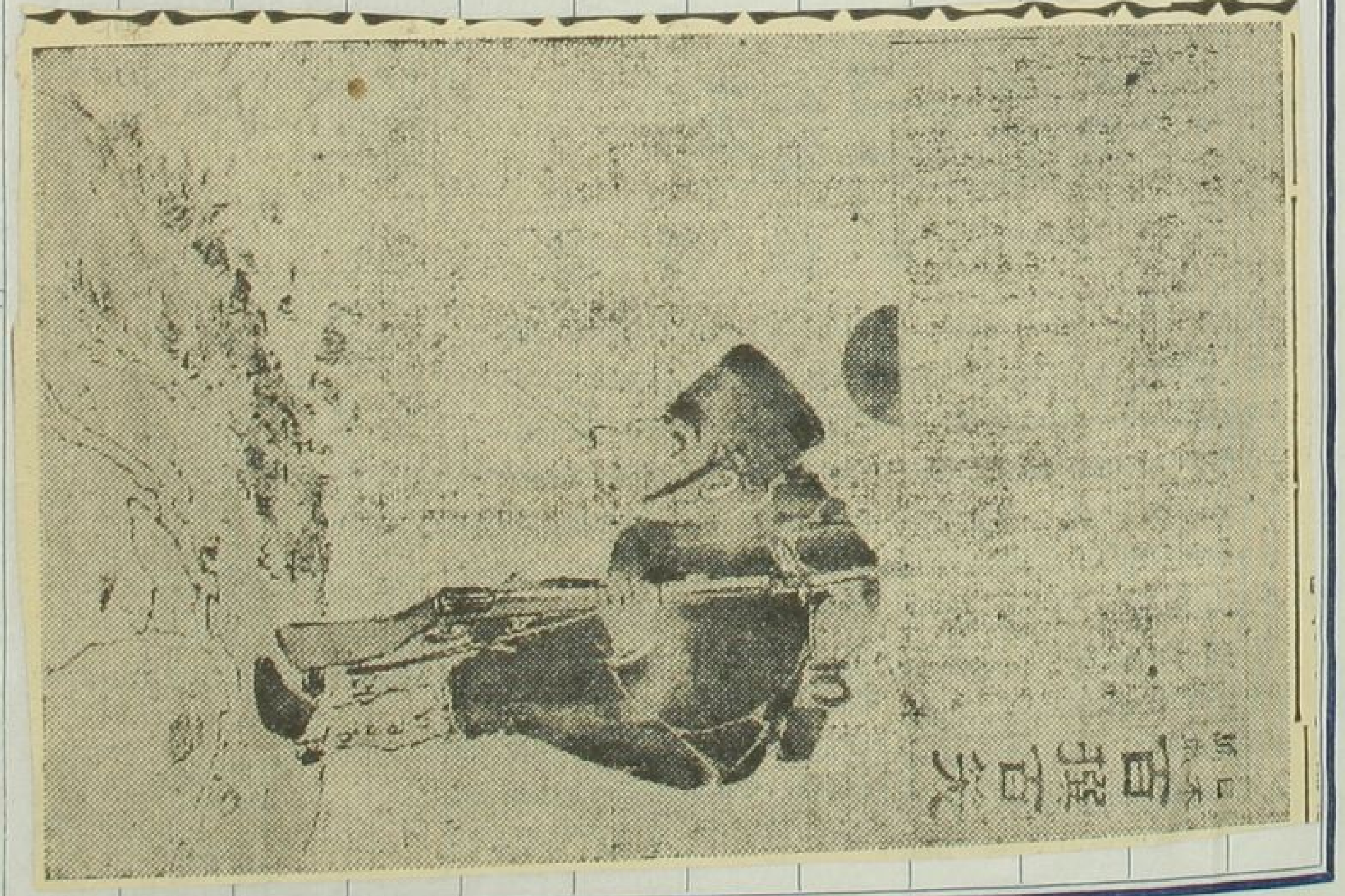
日清戰爭の版畫　（一）

日清戰爭の時には、いろ〳〵の版畫が發行された中で、小林清親の『日本萬歳百撰百笑』は最も人氣を博した、當時清親は五十歳頃の練熟期で、之れにユーモア文學の大家骨皮道人の文章を併せたものだ。いま其内の二つばかりを抄出して見る——

○飛んだ老大國

清親の繪は、日本兵士が支那の國土に立つて、口をとがらせてブー〳〵と吹き飛ばしてゐる圖で、骨皮道人の文章は、

かくの如く先づ地球上の風上に立て見ると成程老大國といふだけあつて可哀想にもう足も腰も立てない老耄らしい、けれども彼の老耄の癖に、法螺を吹くに妙を得て居るとは是も一つの不思議だ、馬鹿にも一藝とは大方此奴等の事を云つたものだらうよし〳〵其方で法螺を吹くなら此方では世界に類のない神風を吹かせて懲かしてやらう、イヤ待てよ鷄とを割に牛刀を用ゐず神風でなくても乃公の口で吹くので澤山だ。ブー……ソラ旅順口が飛んだらう……ブーソラ奉天府も飛だらう……ブーソラ見た事か北京までが形なしだらう……是れぢやこな徽塵でなくて支那徽塵だと面白半分に、頻りにブー〳〵と吹き飛ばしてゐるに引替へ、吹き飛ばされる、チャン的の騒ぎは一方ならず『コ……是ヤア大變だ〳〵、跡は野となれ山はとゝぎす、ペキン缺けたつて構ふものか、サア逃げろ〳〵逃げるのが此方の十八番だ、マゴ〳〵して居りやア、北京所か、大切な首までが飛んでしまア



日清戦争の版畫　（二）

○歸化の仕度

清親の繪は支那人が、日本の着物に着替てゐる圖で、骨皮道人の文章は、戰爭地のちやん〳〵が大層日本人の慈悲深い心に感じたと見へ、同じ一生を送るなら此樣な野蠻の國よりは、日本の樣な文明國の民となれば世界中何處へ行つても、幅がきくといふので急に日本人になりたくなりし一家親類とも相談の上、家財諸道具をも取片つけ、サア是から愈々日本の地へ出發しやうといふ一段になつたから先づ第一あたまにブラ下つてゐる尻尾を切すて衣服も從來の支那服では駄目だと豫て用意の日本服に着かへてゐる所へ、懇意にする男が來て『支那の衣服と違つて、いやにだぶ〳〵してゐるぢやないか』といへば、主人『ナーニ是りや日本服を着たから肩身が廣くなつたのだ

一 日本の仕合とも云ふべきハ支那と戦ふ時其の戦場が支那であるから、彼等の此の戦争で名邑をとかくどしに破壊されか園り知れぬ。燕京の書庫や萬寿山ハ災害を免かれてみるが、彼等が失ふ所ハ人と金の丈ひである。其の戦場たらしめれ敗を以つても失ふ所ハ莫大である。此を換へても日本が戦場であつたら、どんなであらう。想像するすら寒心に堪へないものがある

一 支那の戦略ハ可成戦局を擴大せんとするに在つて日本ハ可成局部的ならしめんとするあり。支那の戦争ハ長びかせんとするに在つて日本ハ早く戦局を収めんとするに在る。彼れの戦略ハ外国の干渉に依係

せんとするに在つて、日本は之を避けんとするに在り、今ま進んで日本が宣戦の布告をせざるは、彼れの意を擲くのであり、戦争長びけば、列国の横合より躍り出ることあれば、早く勝局を収めるの必要があること陸相の言明により推せらる

一 上海事変起つて海軍の為まず日本し陸兵を神速に送るべし、之れ一は日本が救を正しくし兵を出すことを中外に示す所以なりし、而も備なきことを欲かざる所以である。

一 上海の敵軍は十萬の多数で飛行機は爆破が大いに果的の我海軍の飛行機で活躍し此の最効果的であり、陸兵の上海に到着さる前、敵の

飛行場を衝き、百五六十台の飛行機を撃滅し、敵の損害は決して少なからざるに、吾の損害は戦ひとつあるに足らざる軽微のことであった。海軍の努力に帰せざるを得ない。

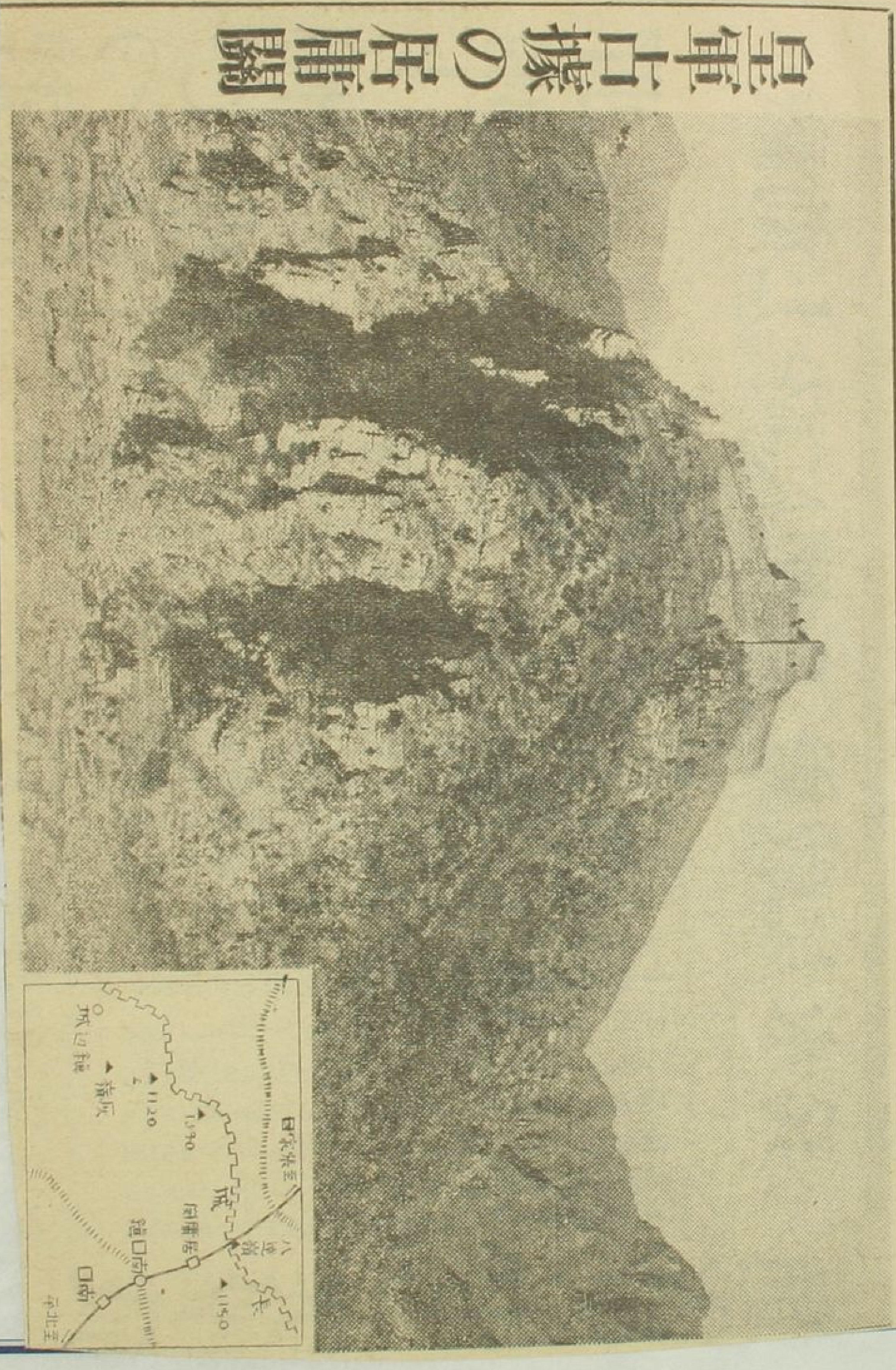
一 命じて上海に陸兵を輸送するに進んで敵前上陸を敢行し、成功したが、併し斯る場合に備へてこれの兵を率ゐる幹部を選抜され、決死の兵員を募ることで、此の敵前上陸をなし遂げた犠牲の甚だ多きが、敵の心胆を寒からしめ、敵を殲滅せしめたる此の敢行にある。

一 支那の無軌道の爆激は往々敵を四百余州の三四億を殺傷し、動もすれば自国人民百人を一挙殺傷す

の残虐を敢てす、其故不理解に執して敢て不理解
なる者が、彼等は高射砲の射撃を恐れて頗る高
い上空より投弾するから、又市外の畑に落るのが
ある、甚だしきは盲爆であつて、外人は之を恐れ●い
甲艦の位置を日本の軍艦の位置を立て隔離し
めよと云ふとの事だ、此盲爆は狂乱的のもので、いくら
離縦様なるのは限らぬ、彼等の高射砲も亦無礼
道でも其の落下傘の米国旗艦の甲板に落ちる二十の人
を殺したのである。

一 今次の戦争で従来を悉くしたのは記者陣の奮
闘で、彼等の多くの第一線に立つてゐる、これまでの戦
争までは記者の如きは本営にあつて将校に就て歩く
所を日報したものであるが、日本の戦報はあらゆれば
慨けるまとして勇を奮つて危険を冒し為めに命を
殞されたるもある。従て彼等の書く戦報は実に生
彩があり、其の境に在るの思を為す、記者の精神
に一大進歩をなしたことを見るべきものである

一 軍恩献金の為めに寄献金恤兵金の多いことも未
曾有のことで、一朝の飛行機献納で五る万円を募り得れ
るもいは幾くを何人も予想しなかつたことで、而して各社の募
金集者振は陸海軍の献金をしたものと公平心から
に二千万円にも達するであらう。之は帝国公の国
際で、一つは日本の国力の増進を示すものと見ることが
出来よう。

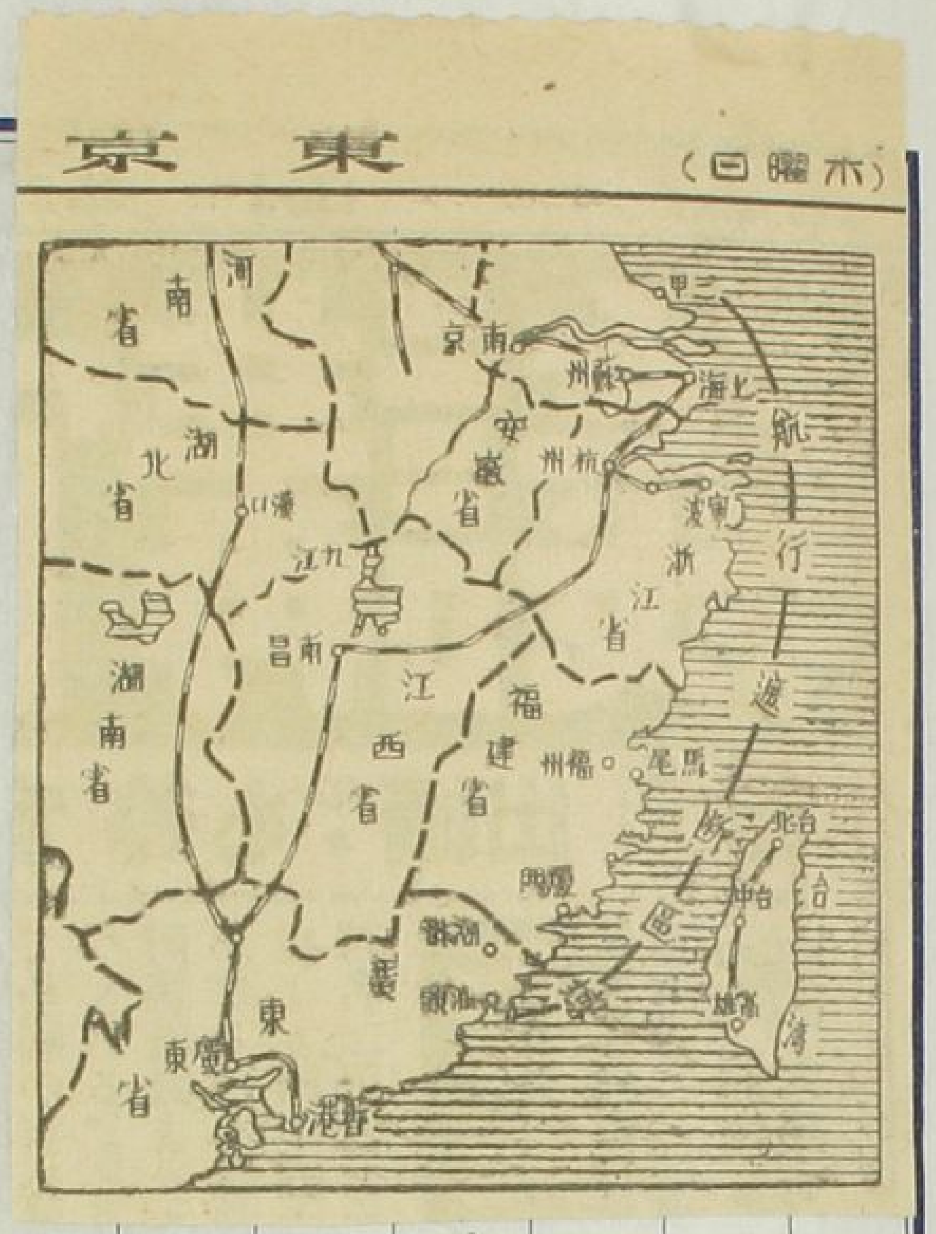


皇軍占據の居庸關

一 今までの戦で唯一の山嶽戦は居庸関の一戦である。
北の要の難攻不落ともいふべき天険で八達嶺附
近の要塞で高サ二千五百メートルもある高地で築城
もあり人家もある所だ。更に敵は塹壕を深き地雷
火を伏せて相当準備ある所で、我軍は其の険路と
険嶇と困難を冒して一夜で抜き得る所であるが、
遂に占領しそのの絶険の苦戦を想ひ起さしむ。
北の険の萬里の長城に於ける一の要害であるが、さて
絶勢の武功すべきも一蹴もさる。長城なほ数々難き
知るべしだ。支那歴史に趣味をもつ我北支の戦跡
を読んで興味あるを得る。

以上 八月廿五日記

榛原製



一　吾海軍第三艦隊長官ハ昨廿五日重大の宣言を発した、其れハ揚子江口北岸北緯三十度より広東汕頭に至る支那沿岸六百八十海里に至る中華民国沿海を日本海軍力を以つて支那公私船の航行を遮断することを宣言した。此の場合日本並に第三国の船舶ハ此区域内に出入することを妨げずとあつて、支那が外国の名を藉り軍需物資を輸入することハ此の宣告以後吾海軍に由つて検閲さることとなつた、此の封鎖ハ恐らく支那軍の致命傷であらう。

〇風月堂と云ふ菓子屋の支鋪であるが西洋料理店としても
もえや支鋪と云ふ得るは年を経て居る。自今といへば絶今
この料理と口にしたのは浪花時代から銀座の二階に
日本在来を会堂にしてあつたが、後に今紀念と共に焼失
飛田主人支店があつてやはりあるが古物造りの座によく
主客のつれ、それの上空の屋路の風月堂をよく会ラニ午
を喰ひに行く。〇いつも風月堂に行く毎に思ひ出すのは伝
逍遙が文芸協会で演劇改良を目論み初頭に
エプセンのノラを松井須磨子演じた時、風月堂
主人が会等協会員十二三名を飛田の小路の支店に
招待したことがある。余輩も壁画に此のノラ劇に因んだ
松洋画が新たにかゝれてあれし、洋食堂の名も稀で

海老と蟹

菓子店があるので、偶然ここでパンのソウスに喰ひま
いつも箱つておるとおかし
く感じたこともあつた。さて
食卓に就くと驚ろいたことを
るいメニユーは即刻さされ
料理の名がどれも外国の文
字の因んだ名であることを
であつた。此の家の主人は外国
で割烹修業をしたものであるけれども新しきもの文学
通であるとの思はるるも
主人も執へもあれからも程々

の流を汲む人が風月堂の店は桑名屋俵が命名したので東
坡の赤壁の賦の風清く月白しから命名したので菓子屋
には相応しい雅號である。當時の看板は旗された
印を見ると清白の二字をあしらつた氣が付いた。此れ程
の名品である幼稚園時代までも覚えて居る。自分が少年時から
宿醒を醫する藥劑は行德の里の鰻と覚えたのは
此時代であったことを憶ひ出す
竹葉亭も有名な丈店があつて數年中より交字するまで
中元や歳暮に鰻の折を寄越してくる程の得意先だが
震災前に蒲焼きつの家で葉巻に言葉をやつてゐ
た。鰻屋と云ふとどこの家かも洗濯鰻を焼く香氣
が高く漂ひ火を煽ぐ團扇の響が手近く聞えて

のが當店の例である。竹葉亭の主人とは趣を異にして
居るが清澄の性質が寧ろ其の間から上品のものを用ひ
たが自分の店の作り鰻蒲焼を嗜まれるよりは寧ろ此家
での方を出された。實は此家の主人別府某が美術品
の趣味があつて光琳派に其流の作品を多く蒐集して居る
ので、之を見せて貰ふのは嬉しい為めもあつて時々出かけた。別
頭あるが其の作品の或るものを展覧したが、決して
成金的に富貴の物ばかり集めた様でなく、茶器の道具に
であつたのは感心したことがある。大震災で全部
亡くしたのは惜しいことであつた。斯る縁因にあつて別府と
いふ人の思ひ出は特に多くあるが、震災後三木武吉の
妻が牡丹と云ふ割烹店を始めるについて自分も頼まれ

所蔵をやつたが、別府は矢張り指導者側の人であつたので、一種
しも始めて通つていろいろ趣味談をやつて見ると、書画ばかりでなく
庭の理解があり赤絹店の人格を有することを知つ
た。牡丹より桃梅一幅もあるので別府はいろいろのものを持集めて
生盆を飾り、料理屋経営をも試みた経験を積んでお
き、新宿の鋳茶屋を例に取つて教へる所があつた。當時
彼の知る寿司の蒲焼めぐりの料理をやつてゐるが流石
に上品である。別府と種々話したことなどは皆忘れてしま
つたが、殿の夕しはよく覚えてゐるので、次の或る時
は、夕しの宴を催す出しをすると云つてみるが、此こ
とを別府に話した時、別府は笑つて度を仕つた。夕しなど
の宴を為すべきものでも、新作を作つても五流まで出来る

と話したことを今想ひ出すと、尚ほ他に想ひ起すことは築地
の田舎で飲んだ時、女中まで入れて来る客が最も多量に飲
焼を食べた時の誰かと共に、一人の女客が四人前平らげ
ける人があつた。本屋の人がと共に、自分の中學時
の娘がもあつたと云ふ事を八ッ當りに考へて見ると、果して然るや
あつたことがときどき思ひ出す
自分が明治八年に東京に来て天麩羅の味を覚えたのは丁度
とも友人高田北峰の茶湯に由る事のである。東京大
學の同窓時代の北峰は明治の御所町に住んでゐた日曜の
朝の例として高田を訪ねたが、あの人は朝寝坊でいつ訪ね
ても寝てゐるので自分が起し役だ。晝はいつも高田の宅
で食を取つたが、天金が近いので、いつも天麩羅が馳走

だあつた。其頃の一人前盛のちよく／＼量がカキアゲほどの
中皿に一杯になる程であつた。追々味を解して天金に生まれ
ことも既に何年かといふ住んだが、あの頃天金の店は如何にも
小さなもので、店先きに油鍋がかけてあつて油がたぎり店か
ら二階へ上ると僅かに六畳二間位といふ狭い室に時刻
によると、三四十人の客が入りこみで割據してゐる。女中が番
頻に運んでくるのだが、なか／＼手間取れて、どうしても一時
間位は辛抱せねばならないやうな仕末で酒を飲むものは
おとなしく待つてゐられるが、酒を飲まないものはよくも辛抱が出
来たと怪しまるゝ程ここ手間が取れた。それを不平も云はず
裁判所の控所みたいで待つてゐるやうに默坐してゐたことは實に
不思議のやうである。然し客が多いことと云ふと、揚げ方

を粗略にしないのは天金の信用があつた。自分は天金の揚方
を見ても大ちんだよく徹底してゐたやうである。當時支えたのは
は此家の特有の菜漬であつた。天麩羅には大根おろし
が附きものであるから、大根葉の方を大分に漬けて或る方法で
漬けると見えて之が名物であつたので、自分なども時々は替
へて下おとしたことがある。なんと云つても狭隘の入り込みで
肩と肩とが相摩するやうな雑沓の中で二階の隣りとしても
立上る油烟をも物ともせず酒も頼きれないらしい
酔かけの女中も気長によく辛抱したものと、天
金出身の桜井池田大任田などに会する毎に、其のデップリ太つた
からだのよく肥えた似ても居るのを見て、当時を追想す
ることが毎々ある。

自分の知つてゐる料理屋で一趣一伎いろ／＼の変態かある
来次の三河屋と云ふのはあの界隈で第一流であつたがもとは
微さな居酒屋であつた、客も上つたが家の位置も後の方迄
通つてゐたし、田舎者から御上合せのものまでもあつたが忽ち立
派な農民になつた料理がよかつた為めでもあらう。ひどく繁昌
したのだ。あの家に伝はれる世中がある客の喜を知つて深山の手
を産み、待合を三河屋の隣りに出したが、宏壮を至家と争ふ
子どものまでであつたが、いまでこそ云へそれが自分の若い頃に日本橋区
の横山町の角に尾張屋と云ふあるこの蒲焼で客を呼
んだ家があつた。こんな一方の入口があるきりで他の一方の口
から入ることを許された料理屋であつた。自分が三葉会と云ふ社に入社
した時に浅田部長に招かれてここへ来たのが最初だ。其れ三

菱の社員の羽振がよくてどこの料理屋でも持てた。自分は時
刻を早めに此家に入つて坐敷に通ると、二人の芸者が花を入
れてゐた。其花の盛裁を惜しく気もちよく切つてまだ風情の
あるものであつたが、其江戸前の気分に感じさせられた。席は
奇麗でもなかつたが、料理は頗る精選されてゐた。殊に自分
をアッと云はしめたのは、海鼠を細く千本に切つて山葵を點じ
た庖丁の冴へであつた。日本橋の春満や附近の露地には島
村と云ふ小料理店があつた。ここは二但位の客を容るゝ程
の一席すらろく／＼。後ろの二階を連れが自分が始終居を
初めて訪ねた時は、四畳半に六畳位の一席すぎなかつた。配膳に
より其家の娘が席の入口に杯を置き乍りつつも客に接する
やり口だ、酒が冷きすぎると手を鳴らすが其気をきかした位だ。娘が何

用と云つて来ると、丁寧にどうぞお酒迄頭を下げて頼むやうな
仕末であつたが、料理は三種位しかなかつたが、好みで材料も補給
もよかつた。ここの主人が可なり変物であつたらしく、念心の材
料が無ささうだと直ぐ売切の札を張つた。美味が為め自分
等も時々無駄足を運んだが、中華亭と合味を競ふ比
[redacted]が、もう今は無い。
自分が好んで良く出かけた料理屋の柳橋の橋本であつた。あの家
は江戸趣味を味ふ無二の所で、備附も建築も料理も甚だ
良く通つて、雪見に出かけたこともあつたが、何分にも柳橋近く
本堀が近くて泥濘で埋まり、後には[redacted]附近が私有地
の貴家と云ふ、風流の昇華ちのあるらん活動写真館となつた
ので橋本も遂に亡びた。

日本橋の樽、原本店の隣家に柏木と云ふ料理店があつた。もと
は相当によかつたらしいが、移り振いふ家で鰐集会屋
となつた。自分の日の人々と捉まんで二三度行つたこともあるが、現に未
建の時であつた。橋の袂にさいやと云ふ入り込の飯屋があつた
魚河岸近くであるから、材料は極めて新鮮であつ
た。多分河岸で買ひ出しして出かける商人の為めに出し
た飯屋であつたらしい。自分のある時友人五六人と共に
こゝで午飯を志れた。甘鯛を注文したら所がなく
手間取れて随分待遠であつた。あとから入つてくる客には
美しくの品物を運んである。自分等は先口である
手間取れた。やつとの事で運んで来た甘鯛は
切身である。目の下一尺もある大きなのを二六本、素火

が焼いたから手間も取るまいと理解したが、小児も加はつてゐるのに一尾づつの甘鯛は過ぎたことだが、切り身などは一つづつといと言ふ所は江戸前の見識があるのだらうと思ふと、他の客をもやかましく満喫したのであらうが、お蔭で一のうち抜默したことを想ひ出す。この家もどこか偉かつたが、今は無い。自分

偕楽園と言ふ支那料理は多分邦人が営んだ最初のものであらう。自分は政治に関係のあつた頃には、義人と共に此家で会合した。今の首相の犬養毅公をもてなす会で、此家に随従されたが、或時豪者を呼んだことがあつて、自分は美人を相手に饗応したので、生れて以来初めて三日間宿酔に悩み、夫れから支那料理は大の嫌ひのものとなつたが、去勢くさくは今もない。自分はいつも料理を運ばせても、ここの自慢である香の物を下肴として飲むのが、長くつゞき今でも支那料理は好きでない。

あの家の主人は足利町出身であつたやうに思ふが、いつか祭典に足利町の起これる時、自分は有志者に對して又祭典を町祭とすべしと主張し、其際には偕楽園主がこの町に縁故あるを利用し、大宰の料理をもて大衆に饗応をしたと云ふことを想ひ出す。

自分は先に大方振向めの百花園を訪ふて見たが、園はまだ存在してゐるが、寂寥を極めてゐた。見に反し隣地の「入金」は堂々たる構をもつてゐたので一驚を喫した。此家の盛立も自分はよく知つてゐる。主婦は其家の奥の植其の女中でも、魏婦でもあつたが、勝気で、始めはさしやうな二三の小室で、前大川鳥と蜆汁とで客を呼び、運んこみ遣を歓迎したので、成る

粧つを擴張に擴張を繰返し、成功者の番附に列するも
つたが、自分の知る時佐渡出身の詩人大久保湘南と墨
堤の植半に会した時、入金の名ハ作れたが、今か雅名にないか
と湘南に問われた時、一生合作の名が遠鹿錦しと決した。遠
鹿ハ康風を形容するので閑房の意を寓したのである
大君ハ折角出来ても湘南ハ天然痘で没し共に此家に来
ることもなかつたが、四五年前自分が訪ねた時女将へ
まだ存命であるが、自分ハ四年巻紙に三字を葉し
送つたが、自分ハ交故ともあるので、あらう。
自分が島尾でよく出かけた家ハ島安（西尾の）で、相場を
食ハせたれ、あの勝膳豊前の肉を烈火の鍋で焼き油
が存ること形ぶりを白布のアブセンを云ふ数々經めた訪き、

●明治の向島料理

向島牛の御前の眞向ふ、以前平岩といひし、有名な割烹店の跡へ、昨日（明治二十二年八月）開店せし宮島といふは越後新潟港古町といふ所に、多年老舗たる割烹店を開きたるが、主人は雪岡といふ越後生の故でもあるまいけれど、食物を氷らすといふ、一種の發明あつて鯛の洗ひを氷らせ、西瓜眞桑瓜を氷らせ、食するに鐵槌を用ゐるといふも奇なれど、モソツと驚きたるは、コツプへ羊羹樣のものが出た事を、何であろうと食かいて見ると、麦酒の氷りたるを庖刀にて切りたるなり云々。

向島の清涼料理といつて、名代の珍評判であつた。

未だ其頃ハコンナ記事があるが
新潟から出店を出したが自分
ハ知らない。且つコンナ珍料
理ハ古く雅かしい料理だが
舌を娯しむ風流の一現相と
しても、ここに系統をとめ
おく

先から鱼、猪其飲用を忌人の為に牀を魚としても供へたのである
やうな気がしたのは愉快であつた。あそこのアイ鴨へ較らべ、
大根おろしが豊前で、醤油で喰ふのが殊によかつた
淡白な豊前で今ハ無くなつたが大金がよかつた。此家ハ
清潔であつた。鳥を材料とした或る料理が出来す

手拭浴の客を待つ家で、夏なれば浴することも出来、つまみ料理なども居心地がよいので、ここで客を招いたことも度々あつた。亀田の鶏肉は五六十年前価を落さずに今も繁昌してゐる。家の建築は亀田が改まつたが、ここも清潔が自慢で、今は他の料理も出すやうになつたが、鶏肉はお夏から始終しておる。自分は贔屓に今も毎年の元旦の祝寿詣に必ず行つてゐる。

吉原をまへに平松と云ふがあつて、簡素と蜆で一杯朝帰りの客を待つ家があつた。中でも駐春亭と云ふ老舗があつたが、花街の料理なるものはこの位のものであつた。酒の肴に飽きると、またものが口に適せず、よく不拘なものへ、とろろ汁や貝なども好んであつたが、茶の木をさへ居酒屋に上りこんで

蛤鍋のやうに作つてある一品五厘と云ふ惣菜などを喜んで喰つたこともある。湯豆腐やタナヤの花柄などの数が却つて酒をすゝめるの好下物であつた。

八百膳のことは嘗て雑誌に書いたこともあるから、ここへは省くが、山谷で名の高かつた重箱と云ふ家も一時は行かなくなつたが、却つて近年熱海で此家が出店してゐるので数度訪はれ鰻が本業であるが、鯉こく、会席の蒲焼と云ふやうな口洒落なものの多い極めて進歩的の性質な家で、何にもかはらぬ
れるのと晩餐をとる、理解しれぬ此比のことである。

一時滋養料理を名として和洋折衷の料理をやつて、客を呼んだことがあるが、牛肉なども材料として一寸うまく喰はせたので書生社会の人も喜んだ。○家の名なども記憶して居ないが芝口と

下谷の広小路にあつた家で其の時分生きて居た。新橋の金六町に円形の燈を掲げた吉点亭と云ふ家があつた。二階に入込みの席があるので込合ひはむさくるしい家であつたが、一寸うまいものを食はせた。藝者が近くに居るので呼べば呼べる場所をやつてくれるので便利でもあつたが、其温暖屋趣味のところであつた。温暖華な實に一種おかしな味わいある所で、若冠の大将自ら客をもてなし、寛ろいで飲むのも一興であつた。あまり高価の料理屋よりもこの酒が僕等にはあつた。伊藤絞の酒がおいしきもの近ありしあの前の温暖屋で飲み

つれが、今の共家の興い。自分の宗家の別荘が極端にあつた時十四歳をここで過ごした。寺の殿園の男の一人が居る丈で、三人共中の種々から暇つ

た。此の料理屋へ一寸面白い例があつたので、三人共此時をあくまで飲んで持込んだ、随分豪奢の事をやつたものであつた。其時分へつく實に新しくして運ばれる料理程まづいものはなく、其時分へつく熱菜料理の有難味を感じた。煮物はすべて冷却してしまくるから味は大半なくなつて、毎のく略々同じ献立を繰返すのだ全く閉口した

吾等の書生時代に神田に（貧不似合の）食傷樓と云ふ家があつた。庭に猿石があつたが、よく書生の会する所で、志ばく書生の喧嘩の場となつた。此の樓の娘が花井与平君の婦となつたロマンスを記憶する者は何も想い出があらう。この樓主は神田明神の開化樓と吾等はよく行つた。ここは吾等書生を擔任するお春と云ふ老女中がゐて、吾等の書生の主賓に姥義をよく遇してくれたので時々は消息の●これこそある

へ入れ、十数年を経て此橋と今のあつた時、お春が境内に春の屋と云ふ
待合を設けてゐると聞き、それを訪ねて昔しの礼を云ひたいと、折角
訪ねて見たが、主婦は外出して居るとかで、~~[illegible]~~ 其後ハ会ハ
なかつた。
其後此処に永支亭と云ふ光鶴の料理屋があつた。家の様(造)りで
昔を偲ばせるよい家であつたが、今は表(通)りに居し、時々其の模(様)
の料理をやつたが、遂に亡び、其後に支那と云ふの料理店が越して
可なりの料理屋であつたが、今は永楽の山人等と会ふことも無
くなつたのである。
浅草の花屋敷の常盤で家は江戸前料理で八百膳と競争する
程の家があつたが、高級の料理屋が今新たにやうに出来
あつたのだ、自分の好きであつた、それから小常盤と云ふ

小料理の料理屋があつて、今尚あるが、これも今は亡
し。
日本橋でよく出来ていた家の次上のみで花菊屋が料理何であつた
光鶴ではあつたが、遂に衰退に居りしも、前の菊澗と云ふ新らしく
住居した家があつた。古くは関係のある所であつたが、これも今
は無い。
ここに序でに思ひ出したが、（初めの上野の富士屋や 紅葉館の料亭や 四谷の伊勢屋）亀清や柳光亭、下谷の松源、神田江
戸の花家等々、胸中去来するものは深川の平清が最も上に位し
ずいぶん華やかに業を閉じた。
昭和十二年八月廿日
以上ハ割烹一つの変遷史であるが実ハ吾等の放蕩史
でもあり吾等の酒場史でもある

茲三四ヶ月の戰鬪で 支那軍全く潰滅せん

外國軍事專門家の觀測

【ニューヨーク特電二十七日發】ニューヨーク・タイムス紙上海支局長アーベンド氏は左の如く報道してゐる
上海における外國軍事專門家の間ではこゝ三、四ヶ月の戰鬪で日本軍は支那軍を徹底的に潰滅せしむるであらうといふことが定説となつてゐる、彼等は支那軍飛行士の技術が甚だしく拙劣なること、砲の照準の不正確なること、更に支那は軍需品の貯藏を欠き道路、鐵道の最も發達した上海附近においてすら既に輸送機關及び兵站部は機能を停止するのやむなきに至つたことを指摘し支那軍の敗退は必然と見てゐる、又支那沿岸が交通遮斷されたので海關收入は絶無となつたためいかにして戰爭資金を獲得すべきかといふことが重大問題となつたがたとひ戰爭の目的のために相當纏まつた現金を手に入れることが出來るとしても內外債に對する元利金の支拂停止は免れぬものと見られてゐる

南京政府大動搖

【上海二十八日發同盟】日支全面的抗爭の激嚴と九回に亙る南京空襲の結果表面結束抗戰を標榜する國民政府內部の動搖漸く顯著となり政府官吏としてその地位を放棄して逃亡するもの續出殊に資産を有する財政部の役人の恐慌が甚だしいが目下外遊中の孔祥熙は右報告を得て狼狽し二十七日財政部次長徐堪に對し「財政部員は如何なる理由あるも絶對にその任を離れるを許さず」と嚴重戒告の電報を寄せて來た

に對する要望が日本海軍の支那沿岸交通遮斷とは何等の關係なきものなることを斷つたが同長官は上海の米國領事館當局では日本は『平和的封鎖』を強行しようとしてゐるが第三國の船舶に對しては何らの干渉を行ふ意思はないことを確だといつてゐると語り米國政府も日本の支那沿岸交通遮斷公表は全く平和的意圖に出たものと考へてゐると語つた

八月二十八日

榛原製

○神戸の吉田正春より修養院華嚴經略標といふ和歌山活字私版本を寄せられた。此著者は早大教授科出身で、余の事や本の跋草から寫經に關することなど摘録してあるので、本の謝意を表する序に本書に論んだことで、研究を要することを書きつけ、今後の研究が必要しておく。それは寫經の跋郎ち跋文に往々の書き換のあること、故人の供養のための特に故人の遺墨の用紙裏に經を寫すこと、余の家都で見た傳寫本の五部寫經紙背の事、予が曾て國寶とした南古寫經白鳳朱雀の金剛場陀羅尼の事、尚は天平寫經で石川年足が千寫の大般若經六百巻、これも自分所有し居りしが、高野山金剛峯寺に及び纏まる

武田家に帰しぬ、足利尊氏之等書き合せの宝経、並に高僧の名流の連歌を載せたるもの、世に所謂る般若心経と云ふもの其今者流の物に殊然まるも古きことなるらざること、木片に経を記して日寺に納めし、是を俗に等経と云ふものなる、法華経全部を合写したるもの其他の為に為しあること、小石に一字づゝ経文を書し土中に埋めたる御経の一式あること、古式に據り写経を行つれ誌文の如く大概如電のことなるもの多きも、長寿園主役の人が目黒の羅漢寺に合しれ折、心経一行づゝを合写し紙裁後の座に献じたること、此書中に漏れて材料となすべきやうなることを思ひ出せるまゝ録して注意を促しぬ。

八月卅日　記

榛原製

日観面の語は二字三字四字五字、四字五六字よりは集語得難からず、二字三字は集語を得ること難し、其家の撰語は平生読書の際に求めて甚だ厭はず、余は即坐に就て常に集語を求む、左に録するもの数々を定む

思入玄　濟美　弘毅　樹德　冷趣

斷金侶　鴻志　清放　撫石　酒禅

枝服心　清耳　寛放　長風　醉使

力貴實　天福　守拙　塵外　長相思

守清宜　涼如酒　小山林　放言居

猶性於心　矯々風山郎　従容不迫

人送山迎　一襟和氣　游心翰墨

千古無惑　筆硯生涯　琴風山鼓露

村情山趣　硯田無税　點滴穿石
日々好日　豁然貫通　誨人不倦
恒讀恒耕　風烟俱淨　被褐懷玉
積雨沈舟　一棹烟波　一棹搖山
映日明窓　挾山超海　古松怪石
俟春好聞　心静興長　萬殊一理
坐嘯山空　金默銀語　從善如登
酒因境多　羣鴻戲海　虚心得趣
虚心若沙　楊柳古渡　閑中今古
客舩待緑　身寒遇宵　隨境皆安
不因人熱　和而不流　五内清涼
柳汀烟嶋　清白自守　詞境放浪

榛原製

梦和香冷　天香滿袖　漁烟踏雨
荒天境地　宮山風厳雨　風氣清高
雨叢雪峯　嬌絃脆竹　蓬髪驚聲
落葉疎花　雲中鶴丈　老屋念損
白露青秋　千秋風雅　淡然自守
清風匝地　成事不説　寒天孤鶴
風柳牧牛　江郷雲表　半江疎雨
松涼健人　春風解凍　一帆風順
一溪烟兒　一峯深秀　和敬清寂
冷月無聲　継往開来　各四即雙寄
雄魂鎮國　紅瘦綠肥　柳陰行吟
尊前微笑　雨過天晴　擔雲歸道

○毎日氷塊を噛んで戦報を読むのが毎日の生活だが、全軍は連戦連勝であるが、嬉しいのはどの軍戦闘でも大抵、部隊長を戦死させることだ。部隊長が犠牲となって部下を励まして攻めねば必ず捷つでもあろうが、実に惜しむべきことだ。

戦報を読むことは我等を悚然たらしめる。

皇軍の戦略の敵の飛行機をと殲滅せるであるらしく、開戦以来海軍の我飛行機は神の如き働きをやつてゐる。南京方面では九回も爆撃して敵の飛行機は既に二百七十機殲滅格納庫は廿四も無くなると云ふが、驚くべき進行で列国の目を驚かしてゐる。皇軍の飛行機の被害は殆ど無事である。高射砲に撃たれて到底助からぬと見ると、爆弾を抱いて敵の飛行機の飛行機や油槽を目がけて機もろ共墜落して爆破を行ふ勇士が少からず数がある、其壮烈の極で鬼神を泣かしむるの概がある。これは爆弾を抱いて死地に驀進し、九三勇士と忠烈を同じくするもので、吾戦史を飾るものである。

何んと云ふても戦争の中堅は飛行機である。敵軍の自惚も実は我等彼等が己れの飛行機の優秀を過信した北に因る、彼等の思へらく、其の機は外国の製品也、操縦者も外人也、日軍如何んぞ敵せんやと。日器の外国製なるも備へて尚ほ勝を制し得べきや。彼等の過信の先が主力に在るので、彼等は製造の能力もなく亦操縦の能力もないことを忘れたる暴露させた。

敵の飛行機は法幣で低空飛行を恐れ、砲弾の届かぬ高空で投弾するから、一向目的の個所に落ちず、或は自国人二百名も一命

ニ陸し、或ハ第三国の軍艦を侮辱してゐる、彼等の飛行戦術ハ幼稚であって皇軍の敵でないが、恐らく彼等の有する機の全滅するのも遠からぬことであるまいか。英大使の負傷の如きが兵僕のする所ではなく、これハ盲爆であり、無数の生霊を戦禍に陥れる者が、此の災禍に罹るのは当然の事で、併し各兵僕の無駄のないことを衛するに足る。日露戦争の時英船が東郷の命で撃沈されたのも同じ夫の態からで、国際法ハ日本を是としてゐる。

今日の皇軍の英戦ハ萬里の長城の山嶽戦であって、併し皇の先例である戦勝である、これを征服すれば、これハ秦皇以来世界の驚く英雄豪傑も敢てし得ざりし壮挙で、戦闘数日に亘りて殆んど兵糧も尽き、草根を食として敵陣を遮断して終に日章旗を山顛に樹つを得れば其の苦辛と其の成功ハ長く戦史に輝くべきであるが、吾等ハ将士の涙ぐましい労を察すると共に此の勝者の戦報を聞き百升の溜飲を下げることである、只の戦報ハ特に新聞紙を切り抜いて蓄えて置くことをすゝめる。

皇軍第三回の敵前上陸を敢行して成功した、白書の行事壮烈を極め、此の上陸に呉淞の要地を砲撃し呉淞砲台を占據するに至る、又吾海軍機の如きは南支の広東福州を襲ひ多大の損害を與へ、さん八月三十日の戦報では毎日皇軍一平均一要地を占領、飛行機戦法用に由る戦術の八カドリの迅速なる見るべし、蒋介石も窮鼠聯盟に日本の侵略を訴へ列国の干渉を求めたとハ笑止である、彼れハ支那の主権を云々として日本の侵略を証め

彼ノハ英米ト同時ニソ聯ト協約シ、蒙古新疆ニ於ケルソ聯ノ主権
ヲ譲リ、其代償ニ軍需品ノ供給ヲ獲得シ、主権ヲ呼ハケルモナ
ラシ、主権ヲ軍需品ノ代償トナスモ亦顧ミス、蒋ハ之
未北支那ノ赤化ヲ甚ダ重要視セルモ、而モ亦ニ法ノ覧
禁ヲ脱スル條件トシテ蒋ハ其ノ主張ヲ棄テ、事実上
ソ聯ノ支那ノ主権ヲ認メタリ、ソ聯ト支那ノ今日
アル怪シムニ足ラスト否ス、一身ノ完キヲ得ルハ之国ヲ失フ
コトハ何事ゾ

皇軍ノ赴ク所金城湯池モ皆潰ク、彼等ハ敗北ヲ蔽
ハントモ虚報ヲ以テ国民ヲ欺瞞シツツアルモ今ハ
信ズルモノナシ、滅ブル所ヲ擬シ人量産ヲ有スル要人ハ
漸ヤク逃ゲヲ張ラントス、彼等ノ外国ノ干渉ヲ待ツ

雲霧霽ルルヲ知ラズ、諸外国動カズ、彼等ノ煩悶
極度ニ達セントス、既ニ皇軍ハ揚子江口ニ於ケル敵ノ
交通ヲ遮断シ、彼等ガ供給ノ窮スル時日前ニ在リ、
彼等ハ何ヲ頼ンデ戦争ヲ持続セントスル　九月一日午前録

呉淞砲台ハ敵ガ難攻不落ト頼ンダモノダガ、遂ニ皇軍
ノ占領スル所トナツタ。彼等モ死ニ抵抗シ、開戦以来
モ激戦ヲ演ジ我犠牲モ少ナクナイ。併シ軍略上必要ナ
犠牲ヲ払ツテモ攻略セネバナラヌ要塞デ、戦局ヲ支配
スルモノ一ツデアル。遂ニ投降者ノ出ルヲ見ルニ至リ、彼
等ノ士気ノ沮喪ガ自ラ暴露セラレタ。

ソ聯モ例ノ不可侵條約附帯ノ密約カラ、支那ヘ二百台ノ飛行
機ヲ補給スルト傳ヘラレテヰル。彼等ノ近ヲ征海雖ニ潜ツテ

あるのは事実だ軍事行動に依り主義者のあるのも事実だ。此時
に方り我国に臨時議会を開き事変費追加二十
億円を議決せんとしてある。国民熱誠の軍需寄附
金を次々と盛んに贈り中の飛行機を〔全日本〕
名づけ、若干機を戦場に送らんとしてある。従来へ今
第三回の調停を待ちてある。徹底的に抗日と赤化を
根絶するにあらざれば、断じて調停を容れず停戦を
申出づるは日本の意気であって、現に外相の北京
を声明して居る。第三回の然らざるを得ずと哉
である。

九月三日午前記

皇軍は常に敵の軍事上要塞の根拠地真茹無電台を爆
滅す。是は米国の資を借りて支那の経営せるもの、降伏

右上海の敗戦れ責任者を罷免して更に中央軍の精
鋭を上海に増遣して来り、彼等は飽までも上海に於て戦闘を続行
せんとす。激戦日一日よりも甚しく、皇軍は駆逐艦をもって
厦門の敵沖を砲撃せしむ。又虎官屯に総攻撃
を開始し、又閘北の敵を爆撃す。皆こ西南日の事に
属す。

九月四日記

近衛首相は臨時議会に於て対支那膺懲主張の政策やと
都の何もそれ膺懲をつとめて積極手段に出でん、敵
は膺懲へ導き何応欽蔡南千人は自治政府南京
の執目標を脱して中外に独立を宣言す。　日上記
日支事変の起りてより未だ一ヶ月を経ず、皇軍は日々と敵
の一城を陥れ一塁を抜かざる日なく、上海附近の敵の

蔣"上海敗戰"挽回を策す

太倉、本據に廿萬集結

決戰態勢强化に狂奔

河流を利用・陣地構築

【上海本社特電】（四日發）蔣介石は近く全面的に逆襲を敢行し日本軍に占據された各根據地の奪回を命じたものゝ如く續々部隊を急派し決戰態勢を整備しつゝあるが現在の支那軍の狀況は次の如く兵力約廿萬といはれ敵の本據は太倉にあり同地を中心として目下大部隊の集中を行つてをり同地と嘉定、崑山を結ぶ線において最後の決戰をなさんとする模樣で太倉から揚子江岸に沿うて下流陸渡橋を經て瀏河に至る地區及び太倉から外岡鎭を經て嘉定に續く一帶に向つて大部隊の中央軍が移動中である、瀏河、嘉定、羅店の地區にはすでに十一、十四、廿四、五十六、六十、六十五、六十七、百十二、九十八の各師が集結されわが軍に頑强に抵抗しつゝありその數約四萬に上る、一方寶山縣、吳淞鎭、殷行鎭の前面には八十八、九十七、十一、廿四、卅六、六十一各師のほか敎導總隊及び保安總隊が第一線の戰鬪に參加してをり、また殷行鎭、楊樹浦間の軍工路西北方江灣を中心に卅六、二、五十七各師が蟠踞し第一次上海事變當時の激戰地たる廟行鎭、大場鎭には八十七師、眞茹に十一師、南翔に十二師がクリークを利用して堅固な陣地を構築してゐるのでこの城一帶を對日決戰の第一防禦線としてゐるものと見られる

壓迫しつゝあり、ま
でに城外まで驚森
目下飛行機上から城
敵部隊に降伏ビラを
り、これと呼應して
面から進擊中の淺間
山城を去る約二キロ
出してゐるので寶山
にわが兩部隊の地上
中に殲滅する見込み

勅語

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク

帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百艱ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス

朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム

朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル追加豫算案及法律案ヲ帝國議會ニ提出セシム卿等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協贊ノ任ヲ竭サムコトヲ努メヨ

支那事變費の額 日露戰役以上

大がゝりな近代戰

【東京電話】支那事變費は今日まで成立した豫算に於て既に五億二千七百萬圓に達してゐるが今回新たに二十億余の事件費追加を見る結果之れを加算すれば二十五億圓を突破する事となり日淸戰役臨時軍事費二億圓、日露戰役の臨時費十八億圓に比較して近代戰が其經費に於ても如何に大きなものであるかを物語つてゐる

要地ハ概ね吾が占據ニ帰す。然し支人が戦鬪ハ略を放棄せず近つきあ
るが如くなれ共、蔣介石ハ北の失敗を回復せんとし太倉ニ二十萬
の精鋭を増派し、運命を此今後の戦ニ決せんとするの觀
があるが、此時ニ当りソ聯の態度ハ漸やく露骨となり、ソ聯ハ飛
行機四二百台戦車の五百台を支那ニ供給し既ニ戦備ニ向ひつ
ゝあると云ふハ、戦線の既ニ支那の十省ニ擴大し、彼等ハソ
聯ニ頼む所ありて、戦自ら長期ニ引摺らんとするも
ものハ戦局ハ序幕であつて、これからが本舞台ニ入らん
としてゐる。今後の戦鬪ハ對支戦鬪であると共に對支
ソの戦争である。然し開始の事態の如きも、長期化
北支事態ニ於て支ソを併せ撃つことの軍部初めよりの
覚悟あり、亦用意があるが、臨時議会ハ恰も此際開か
れ、首相ハ戦鬪の長期戦を覚悟せよと聲明し、議会ハ二千
億の軍事費を議決す。前議会ニて議決せし五億円と
合せて廿五億なり。日清戦役の軍事費ニ比すれバ十数
倍し、日本曾有の巨額なり。而も帝国海軍ハ支那船の航
行遮断区域を擴張し、全支沿岸を遮断すること
を聲明す（第三国租借地と香港を除く）今後の戦局ニ
其後（等の）運命を決するものあるも刮目を要す（丸）

月六日記）

昨夜寝後ラジオ放送にて近衛首相の演説を聞く。貴
族院に於ける演説に敷衍するもの、幾分格調を遺
憾なく、吾此部々聴者に快感を與へたり。自分ハ然れ
近衛公等が生を對支政策ニ委しむることを遺憾

し保証とは云へ、今爾が首相として對支戰綱に立ち得ることを
想ひ到り、感慨に堪へざるなり
の数支那膺懲の皇軍は善戰日々功を收めつゝあり、堅塁を
以つて誇りたる馬廠も寶山城も其他上海の要地も悉く陥落し、
開戰以來彼等の飛行機を失ふこと既に二百に達し、將兵
の死傷は五萬に達すると云ふ、此時に方り吾臨時議會は未
曾有の大戰事費二十億を初め必要の政府提案を
一瀉千里に協賛し爰に本國一致の實を示して議會
の幕を閉ぢたり、政府は折柄首相始め内相文相
進んで街頭に立つて國民に政府の覺悟を告白し並
依て國民は持久戰の止むを得ざるも、戰の勝敗は出征
將士の努力と共に銃後の後援にあることを真率に
言明し、而して今後容易ならざる事態の起らんことを
暗示し、豫め大なる覺悟と不撓忍耐とを求むる
を警告したり。本邦外國と事を構へたること數回なれ
ども、今次の如く政府が真率なるアッピールをなし、
國民の精神に喰ひ入つて其の決心を挑發したることはあ
らず、事件の重大なるを以つて推するに足る、戰局の推移
は支那が如何なる頑強なるとも二三ヶ月を經過せば恐ら
く彼れの潰滅すべしと思ひしが、其の潰滅に近づいた時こ
そ警戒を要する時なり、或は第三國の干渉を見ん、
皇軍も之れを強制せんとするこそ、五六年來志されし排常
時を称して警世したる、支那を膺懲する敢て難きまで
らず、唯此の第三國の所在に對し之れを寧ろ避けしも戰ふに

之務にして是認せさる可らず、国際干渉に由つて鐵戦局を覆
至る状あるとあつては、齊整の甲斐もなき東亜の平和の
保持の目的は、亦達する能はさる也、之れが意は
支那屈服の後に更らに一戦を期せさる可らず、左は
一国に於てしか数国を敵とし而かも逆視すへ可らす、蓋ならも支那
より強大なる敵なれは言を待たず、支那の安危甚だ関係して聯
合之衰微せんとするも、西班牙之宛も独聯合でウカトヱ
左てず、英国は米と共同して干渉を欲するも米国は
巻添を欲せずして共同を諾せさるが故に英ひとり孝す
る能はず、ソ聯は内に機動を興へつつあるも地中海に
起り、表面の敵と為りしや今の処なれず、日本は其
際英米と相当の人物を派遣し事情を諒解せしめ

人と其人物を物色中なりき、伊国は独と離れて日伊共同未
然防止せよと来たるあり、北欧の国際事情は破る紛
糾なれども、日本の覚悟は更に日支戦に伴ふ紛擾に対
する覚悟無かる可らず、是れ日支の事変は序戦なるべし
然れども東洋の平和を確保するには、其等の戦争を経さる
可らず、徹底的に局を収めざれば禍を他日に胎す、どうあつて
も最後の目的を達するまで戦はさる可らず、眦を決し空を
見上ぐ、これが我国民の運命にて、天は日本に東亜和平
の確保を命じつつあり、直衛指れは流石に今心の言を
なしてゐる、此の廻り合せは、寧ろ我等は喜びの栄と
する所なりと、天の大任を下さんとする先づ艱難を置く
といふ所なるも、東亜に覇権を握らんとするは、百難困

より覚悟せざる可らず　此の大任を達成し得ば日本は世界の覇王たらん、日本は決して支那の領土に意あるにあらず、世界人道の為め蒋を排し東亜の光世界を灼燿し萬國日本を平和の盟主と仰ぐに至らば日本の望は足るのである（九月十三日記）

日支那事変益々進展皇軍の威力益々盛んとなり、上海に於ける敵の北西地は皆皇軍の手裡に帰し、敵は漸やく主力を嘉定より移すに至つた、昨日の戦は恰も左の切りぬきの如くである

トピック解剖 〝黄土〟との戦ひ

豪雨と堤防破壊で泥濘の海を進撃

北支文化の親 今や皇軍の悩

日支戦線は自然との激しい争闘を織まぜて動いてゐる、日本軍の苦しみは支那軍そのものに對する以上に地形と天候との血みどろの戦ひである、日本では豫想もつかぬ自然の

…暴威… に悩まされてゐるのである、ボア戦争がジャングルと炎熱と悪疫によつて苦難の戦ひとして戦史に有名であるが、目下の支那事変は山岳と泥濘と洪水とクリークの地形による苦闘として戦史に類例なき戦ひといへるのである、北支戦線では平綏線の山岳と洪水に悩み、平漢、津浦の両戦線は「どこまでつゞくぬかるみぞ」の歌そのまゝに泥濘と洪水に苦しめられ、上海戦線はまるで市街地圖の道路網の如きクリークにはゞまれてゐるのだ、平綏沿線察哈爾省南境は西方山西の五台山脈と東方熱河からのびた山脈に挾まれた糸の如き渓谷帯である、こゝは標高一千メートルから二千メートルに達する切りたてたやうな峻嶮で、まあ妙義山のやうなものがうねくと走つてゐると思へばよい、この山脈は常に中腹以上が

…白雲… に包まれてゐる、この山嶺の一部を傳はつて堅固な要塞たる萬里長城の鐵壁が走つてゐるのだ、通路はいくつかの城壁の門以外にはないこの長城線をぬけて北進すれば渓流の側に三人と並んでは通れないといふ一本の道路があるだけだ、そこへもつて來て事変以來北支一帯は百年來の大豪雨で、渓谷全部が黄泥の大河となつて氾濫してゐたのである、わが軍は幾度か奔流の中をたがひに帯革を掴みあつて前進するのである、その上、雨雲のかゝつた両側の山嶺に潜んだ支那兵が、弾丸の雨を降らすのであつた、勇敢なわが軍は、雨雲ついて現れる友軍の飛行機、山嶺に大砲を曳く砲兵陣の掩護の下に前進また前進を續けたのだ、これは平綏線のみでなく、平漢線良郷、坨里村西方付近一帯の戦線、北平西方門頭溝から西山連峰中の戦線にかけての戦場風景なのである

北支の一帯は黄土層だ、北支の文化は

…黄土… の生んだ文化だ、黄土は農作物を育てた、黄土は支那四千年の農業社會の故郷だ、これは軟かく、歩けば一尺や二尺はめり込む土壌だ、黄河の河床が、大変動を起し一瞬にして美田を荒野となしたことは史上枚擧に遑がない、雨は黄土を泥濘の海に作り、堤防を壊し見るくうち北支の大平原を海にしてしまふのだ、津浦、平漢沿線の戦はこの黄土の上で戦はれてゐる、そこへ百年來の大豪雨だ、ぬかるみは果しなく續いてゐる、雨は降りやまぬ、天津南方一帯の沼澤は氾濫してゐる、その上支那兵は得意の戦術たる水攻めを行つてゐる、かれ等はわが軍の前進に備へて大運河の堤防を切つたのだ、北平から南方杭州、寧波に達する大河の如き大運河は浚渫行はれず堤防だけを高めて來た、今や河床は平地よりも遙に高いので豪雨になると必ずどこかが決潰しる、支那軍はこの洪水戦術をとり馬廠付近で大運河の

…堤防… を切つて津浦線から渤海灣にいたる平地を水びたしにした、動けば動くほどめり込むぬかるみの道を自動車が砲車が、想像することも出來ない苦しみを味ひながら前進してゐるのだ

ヒ總統と御會見

秩父宮殿下ニュールンベルグへ

【ニュールンベルグ十三日發同盟】秩父宮殿下には十三日午前バイロイトよりニュールンベルグに御到着遊ばされた、午後零時三十分ヒットラー總統と御會見、午餐をともにせられた後午後一時半自動車でツェッペリン練兵場に成らせられドイツ陸軍の觀兵式を御覽遊ばされた

支那愈々聯盟提訴

規約三ヶ條援用を要求

【ジュネーヴ本社特電】（十三日發）國際聯盟は支那國民政府が聯盟規約十條、十一條、十七條を援用して日支紛爭を

最早負ける戦、況んや敵すまいときまつて唯得に籠ること特に敵もます、支皇軍の雖戦苦闘を語る事實は豪雨の為め泥濘の中を進軍することとである、黄土との戦ひが如何に北軍果と語つて居る。

九月十三日記

榛原製

昨日の戰局展望

上海方面 昨日は上海戰開始以來の大進展を見ることが出來た、東部戰線軍工路に於ける敵の打破と楊行鎭占領を初め各線の進出と共にわが全線の體勢漸く整つて來たため最も突出せる東部戰線の敵は不安增大するに至つたので十二日より遂に退却を開始、よつて東部のわが軍は陸軍、陸戰隊とも十三日拂曉より追擊の行動を起し軍工路に近き遼東路競馬場まで我が手に落ち次で市聯合を中心とする一帶の地區を占據するに至つた、退却の敵はその西方江灣鎭、大場鎭方面に集結しつゝある

之に乘じて我が軍は全線に亙つて大躍進を試みた、この日呉淞の我が部隊は戰車を先頭に堂々軍工路を進み滬江大學に到達し呉淞との連絡は茲に成つた又呉淞方面より鐵道線路に沿うて南下しつゝあつた部隊は早くも西北方より江灣に迫つてゐる、一方楊行鎭を占據して進擊を續ける部隊は激戰しつゝその西方の大場鎭、劉家行鎭に近づき、月浦鎭を取つて西進中の部隊は羅店鎭近く進出した、之に應じて江上のわが軍艦は巨砲を浴せかけ我が陸海の空軍も逃ぐる敵、集まれる敵に對し擲げて擲げまくつた　かくてこの日一日にして素晴しい戰果を納めた

北支方面 ＝平綏戰線＝疾風の如く前進を續ける本戰線の作戰部隊は十一日早くも山西の北關たる大同近郊まで押し寄せたが十一、二兩日に亙るわが空軍の猛烈なる爆擊と地上部隊のこの猛進振りに戰ひに弱い山西軍は全く戰意を失ひ斯くて十三日朝大同は呆氣なく我が軍の手に歸した、一方十一日察哈爾省西南隅の蔚縣を陷れた別働隊は十二日續いて陽原を席卷して直に山西省内に擊ち入り十三日朝省境の要衝廣靈を占領、茲に於て察哈爾省内の平原には敵影を没するに至つた

南支方面 我が軍艦〇〇は十二日廣東省の惠州無線台を又驅逐艦〇〇等は同省大亞灣頭の平海にある軍用無電台をそれぞれ砲擊破壞したが十三日早朝我が海軍飛行隊〇機は廣東の門戶にある第一の要塞虎門砲台に對し大爆擊を敢行した

九月十三

榛原製

果敢、拒馬河の突破で
平漢線を遮斷、包圍す
世界戰史にも輝かん
石黑、坂西兩部隊の偉功

【北平十七日發】十六日午後拒馬河の敵前渡河を敢行した我石黑、坂西兩部隊は行動開始以來僅かに二晝夜半にして十七日未明敵の中央を突破し涿州南方松林鎭において平漢鐵道を遮斷し敵の退路を封鎖、全く敵を袋の鼠と爲し我大陸戰史上に稀なる偉功を樹てた卽ち石黑、坂西兩部隊は涿州平野に蟠居する中央軍、田仲軍四萬、萬福麟軍二萬、馮占海軍四萬、計十萬の大軍と一大會戰を展開し突進また突進その中央突破を敢行した此結果萬福麟、馮占海兩軍は直接戰闘に依つて多大の損害をうけると共に我軍は十六日午後拒馬河渡河を終るや一齊に壯烈なる猛攻擊を開始し十六日より十七日未明にかけて平漢線に突破して茲に我精鋭部隊により平漢線の遮斷に成功した、此の決死的による鐵道遮斷は彼の日露戰役當時の奉天大會戰に於ても鐵道遮斷の完成は實現して居らず今回の如く神速短兵の效果は我が軍の猛擊と共に全く前代未聞にして彼の世界大戰に於けるタンネベルヒの大包圍殲滅戰に優るとも劣らざる偉功である、涿州西南凡そ十キロの地點にあつて我が軍の攻擊を最も困難ならしめてゐた拒馬河の流れを迂回し溯つてゐるところが激戰地の最大なる地點で同地點の河幅は凡そ二百米、水深一米で河床は泥沼の上に增水してゐた事とて退却の敵兵はこの陣地によつて我が軍を喰ひ止めんと企圖した作戰が却てあべこべに自ら此拒馬河の濁水に逃げ場を失ひ苦戰に陷つたのである我が軍は殲滅すべきは今ぞと誇りに三方より拒馬河の一村に敵を壓迫しつゝあり涿州西南方の濕地一帶に亙つて死物狂ひの敵兵を押し包み壯烈無比の殲滅戰を展開しつゝある

闇の地下に火の突貫！

生還・相擁して泣く

〝空爆〟に對比 江南戰史の巨篇

人爲・天佑・奇蹟の總和

地爆〃決死の白襷隊

【羅店鎭にて廿四日阿部本社特派員發】既報、羅店鎭南方の敵堅陣爆破はわが決死の工兵廿勇士の爆破隊によつて見事に敢行され突擊路を開いた、これこそ過ぐる上海事變當時の爆彈三勇士にも劣らない壯絶果敢なもので、この坑道爆破隊の偉勳こそは江南戰史を永久に飾るものであらう、 山内部隊は味方の最先端から敵陣の白壁まで百メートルの間を四日三晩にわたり地下道を掘りつゞけやつと六十メートル掘り進めこゝから地上へ飛び出し爆彈抱へて敵陣に迫り白壁破壞といふ絶對決死の戰術を敢行すべく爆彈携行決死隊を編成し 丹茂少尉を隊長に白襷廿勇士、 丹隊長がまづ茶碗になみ〳〵と酒を注いで飮み次々と別れの盃を交し一本のたばこをこの世の吸ひ納めとこれまた次々に廻し死の寄書と家族への遺言を認め終るや隊長は腹から絞り上げたやうな悲壯な聲で 「みなこれが最後だ、歩兵が前進するか否かはわれ〳〵の双肩にかゝつてゐる、一死皇國のために盡さう」と凜然といひ放ち敢然地下へ潜り込んだ、記者等（阿部、松尾、神原本社特派員）はこの絶對生還を期せぬ白襷隊に加はつたのである

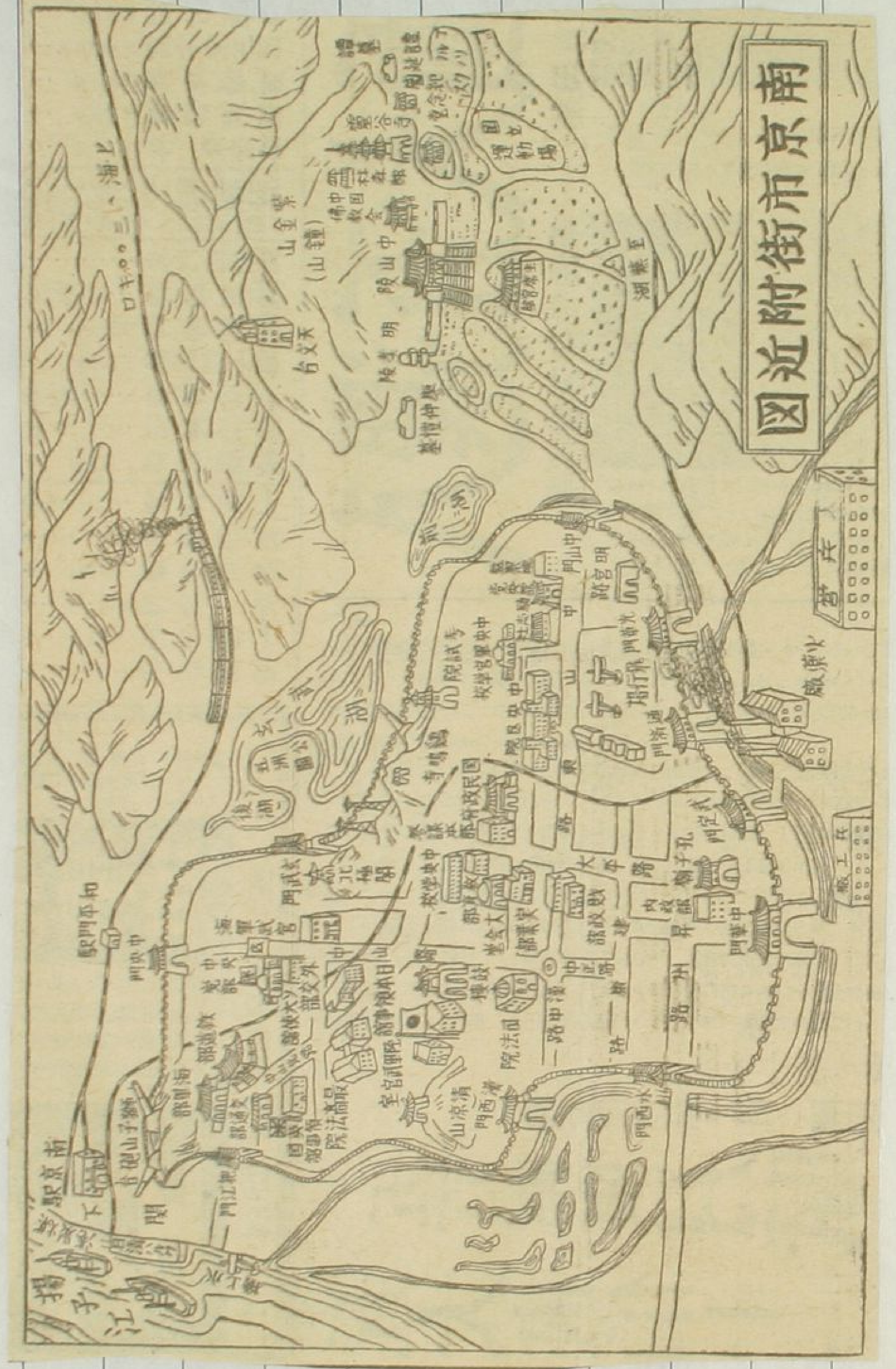
かゝる爆破作業に一人の犠牲者も出さなかつたのは世界戰史上珍しいことで全く天佑神助であらう、隊長丹茂少尉ほか一同はこの決死の大事業を敢行して生還した喜びに相擁して泣き止まず、やがて交々語るのであつた

皆の心が一致したのと神へ祈願したのが叶つたのです、あまり手榴彈が來るものだから一列に伏せて煙幕の中で互に呼び交しながら進みました、ドスンと突き當つて初めてこれが頑丈な壁だと氣づいて素早く爆彈へ點火すると見事火が點じシュッシュッと燃え始めた、氣絶するやうな大音響について突如突擊喇叭が聞え戰車が轟々と走り込み左右から○兵が雪崩れ込んだときの嬉しさはなかつた、思はず**互に戰友の名を呼びつつ地下道の泥水を泳ぐやうにして歸つて來ました、 生きてゐる自分が不思議で身をつねつて見ました、** 思へば四日三晩坑道を掘り續け水がしと〳〵と湧いて來るのをポンプで汲み出すが水はなか〳〵減らない不眠不休でやつと六十メートル掘り進みましたが**身體が冷え込んでみな下痢をしてゐます、どうせ死ぬこの身體だからと誰一人手當するものもなく病體のまゝです、もう數分の後には自分の命は爆彈と共に木ッ葉微塵となるのだと思はず時計を見ました、**三時をほんの少し廻つてゐました、ごくりとつばを呑んできつと飛び出す、パッと煙幕を張る、胸をつく臭です、幸ひなとに小雨が降り煙が這ふやうに敵陣の方へと風に送られます、これぞ天の助けと**「おいみんな死ぬんだ」が合言葉です**一寸先も見えぬので目をつぶつて走りました、 敵兜が目指す白壁に突き當りひつくり返つて轉んだ、 おゝ目的物だ、 この壁こそは一ケ月近くもわれ〳〵を惱したものだ、 今や突きぬけるぞ！と思つたが **もう後のとは何やら判らずどうして火をつけたか、 どうして歸つたか、** はつきりしません、 彈がパリ〳〵飛ぶ迫擊砲が來る手榴彈が目の前や足許で炸裂する、だのにどうして死なぬのでせう **本當に死を覺悟し御國のために盡す といふ氣持を神樣が憐れんで呉れたのだ、思はず「天皇陛下萬歲」と叫びました** 突擊路は開けた

榛原製

以下
11丁
白紙

榛原製



【上海本社特電】（廿六日發）敵の首都南京はわが海軍航空部隊の反覆爆撃により重要軍事施設は殆ど破壊され支那空軍は早くも戰鬪力を失ひ、南京の制空權は完全にわが手に歸したが廿五日の五回に亘るわが猛爆撃により南京市街は大恐慌をきたし夜に入るや全市暗黒と化したばかりか市民は連日防空壕に身をひそめつゝしてゐたが南京政府もわが命中弾のために……

南京空爆の跡

兵工廠	八月廿七日 九月十九日 九月廿五日
國民政府	九月廿二日 九月廿五日
參謀本部	八月十九日 九月廿二日
軍官學校	八月十九日 九月廿二日
中央黨部	九月廿二日 九月廿五日
憲兵團	八月廿七日
火藥廠	八月十九日
兵營	八月十九日
下關停車場	九月廿二日 九月廿五日
浦口停車場	九月廿二日
光華門軍用飛行場	八月十五日 九月廿五日
故宮飛行場	八月十五日
中央政治會議	九月廿二日
航空委員會首都防空司令部	九月廿二日
南京飛行場	八月廿三日
無線電台	九月十九日
市政府	九月廿五日
軍政部	九月十九日
財政部	九月廿五日
交通部	九月廿五日
兵工署	同
憲兵司令部	同
下關電燈廠	同
東砲台	同

九月廿七日の分

空襲警報

……都に殘留する市民はいつ日本の空襲が現れても事前に知ることが出來なくなつたといふ、不安は募るばかり、支那當局はサイレン……

支那新聞

……の漢口、南京、上海の……

千人針

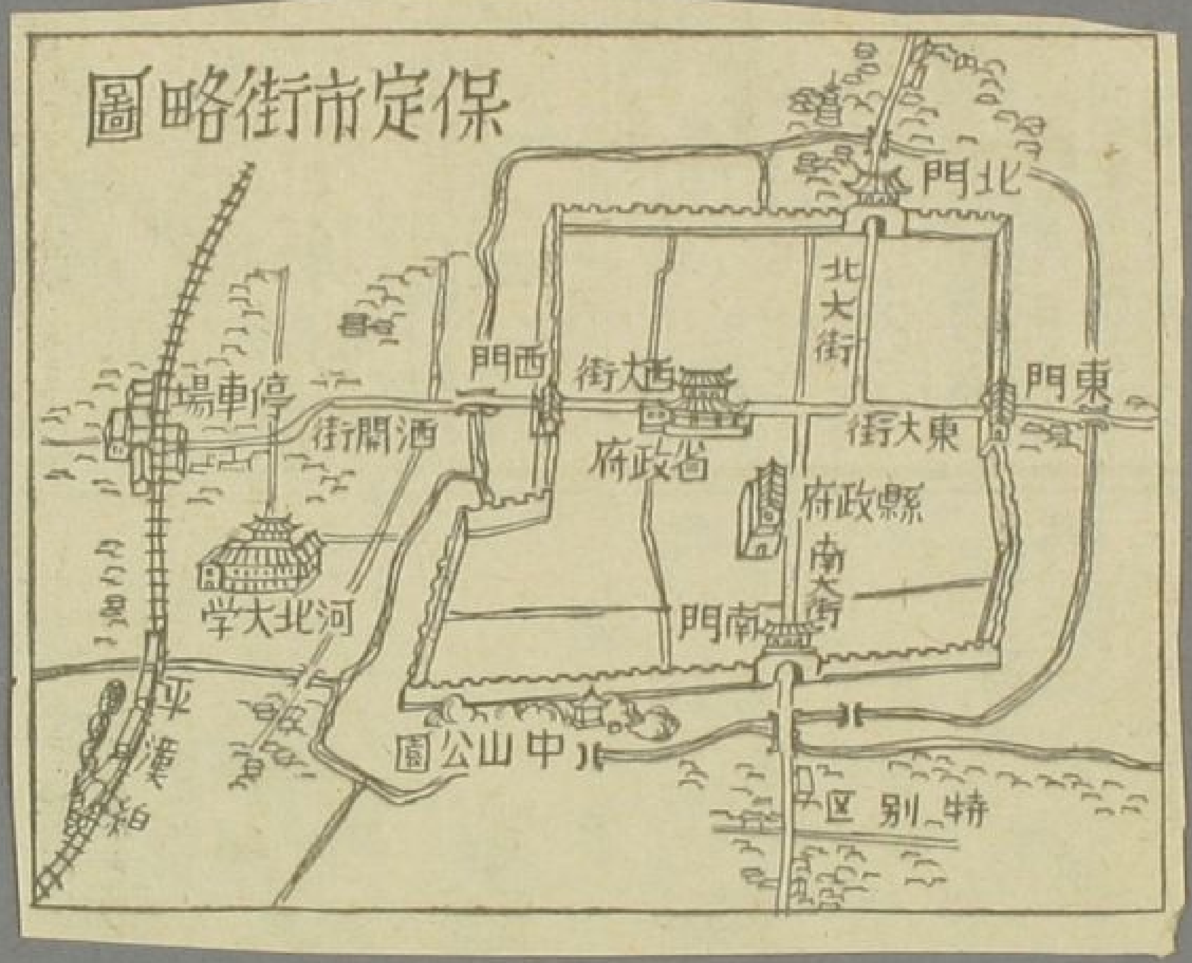
寺田竹雄畫

敵兵、逃げぬも道理 機關銃に繫がる

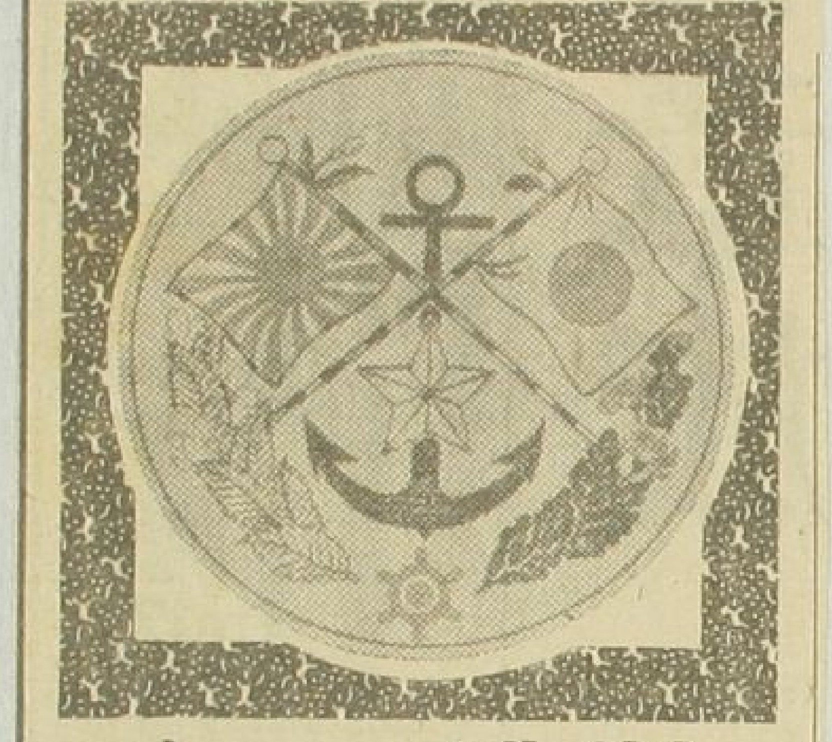
戰慄！"鐵鎖の督戰"戰術

【天津にて廿五日橋本社特派員發】滄州が陥落してから支那軍督戰隊の非人道極まる苛酷な督戰新戰術が暴露した、滄州戰における敵の抵抗は意外に頑強で猛烈な集中砲火にも敵の機關銃陣は少しも射撃の手をゆるめず滄州一番乗りの殊勲をたてたわが田巻部隊以下各部隊の突撃に對しても敵の機關銃陣はちよつとも退却の色も見せず、わが部隊は遂に二無二肉薄し、廿四日夕刻縣城一帶を占據したのであるが、雄々しく抵抗したと見えたのも道理、ズラリと並ぶ機關銃陣に枕を並べてゐる敵の死體を見ると驚くべし彼らは悉くその足を、腰を鐵の鎖で機關銃座につながれて退却の自由を失つてゐるではないか、中には傍に杭を打つて縛りつけられてゐるものもある、これはかりではない、支那軍獨特の民家に據る家屋防衛を見ると銃眼を除いて戸といはず窓といはず悉く穴といふ穴は釘づけ或は泥で塗りつぶしてあり、こゝに據る兵は土牢に押込められた囚人と同樣、入れられたら最後陽の目を見られないのだ、それこそ窮余の支那軍が憐れむべき下級の兵士に對して鬼畜に等しい殘忍な鎖戰術を強要してゐる断末魔のあがきなのだ、かくして一部兵士をむごたらしい犠牲において彼らは身をもつて敵の砲火を浴びてゐる間に主力は安全地帶目ざして總退却してゐるのである、元來督戰隊は友軍の背後から機關銃で脅かしやむを得ず前進せしめるのが任務であつたのである、この鎖戰術は苛酷で有名な督戰術史上に戰慄すべき一ページを記録した

保定市街略圖



この門標に



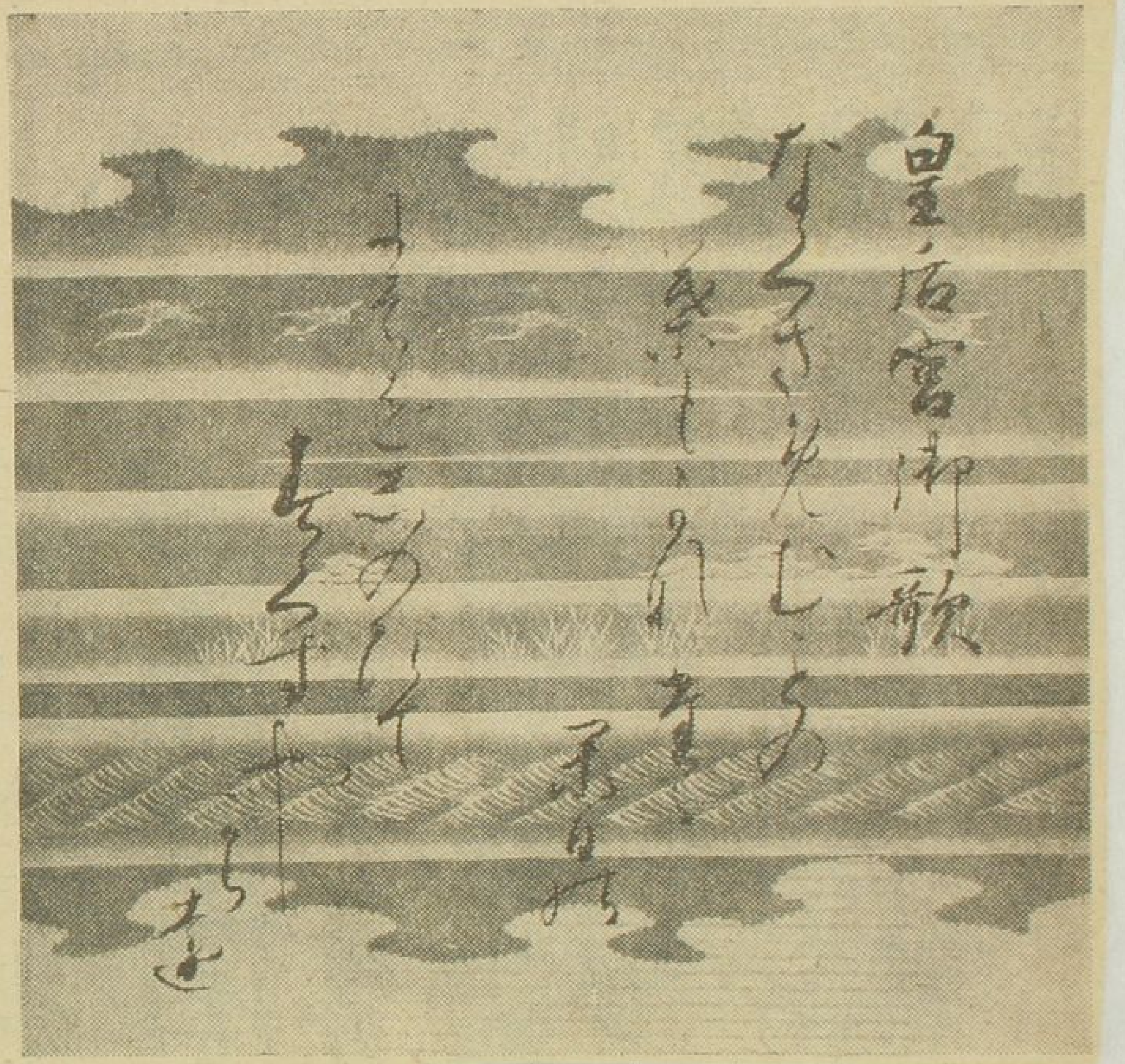
敬禮せよ

銃後の護りを完全に遂行するため、東京市では十月一日から出征將兵遺家族の門には、輝かしい譽を標示するマークを付けることになつたが、この譽の門標は鶯色の縁に、日章旗と軍艦旗交叉の下に陸軍の星と海軍の錨が燦然と菊、櫻の二國花に抱かれた意匠で、市民はこのマーク輝く家には、滿腔の敬意と絶えざる護りとを捧げるであらう

また一家の働き手を戰線に送つた遺家族に生活を保障するため授産所六ヶ所（芝、四谷、小石川、淺草、本所、深川）を擴張して就職斡旋を行ひ、また貧しい遺家族のためにはアパート四ヶ所を借入れて百世帶を無料收容する外方面館内の託兒所二十ヶ所に晝夜の別なく二百名を無料收容する

（日曜）　第二万一千九百六十九號　C

御下賜の皇后陛下御歌



畏くも皇后陛下には支那各戰線に奮鬪する皇軍將士の上を思召され御手づから卷かせられた繃帶を御下賜あるなど深き御心を注がせ給ひまた銃後を護る家族の上に對しても絶えず御仁慈を垂れさせられ、毎

皇后宮御歌

なくさめむことの
葉もかなたゝかひの
にはをしのひて
すくすやからを

榛原製

戦塵録　十二年九月中浣起筆

外人は日本は何人の為め大犠牲を拂つて支那を討伐するか理解に困しむと云ふ、彼等の戦争の目的はいつも欲求を満すか他の権益を得るかに在り、而して日本は之れを満する目的にあらざるを公言し、真に欲する所東亜の平和延て世界の平和を請人とするに在りと叫ぶも、彼等外人は理解し難きは、眼先にして小利を見るも大利を見る能はざればなり、東亜の平和延て世界の平和を得るならば、大なる収穫ある可らず、是れ世界の覇権を握るにあらずして、正を守る権益何かある、曰天の大任を下さんとするや先づ艱苦を以つて試むとは、

正に日本に就て云ふべきものである。今次の戦闘戦は必らず勝つ、然れども皇軍の艱苦言ふ可らざるものあり、真に悪戦苦闘の連続なり、何んの戦場に於ても敵は八十倍の多きにあらず、堡塁の堅固なるにあらず、地形の彼れに利にして我れに不利なるにあらず、而かも皇軍の往く所敵終に支ふ能はず、皇軍は普通の戦法を超越して敵前河を渡り敵前橋を架し或は裸体河を渡り、或は弾丸雨射の間に高壁を攀づ、往々一飯を喫せず一杯を飲まず不眠不休、一城を屠れば息つく間もなく、敵を追撃す、其勇挙は心胆を寒からしむるものあり、之れ天の平和の天使に大任を下さんとする方り先づ艱難を以て試むることにあらずや

○出征と生還を期せさるハ吾武人の精神なり、之の

崇高の精神ハ吾が傳國の精神なりて、之あるが故に

曾て戦闘に敗を取りたることなく、軍に将たるもの必

らす衆を率ゐて●先づ進むこと故に士氣を鼓舞するを

部将先づ進まさるを得ず。各部隊戦闘に勝ちたるとき

ら、部将を失ふこと比々皆是、如何に惜しむべき事

なれとも、戦勝の因ハここに在り、進むに難い障害物の横

たはる処に必す決死隊あり、彼等ハ身を粉齏して道

を開らく、是れ機械戦争に超越せる勇挙なりて、之あ

るが故に難攻不落といふことハ皇軍の知らさる所也。爆

弾を抱へて敵陣に殺到したる勇挙を常に継続したる

ることあるも、今ハ肉弾相搏つの戦ハ無くなりたと見

珍らしからぬ事となりぬ。

○國亡びて山河在りとハ支那詩人の述語である。彼等ハ

祖宗以来の國土を廢墟となしてあり、冷静極まりなく

惜しいとも思はずある。併し己が國土を戦場となさは如斯は必至

の運命で、之れ自から為す所なる。人を咎めん、今次戦争

の要地ハ皆是歴史上著名の地にして、吾が将卒も支那史

に就て知る所なり、今や長城を論んで大倉、呉淞、馬家宅、寶

山、南翔を皆我占領する所となりて、北平の舊都も其手に在り、

男児尻を暴らすの好戦場の北上無しと云ふを得ん。支那

四百余州を蹂躙すれハ豊太閤の企にして而も遂に得さ

りしことを、今ハ事実となしつつある、男児の一快と

云ふを妨けず。武人ハ死所を選ぶ、彼等の死して遺憾な

しと云ふを得べき點

○今次の上海戰に大なる威力を揮ひたるは我が飛行機の活動であつた。實に上海の如き地區に爆彈を落すは周到の注意を要し殺傷なるを得ず、而して飛行機の根據地の遠くして多くの爆彈を積載し得ざる不便もあつたが、吾飛行機は流石に巧妙なる活動をなし敵機二百を殲滅するの功を收めたる、而るにこゝに飛行機活躍に大なる生面を開くの幸を得たるは、遠東競馬場を占領しえたることにて、こゝを吾が飛行機の根據地となすの絶好の地なり、恐らく今後は此地より飛行機は翔けるべく、前既往の如き遠路を往復するの不便なく、一時に集中するの活躍を見ることゝなるらん

○近頃の戰報に屡々「トーチカ」の語を見る。これは支那が露國に倣ひて構築せる掩兵壕の如きものなれど、多くは陣前に造りあり、隠蔽されてゐるが、銃眼もあり、各トーチカを連絡する地下道もあり、トーチカは露語の「點」といふことである。○尚ほ戰時の用語に白衣の凱旋、無言の凱旋などの語あり。前者は負傷者、後者は死者を云ふ。誰れが命じたるにあらず広く使はるべき語となる。尚ほ将兵の間にしきりに行はる、「靖國神社でお目にかゝらう」といふ是れ死の覚悟を表はしたるもので、之ほど感動を與へる言葉は無い。

○世界の大戰に獨逸の誇りし大砲の威力は八十五里の遠きに及びたると云ふが、今は四十里の遠に達する大砲あり、獨逸の

これを殺すと云ふが、幸ひに日本が割譲を得て之れを満
の某地點に置くとなれば、自ら之を占領するより露都を
撃つの兵器にて、其價ハ千萬圓も値ひなかるべし
とのことと。
◎支那の日本に對する方略ハ戦争を長びかせるにあつた。而
この度彼等ハ今ハ長びかせるとの餘裕ハなくなり、彼等ハ收戦
相談しても、列國ハ彼等の隷從して又頼みにならぬ。干渉を敢
てしたのハ之みなりし。米國ハ政府船が戦時品を輸送す
ることを禁じた。是れが為め支那注文の飛行機十九台
を搭載する船を北米合衆國ハ支那へ輸出不許可とした。是
海軍の支那沿海のお鎮ハ、支那をして物資を外に
求むる道を杜絶せしめた。彼等ハ兵器と公糧とを

一日窮を困めつゝある。彼等ハ降伏を促すべく
爆撃をば此の窮迫である。心あるものハ支那軍の
運命既に迫ることを見る、長期滞久なども夢
いふ方略ハなくなつた。
◎支那の請問を務めたる長沙のラジオは支那の收戦
を亡かれ放送しつゝあり、正しく支那の弱點を現
かし来るところ、支那政府の内部に戦闘継續を唱ふる
する一派あり、如斯なれば勝利てハ屈し居らぬも、戦敗
でけれバ、是れことか自家の先見を言ひ立ること
と擡頭し来るの必然ぢ、政府部内の統一先づ敗れ、
是れ解くるを初まる、洗人や物資の欠乏は、いとも軍
隊の悩ぴあるのみならず、國民も亦悩みをせまさせるを得

ずしも、乱民の暴発は或は革命を誘起するならん、
何んとしても天時の運命は是非に通ることゝなつてゐる。
○ゲリラ戦術と云ふ横語は往々出遇ふ、これは譯して遊撃戦とされてゐる。遊撃隊と云ふもの、今回は大きく用ひられ、日本に於ても日北軍隊が組織されたことがあるが支那では大がかりに之れを用ひてゐる、彼の便衣隊などと云ふものも遊撃隊と見るべきものであつて、これは正規軍と区別され、数の見込もなく多数であつて、団体の生れ自治的に郡村などに組織され、軽快に出動して敵を悩まし、或は森林などに隠匿し、突如敵の要を衝いたり、或は敵の隊伍の成らざるうちに乗じて之れを乱しなどすることで、割合に効力のある所以は、どこまでも日くせみ得るが

郡県にもあるやうに神出鬼没自在で敵をして奔命に疲れしむる効果があるからである。これは自治的に政府の支給に頼らざることを原則としてゐることがある。要するにこれは雲烟の如く去来し捕捉すべからざることが其の特長であつて見凝集した時は侮り難いものがある。

○今日は九月十八日で、嘗て満洲事変を回想追憶すべき日である、満洲事変は六ヶ年前の昭和六年九月十八日に柳条溝に於て日満兵の衝突を以て始まり、塘沽協定の成立せるは八年の五月であるから其間僅三ヶ年の日子を要したが、茲に満洲新帝国が現出し五ヶ年計画で国都建設の事業は目出度く成就し、十五日より三日間大祝典が挙行されて

なる、此時ニ方リ今又皇軍ハ東亜和平の為め破邪の熱
を以つて支那軍を殲滅してある。抑ゝ彼等[redacted]不遜[redacted]の
抗日ハ満洲事変ニ関係なきにあらず。満洲を擅主でしめ
しめたることも即ち彼等抗日の主たる原因なれ、今日の事
あるは満洲平定の当時早く豫想されしが[redacted]、り、想
飲ましも我が皇化に浴さんハ満洲の如き楽土生れ[redacted]化
然らざれハ国土修羅場となる。支那軍賊連戦連敗幾
と滅亡の兆を成さんとする窮迫の今日、満洲ハ紀念日を
祭し、彼等ハ如何に感ずるや。彼等ハ抗日の非[redacted]を為
認めざるや。彼等は満洲の繁栄と躍進、四億萬の蒼生
を救ふの意なきや。[redacted]古賢哲云く、教へざるも術ある書
此教あるを信じとせざることあるも亦救ふも、皇軍の彼

等を膺懲するハ彼等を教へんとするの外ならず、彼等
百敗頓挫折の後漸やく抗日の非を覚り、真に頼るべき
ものハ日本帝国なるを覚り、而して東洋の平和を日本と共
同して維持すべきなるを知らんか、支那国土の徒に亡滅すること
を思ハバ、愛国支那ハ始めて救はん、満洲国家の如く蒼々然
栄ゆるを得ん。今日此日吾等ハ事局を顧し感慨無き
を得ざる也

九月十八日記

○九・一八の紀念日ハ満洲平原の今戦功を奏しつゝある日なり
敵軍幾人と消滅と謂ふ。此の地ハ三国志ニ劉備関羽張飛
が桃園の盟をなしたる英雄の地なり。蒋介石が往年軍閥の
紊乱[redacted]を伐つの時、曹操の気概ありしも。彼等ハ離反（曹操が
天徳を誇り好める道）に過ぎぬと豪語しつ。此の戦に於ての

蒋は皇軍に對し真に癖病と一般、蒋の戦略は此の地を不落の要害と選んだのは偶然ではないが、叛乱の軍閥と敵が全く異なるを知らずや。頼み切つたる拒馬河は女君も空しく、先づ長番敗れ、皇軍を渡らせた。涿州の後方の鐵道を遮断して、敵が鐵道に頼る退路を断たれた。敵の全く包囲に陥ち入つて嚢中の鼠となつた。彼等の退路は山壑地に逃る外なくなつたのだ。それは易州へ向ふ山路であるが、之の前方には吾が友軍の陳深があつて、彼等は逃(退)の路がない。ここに集結の敵は五師ないし六萬で、我空陸の猛攻撃で殲んと全滅を待つのみ、此の包囲は僅かに三日間に成つた結束さと、雲散霧消、敵前渡河等で戦史に数例あるかと稱せられる

九月十六日記

榛原製

○戦時に於けるプロパガンドは代の爆弾でインクの毒瓦斯で人類の精神を迷はし盲目化する一種の作戦術である。外交は詐謀であると云はれた時代は已に去つたが今の外交はプロパガンドが随伴して巧めるプロパガンドは最も大なる効果を奏するので宣傳者を設けもする国もある。支那は昔しからプロパガンドに長じてゐる国で人を瞞着することを外交戦術としてゐる。今次の国際連盟に對しても支那は日本を盡ついて土匪を捏ち上げもするが、支那は宣傳を廣く世界にからえ、耳を傾けさせてもあるらしく、彼等がつとめるのも無理ではないが、プロパガンドは外に對するもあと内にもするものである。支那は今や内に對しての宣傳に忙がし

い彼等は長日の戦敗を戦勝と逆に報じて国民を欺瞞
してゐる。国民は此の催眠術に罹つて夢中心地
よくなつてゐるが、彼等が阻喪失神を免かれてゐるのは
此の催眠術に由るのである。由来戦敗すれば志気は阻喪を
来すものであるが、戦勝すれば志気を昂進するものである。日本
は連勝連捷してゐるから、宣伝に力めずとも武士道に於ても
宣伝をいやしみ、虚偽の吹聴を甚だ陋としたから、プロパガンド
は左も拙劣であるのも謂はれなきにしもあらずだが、日本の大志を
世界に是認せしめるための亦プロパガンドに依らざるを
得ぬ。日本政府も良く相当の人を列国に派すと
云ふが、識る機宜を得て居る。日露戦役の時曽根大
蔵大臣は白をしても日本に大金鉱が発見されたりの

天袖にと云ふので募債に成功したことがあるが、是んな
正しくプロパガンドは、こんな白々しい虚偽でも人をば欺き終す
るまで遣ることを要すと、プロパガンドを対手の為すに一任す
べきでない。

○日本のプロパガンドは実質的であつて空宣で騙すで
ない。昨十五日の吾海軍飛行機が大挙南京を襲ひ、
空中戦に於て前後二回に亘り敵の三十二機を撃墜
したことは、空前の壮挙で敵の都人の目前で吾
技倆を示し、列席支那の吾敵に足らざることを証拠
立てた。彼等は之れを目前に見て畏れ対内宣
伝で欺めんとするのであらうが、目あるものは第三国
人と云へども之れを見よ、之を世界に隠くすな。此の空中戦の如きは

世界の戦史に未だ見ざる所である。日本の宣傳は催眠的のものである。其の心臓を寒からしむる戦慄的のものでありとせん。

日敵前河を渡るは最も軍の難しとする所にて、多くの場合工兵隊は急遽架橋を企むるも、架橋は相当の時間を要し、且材料の得難きこともあり、則して架橋の為め戦機を失す~~場合~~は甚だ百事去るの悔あり。斯る場合は臨機の措置よき結果、人間を橋梁にて梯子を橋として兵を渡らしむる如き戦史に未嘗て無き所にて揚行鎮の戦争に此事あり。吾三十の勇者は濁流に没して一時橋杭となりて梯子を支へ、僚兵をして渡河を可能ならしめたり

榛原製

頭上に突撃の喊声

濁流に人柱の橋

急追に挺身卅勇士

【揚行鎮にて高橋特派員十九日発】去る十四日我が石井部隊が揚行鎮の西南から敵の堅塁目がけて進撃するに当り工兵柳沢部隊長の指揮する決死の渡河班三十勇士が敵前三十メートルの濁水肩を没するクリークに竹梯子を捧へて身を浸す事一時間余、弾雨下に怡土部隊長の指揮する歩兵突撃隊○○名を見事渡河せしめた事が判明し○○部隊長以下全将士を感激せしめて居る

——怡土部隊はその日午後五時までに大家宅の敵陣地を占領すべく午後二時半を期して攻撃準備に移つた、これに協力を命ぜられたのは工兵柳沢部隊長である、大家宅の前方には幅二十五メートルのクリークが横たはつて居る、午後二時半は干潮時で、将に絶好の機会である、柳沢部隊長の命令一下 渡河作業班の三十勇士は各十五名宛二班に分れて二つの竹梯子を担いで敵前に躍り出した、対岸の敵はこの竹梯子を爆破材料と感違ひしたものらしく大狼狽で一時第一線陣から後退、そこをすかさず卅勇士は二手に分れ 左右からざんぶざんぶとクリークの濁流に飛込んだ、敵は漸く竹梯子を橋梁材と知り再び前進機関銃の猛射を浴せ来り手榴弾を投げつける、干潮時でも意外に深い水は頭まで没する、梯子はクリークの幅よりも三、四尺短い、「おい人梯子だ」全員が期せずして一斉に答へる、決死の勇士はクリークの向ふ岸まで二メートル置に並び横倒しにした竹梯子を肩で支へ忽ち人柱の梯子が架けられた、敵前十メートル、敵弾は雨霰と降る、勇士達は水中から頭ばかり出してゐる、幸ひ鐵兜で弾丸は一寸も当らない、手榴弾も水に落ちるので破裂しない、この時どつと喊声をあげて怡土部隊長の指揮する歩兵突撃隊が人梯子を渡り始めた、人柱だけに多人数が一時に渡れない、四、五メートル置に急がず渡らなければならない、だから突撃隊の人員○○名が渡るに約一時間かゝつたが渡河作業班の勇士達はこの間水浸りとなつて頑張り通し歩兵突撃隊の最後の一人が渡り終るまで完全に任務を果したのだ、この間怡土部隊に多数の戦傷者を出したが渡河作業班三十勇士は奇蹟的に一名も負傷しなかつた

日来軍隊は敵の軍隊の中心なる南京に大爆撃を敢行せん
とし、事前に第三艦隊司令長官より各国民に避難を勧告
しれ、昨爆撃敢行は昨廿一日正午以後に在り。南京
の亡滅は二三日に迫ると云ふも可なるべし。支那は南京の危急
を憶想して都を他所に遷さんとせしが、現在のまゝ亡滅
に至るべき歟。抑も国民政府が初めに北京を避けて南京
に移りたる甚しは、庶政更始を期したるに由ると。依って南京
は支那の古帝都なり。其紀綱、北京よりも大なると云へども、
久しく荒廃に委して満目荒涼たり。国民政府は寧
ろ此の荒廃の所をこそ撰びて、捕はれざる新政を行ふ
所と選び、以てこれに善美の實を築く所也。国民政府
根據をここに据へたるも、どれだけの仕事をなし得たる。今や其
詳を知らずと雖も、諸外国大使がこれに信ずるを欲せざる所を以
つて安まらず、北京に及ばざる遠きことを思はしむ。先ず国民
政府はここに政の根據を定めて經営に資を投じたること
少からず。而して今や吾が爆破に委して廃墟ならんとし
つゝあり。彼等には如何なる感慨かある。吾人は敵の頭上こ
れを下さんとする

九月二十日記

俠客有名鏡

東	西
大關　信夫ノ常吉	大關　丹波屋善兵エ
關脇　大庭ノ久八	關脇　大前田英五郎
小結　銚子ノ五郎藏	小結　小金井小治郎
前頭　國定忠治	前頭　土浦ノ皆次
前頭　岩瀬ノ繁藏	前頭　赤尾ノ林藏
前頭　武井ノ安五郎	前頭　飯岡ノ助五郎
前頭　勢力富五郎	前頭　荒井ノ額二郎
前頭　身延ノ半五郎	前頭　祐天仙之助
前頭　黒須ノ大五郎	前頭　相川ノ又五郎
前頭　黒駒ノ勝藏	前頭　西部ノ周太郎

淺草 花川戸ノ助六
下谷 武藏屋新藏
金看板甚九郎
駿河 清水ノ次郎長
吉田 人切長兵エ

淺草 新門辰五郎
下谷 幡随院長兵エ
西京 會津小鉄

俠客鏡の辯

弱きを助けて强きを挫く。其れが男伊達なるものだ。元祿、享保時代、德川文化の餘弊は、竟に武士生活の墮落になつた。身は旗本八萬騎の一人なる藤枝外記が「君と寢やうか五千石とろか」の俚謠一首殘して、吉原の女郎と心中したやうな時代的反動が、町人の擡頭になり、そして町人中から町奴が出來、此町奴の遺風が、關東を風靡し所謂俠客なるものになつた斯の俠客有名鏡は、明治初年版だ選定者の手心も多少あり、全く公平でないにしろ、さにかくわれわれ日本人でなければ知りえぬ、俠客道が、此表を見れば大要分るであらう。教養あり、身分あるも他の爲に肌を脫くを知らぬ者多き現代、特に之を掲げ、一服の淸涼劑にする。（胡）

ハリウツド大恐慌

メキシコでの結婚はすべて無効

【ハリウッド發同盟】ハリウッドのスター連の間には從來からメキシコへ出かけて結婚式を擧げることが流行し、有名な俳優の中にもこの方法で結婚した連中は相當な數に上つてゐるが、最近この結婚が法律上無効であるとの宣告が下され大恐慌を起してゐる。事の起りはジージ・ブレント君が最近コンスタンス・ワース孃に對し結婚解消の訴訟を行つた所從來の結婚がメキシコで擧げられた無効結婚であつたとの理由で結局原告の勝訴となつた

これはメキシコ民法に上れば同國内で行ふ結婚が有効である爲には結婚當事者の双方乃至少くともその一人がメキシコ住民であることを絶對に必要とする爲で從つて米國市民がメキシコに逃避して擧げた結婚は總べて無効に歸するわけである

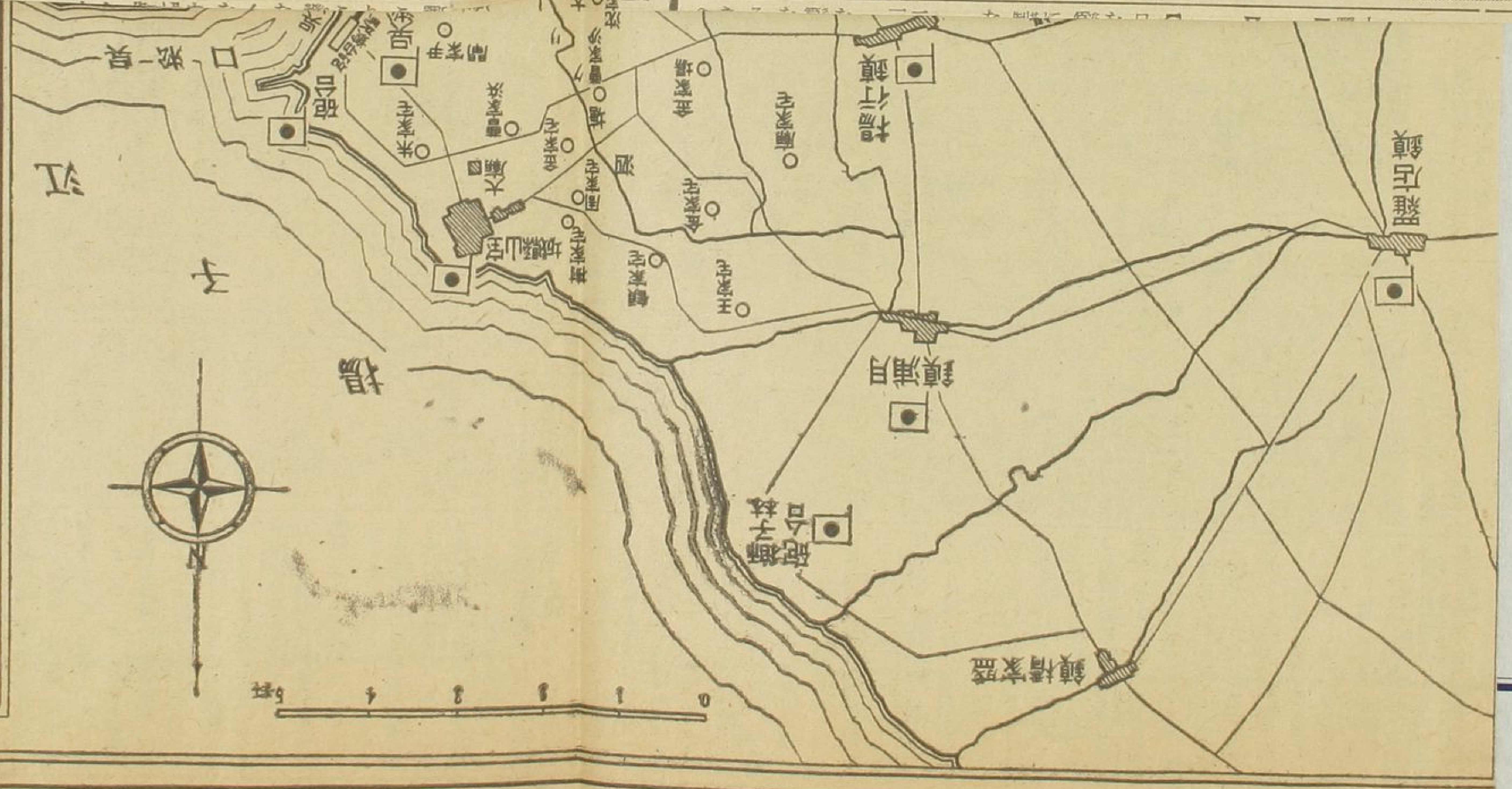
これには身に覺えのあるスター連は何れも相當驚いたらしくゲイル・パトリツク、ロバート・コツプの如き早速ハリウッドで結婚のやり直しをした

いつこも同じ俳優の結
婚に悩みがある

寶晋斎の石の名高いもの
が其の小縮は左の如し

寶晋齋研山

上海東北部戰線要圖



上海方面戰績日… 旋…

……のはそ
してその總額まで使用することを得認可を得て盛んに…るが、その他の方…申請が行はれ幣制…

戰禍卷添へ防止
ル大統領の時局談

…ーク特電十…中海の情勢が惡…の戰局に目覺しい…でこの數日來米國…歐洲に向けられて…パークの自邸に靜…エルト大統領は十…約五百名の訪客を…率直にその所信を述べた

國際情勢は頗る重大化してゐるが、我々は米國國民並に政府が戰爭に捲き込まれぬやうあらゆる努力を拂つて居り、今後も努力する積りである

次いでウォール街が心理的に動搖してゐるといふ話に關し大統領は財界に限らず誰も彼もがさうなるのが當然であらうと語つた【寫眞はル大統領】

チャーター ド銀行等支那幣制に最も深い利害關係を有する英國系有力者は數日前財政部に對し斯る私選流通券の濫發につき嚴重抗議を發した模樣である

一昨年十一月の幣制改革に當り…

米・石井子に好感

【ニューヨーク特電十一日發】帝國政府が支那事變におけるわが正當なる立場を外國に說明し理解せしめるため英米佛三ケ國に使節を派遣し米國へは石井菊次郎子が來る事になるかも知れぬとの報道は米國に非常な好感を與へ各新聞は日本は世界の輿論を尊重すべき事を忘れてゐるのではないと云ふ風に解釋し居り石井子と米國との因緣を詳細に書き好意を示してゐる

名譽の戰死傷者

鎌田喜一大尉【上海十二日發同盟】十日敵狀偵察中名譽の負傷をした陸戰隊岡野部隊鎌…

バード街とウォール街から
英米經濟週報

【本社紐育・倫敦兩支局十一日發】

景氣悲觀的
"中立法"發動注目さる

…血に歐洲における擴大の懸念が最近…ーヨーク市場にお…原因と云はれてゐ…・デー」以後ニュ…歐洲に先んじて暴…、株式軟調の原因…ふだけでは說明不…米國々內情勢の再…ける主たる問題と…時に秋景氣に對す…が漸次強くなつて…

五割五分といふ多額の證據金が規定されてゐるが、過般來相場漸落の結果、この限度を問越すものが出て來、そのため今週賣物が山積して暴落したのだとして政府に對して取引制限規定の緩和方要望してゐる、然し中立維持法發動問題が秋景氣への見透しを困難ならしめてゐる一因たる事は確で、假へられる如く棉花までが禁制品に加へられるとすれば、米國農村に大打撃を與へる事必然であり、實行不可能と思はれるが、何れにせよルーズヴエルト大統領の意志一つによつて極東關係の經濟活動がその瞬間直に大打撃を受ける實情にあるので、種々の臆測のため財界の確信が動搖してゐるのも當然と見られる

…ール反對論者の意…國は昨年末より本…期にかけてインフ…したが、政府のや…レ防止に努力して…ふと他方では膨脹…く續けて居り、財…つてゐるとしてゐ…下取引に際しては…

英國

本週の株式市場は數週間來の不況を持越し、國際時局の影響で人氣冴えず、輸苦しい空氣の中に推移した、殊には週初ウォール街の暴落を入れて一層弱立たなかつた、而してそのウォール街の暴落も多分に國際時局緊迫の懸念が根底をなしてゐる事實を見れば世界二大中心市場たるニューヨーク並にロンドンの市場…

人氣依然冴えず
日本公債また低落す

人氣は今や經濟的實勢よりも國際政治の動向如何により多く支配せられると云へる

かう云ふ風に市場人氣が國際時局に敏感になつて來ると相互市場の影響する程度も亦敏感さを…

カメラ　本店 銀…　支店 新…
現像・燒付・引伸
優秀…

上海東部北部戰線要圖

上海方面戰線ハ日章旗ニ依テ一目瞭然

ターナーの祕稿を燒き棄てたラスキン

小倉清三郎

去る七月十日の讀賣新聞は報じてゐる。

「英國が生んだ大社會思想家ラスキンの理想具現を銀座街にもとめてラスキン文庫、ラスキンホール、ラスキンカテージの三高級喫茶店及びラスキン參考館等を經營したが、銀座に探究した理想主義的生活はもろくも街の商業主義に敗れて、現實に見る百萬圓の借財から逃避した、眞珠王御木本幸吉翁の長男御木本隆三氏は：…近づく破產宣告の日を待ちつゝあるが…氏の特異な性格にして、はじめてなし得られたこの世界的大コレクションはいま群る債權者と、この一線だけはとこれを死守する財產整理者との間に浮沈、生死線上を彷徨しつゝある。…氏が直接に投じた金だけでも卅萬圓を超えたといはれるだけに、蒐集は數知れぬ限定版もの、絕版ものに、たゞ一枚に千金を投じたといはれるラスキン自筆の原稿やラスキン自らの自畫像からラスキンが使用した調度など、中でもラスキンが十七歲の折、戀人に送つたといふ戀文などにいたつては金では換算出來ぬ代物で、しかも、これらが一つにラスキンコレクションとしてはじめてラスキンの出生地たる英本國のそれにつぎ、好事家には百萬圓とまで評價される無限の價値と意義を生じるわけである。しかしこゝに問題は果してこの大コレクションを讓り受け得る篤志家が日本にあるかどうかの點で、現在では寥々たる日本のラスキン硏究者にはこれを得るだけの資力がなく、ほとんど絕望視され結局かねて垂涎するアメリカのラスキン蒐集者の手に莫大な値によつて落ちるものとみられ、若しこれも不可能な場合は古本が反古なみに債權者によつてバラバラに四散されるの外ないといふ悲觀すべき運命にある。

右につき雲野辯護士は語る。「本人がこのコレクションの逸散さへ防いでくれたならば、後はどんな斷罪にでも服すると淚を流して賴みましたので、私もぜひこれだけは債權者の手から護らう、これが日本の知識人に與へられた任務であると考へこれの整理に着手しました。」

ラスキン若し靈あらば東洋君子國の街頭人にさへ其の名を覺えられ、使用すみの自筆の原稿の見本などさへ、斯くまで大切に珍重されて居るのを知り、嘗てはターナーの死後に、折角託された其の多數の祕稿を燒き棄てた自分の所爲を思ひ出し、如何なる感を持つであらうか。

其の事を傳へた恐らく唯一の文獻はフランク・ハリス(Frank Harris)の自傳"My Life and love"であるが、其の第一册はドイツで、第二、三、四册はフランスで印刷されたが、何れも私版で、小部數が讀まれたゞけらしいから、書中の事柄も、廣くは

趣味の談話室
謠曲作者の支那觀

◆…謠曲が盛んに作られたのは室町初期である。謠曲作者の支那觀といふものはその時代の常識的なものであつたと考へて差支あるまい。

元來支那の文化に育てられた日本であるから、支那は大國、先進國である、又文字の國であるといふ觀念が根底にコビリ付いてゐるのは已むを得ない。この畏敬の念と共に一方には何クソといふ負けじ魂も絕えず動いてゐる。

「小鍛冶」に"漢家本朝にたいて"と云ひ「高砂」に"異國にも本朝にも"と云つてゐる如く、まづ支那を擧げて我邦を次にする。「國栖」に吉野山は遠く唐土まで續いた靈山だといつてゐる。

◆…「海人」は支那から寶物を献ずる話だが、それは時の總理大臣が娘を唐帝の妾に奉つた代償のやうにも取られる。無意識の間にどうも卑屈らしい感じがある。尤も將軍義滿は支那の屬邦たるに甘んじようとした程だから、その時代の作品に免れ難い傾向でもある。

斷然遣唐使を廢した時は假名で書く文學が起つた時代で、支那臭を脫した日本の文化が進展したのである。然し完全に支那を凌駕したといふ自信は容易に出來なかつたであらう。負けるものかといふのは明かに相手を高く評價した氣持である。

◆…現代において科學や工藝や軍事など幾多の世界的新記錄を出してゐながら、その基礎を與へてくれた歐米の文化に對し優越感を持ち得ない氣持が一般に殘つてゐる。昔の人が支那に對する考へは今の人の歐米に對する考へと同じである。癪に障つても偉いから仕方が無いといふのである。

其處に何とかして劣らない點を揚言したい衝動が生ずる。謠曲作者は「白樂天」といふ愉快な作を提供した。之は應永年間に滿洲から九州へ責め寄せた直後に作つたのであらうと久米博士は說いてゐる。

◆…幸ひにその時も弘安の蒙古軍の如く散々に敗れ還つたが、入寇の報告は京都を震駭させた。そこで世阿彌はこの曲を作つた。白樂天が日本の智慧を計る爲に渡つて來る事が知れたので、住吉明神は漁翁の姿で松浦の海上に待ち受け、詩に對する歌で忽ち彼を取挫き、早速に逐ひ歸したといふのである。

「是界」といふ曲は、大唐の天狗の首領是界坊といふのが神國日本の佛敎を攪亂する志を立てゝ渡來し、まづ同類の愛宕山の太郎坊を訪ねて助力を賴む。二人は第一に

榛原製

ターナーの祕稿を燒き棄てたラスキン

小倉淸三郎

去る七月十日の讀賣新聞は報じてゐる。

「英國が生んだ大社會思想家ラスキンの理想具現を銀座街にもとめてラスキン文庫、ラスキンホール、ラスキンカテージの三高級喫茶店及びラスキン參考館等を經營したが、銀座に探究した理想主義的生活はもろくも街の商業主義に敗れて、現實に見る百萬圓の借財から逃避した、眞珠王御木本幸吉翁の長男御木本隆三氏は……近づく破産宣告の日を待ちつゝあるが……氏の特異な性格にして、はじめてなし得られたこの世界的大コレクションはいま群る債權者と、この一線だけはとこれを死守する財産整理者との間に浮沈、生死線上を彷徨しつゝある。……氏が直接に投じた金だけでも卅萬圓を超えたといはれるだけに[illegible]蒐集は數知れぬ限定版もの、絶版ものに、たゞ一枚に千金を投じたといはれるラスキン自筆の原稿やラスキン自らの自畫像からラスキンが使用した調度など、中でもラスキンが十七歳の折、戀人に送つたといふ戀文などにいたつては金では換算出來ぬ代物で、しかも、これらが一つにラスキンコレクションとしてはじめてラスキンの出生地たる英本國のそれにつぎ、好事家には百萬圓とまで評價される無限の價値と意義を生じるわけである。しかしこゝに問題は果してこの大コレクションを讓り受け得る篤志家が日本にあるかどうかの點で、現在では寥々たる日本のラスキン研究者にはこれを得るだけの資力がなく、ほとんど絶望視され結局かねて垂涎するアメリカのラスキン蒐集者の手に莫大な値によつて落ちるものとみられ、若しこれも不可能な場合は古本が反古なみに債權者によつてバラ〳〵に四散されるの外ないといふ悲觀すべき運命にある。右につき雲野辯護士は語る。「本人がこのコレクションの逸散さへ防いでくれたならば、後はどんな斷罪にでも服すると涙を流して賴みましたので、私もぜひこれだけは債權者の手から護らう、これが日本の知識人に與へられた任務であると考へこれの整理に着手しました。」

ラスキン若し靈あらば東洋君子國の街頭人にさへ其の名を覺えられ、使用すみの自筆の原稿の見本などさへ、斯くまで大切に珍重されて居るのを知り、嘗つてはターナーの死後に、折角託された其の多數の祕稿を燒き棄てた自分の所爲を思ひ出し、如何なる感を持つであらうか。

其の事を傳へた恐らく唯一の文獻はフランク・ハリス(Frank Harris)の自傳"My Life and love,"であるが、其の第一册はドイツで、第二、三、四册はフランスで印刷されたが、何れも私版で、小部數が讀まれたゞけらしいから、書中の事柄も、廣くは

趣味の談話室

謡曲作者の支那觀

◆…謡曲が盛んに作られたのは室町初期である。謡曲作者の支那觀といふものはその時代の常識的なものであつたと考へて差支あるまい。

元來支那の文化に育てられた日本であるから、支那は大國、先進國である、又文字の國であるといふ觀念が根底にコビリ付いてゐるのは已むを得ない。この畏敬の念と共に一方には何クソといふ負けじ魂も絶えず動いてゐる。

「小鍛冶」に"漢家本朝において"と云ひ「高砂」に"異國にも本朝にも"と云つてゐる如く、まづ支那を擧げて我邦を次にする。「國栖」に吉野山は遠く唐土までも續いた靈山だといつてゐる。

◆…「海人」は支那から寶物を紹献する話だが、それは時の總理大臣が娘を唐帝の妃に奉つた代償のやうにも取られる。無意識の間にどうも卑屈らしい感じがある。尤も將軍義滿は支那の屬邦たるに甘んじようとした程だから、その時代の作品に免れ難い傾向でもある。

斷然遣唐使を廢した時は假名で書く文學が起つた時代で、支那臭を脱した日本の文化が進展したのである。然し完全に支那を凌駕したといふ自信は容易に出來なかつたであらう。負けるものかといふのは明かに相手を高く評價した氣持である。

◆…現代において科學や工藝や軍事など幾多の世界的新記錄を出してゐながら、その基礎を與へてくれた歐米の文化に對し優越感を持ち得ない氣持が一般に殘つてゐる。昔の人が支那に對する考へは今の人の歐米に對する考へと同じである。癪に障つても偉いから仕方が無いといふのである。

其處に何とかして劣らない點を揚言したい衝動が生ずる。謡曲作者は「白樂天」といふ愉快な作を提供した。之は應永年間に滿洲から九州へ責め寄せた直後に作つたのであらうと久米博士は說いてゐる。

◆…幸ひにその時も弘安の蒙古軍の如く散々に敗れ還つたが、入寇の報告は京都を震駭させた。そこで世阿彌はこの曲を作つた。白樂天が日本の智慧を計る爲に渡つて來る事が知れたので、住吉明神は漁翁の姿で松浦の海上に待ち受け、詩に對する歌で忽ち彼を取挫き、早速に逐ひ歸したといふのである。

「是界」といふ曲は、大唐の天狗の首領是界坊といふのが神國日本の佛教を攪亂する志を立てゝ渡來し、まづ同類の愛宕山の太郎坊を訪ねて助力を賴む。二人は第一に叡山を荒さうと出かけると、神々の激怒に逢ひ一溜りも無く吹飛ばされるといふ筋である。赤化運動の失敗といふところである。

◆…「絃上」は妙音院師長が自分の樂才に慢心し、この上は支那へ渡つて研究する外は無いと出かけたところ、村上帝の御靈が須磨の浦で彼を諫じ入唐を思ひ止らしめ給ふといふ曲。

「春日龍神」は栂尾の明慧上人が入唐渡天を思ひ立ち、春日へ御暇乞の爲に參詣すると、以ての外だと明神に引留められるといふ曲。共に留學無用論である。

「呉服」は機業教師が渡つて來て神となつてゐる話であり、「岩船」は開港場に於ける貿易狀況の描寫であると考へられるが、それが外蕃の入貢といふやうな形に作曲されてゐる。好い氣なものだと云はれるかも知れない。

◆…「唐船」は浙江財閥の一人を捕へて牛を飼はせて置いたのを、彼地の子供が身の代を積んで渡來し償ひ歸るといふ曲。放免する雅量を示すつもりの作であらうけれども、先方からいへば、この手は毎度匪賊がやる奴で、たゞ言ひ値で歸してくれたのが日本人の慾の淺いところだと解釋するかも知れない。

支那の歷史や說話を材料とした曲は現在でも二十曲からあるが、「邯鄲」「天鼓」の如き人氣曲も少くない。然し雪中の芭蕉といふ事から作つた「芭蕉」が支那物の最高傑作ではあるまいか。（坂元雪鳥）

世人に知られては居ないであらうと察せられる。

ターナーは近代の英國が生んだ偉大なる風景畫家であつた。千五百七十五年に床屋さんの子としてロンドンに生れ、物心が附いた時には、既に繪を畫くことが唯一の樂みとなつて居た。學校教育らしいものは殆ど全く受けずにしまひ、千八百五十一年に七十六歲で此の世を去るまで、殆ど文字を知らずにしまつた。十五歲から本式の展覽會に出品を始め、二十四歲でアカデミーの會友となり、二十八歲でアカデミーの本會員となり、英國に於ける藝術家としての一流の位置と名譽とを得たのであるが自らは名を愛するのでもなく、位置を欲するのでもなく富は求めずして集まつて來たけれども、其れを樂しむのでもなく、つゝましやかな世捨人見たやうな生活を送り一生娶らず、明けても暮れても何時になつても繪を畫く事のみが樂しみであり仕事であつた。死後の財產は世に敗れた不幸な藝術家のための最後の慰安所を設立し維持するために捧げられた。

ラスキンは富める酒屋さんの子としてロンドンに生れ、學校教育以前に既に早くから家庭に於て文字を授けられ、わけても聖書を熱讀させられた。千八百四十三年二十四歲の時、「牛津の一卒業生」の變名を以て、『近代畫家論』(Modern Painters) の第一卷を刊行し、華麗な文辭を以て、主としてターナーの人と藝術とを評論嘆美し、一擧にして卓越せる藝術評論家としての存在を認められた。時にターナーは四十三歲、其の名聲は既に確立して、今更他人の嘆美に依つて、大を加へる譯ではなかつたが、ラスキンは若いながらも、此の藝術家を認め得た事に依つて、自家の名を成す事を得たのである。

ターナーはラスキンの評論をも、世間の評判をも知るや知らずや、默々として美と畫筆とに親しんで居たが、ラスキンは矢つぎ早に『近代畫家論』の第二卷以下を續刊し、ターナー讃美の業を進め、第五卷を以て、彼としての最大の著述を完了した。彼の此の著の世間的成功は世人に一種の錯覺をさへ惹き起させ、ターナーを世に出したのはラスキンであるかの如くに誤想させる程になつた。

世捨人のやうなターナーにはそんな事はどうでもよかつたであらう。相變らず默々として畫筆に親しむうち、千八百五十一年七十六歲に達して世を去つた。遺された多量の完成未完成の畫稿、スケッチ、習作等が當時三十二歲のラスキンに託されて、然る可き取り計ひを受けることになつた。其れ等の中にそれまで全然自分の夢想だにもしなかつた種類のスケッチ、習作等が何百枚となく保存されて居るのを見て、ラスキンは餘りの意外に驚いてしまつた。

それ等は女性の人體の一部を題材としたもので、英國に於ては公衆への展覽には供される見込の恐らくないものであつた。ターナーは勿論其れをよく承知して居たに相違ない。さればこそ彼は此の種の題材を扱つた作品を一度も展覽會へは出さなかつた。それればかりか唯一

部の友人にさへ見せなかつた、見せないどころか、其んな題材に就て習作をやつて居る事をさへもらさなかつた。ターナーに就て五卷の大著を完成したラスキンも全然知らなかつたのである。死後に於て其れと知つて驚いたのも無理はない。

ラスキンが一種の偏狹なキリスト教的思想に捕はれて居た事は繪畫論の中にも現はれてゐる。後にはカーライルのお弟子となり、豫言者氣取りの警告を青年に與へたりなどしたのである。彼の信奉する所は公正の神であつた。公正の神が地上に君臨するにあらざれば、人間の前途に希望はないと考へて居た。不幸にして地上には公正の神の威德が行はれさうにもないと思ひ、彼は絕望のうちに世を去つたのである。彼は自然の美の中に神の現はれを認め得たかの如くに說きながら、眼前の人體と人間の生活とに神の現はれなる美と眞とを見出し得ずに終つた偏狹な一個のキリスト教徒に過ぎなかつたのである。

ターナーは風景 (landscape) 畫家と云はれて居る。英語で landscape と云ふのは、目のとゞく範圍の光景を意味して居る。天も地も其の中の萬物も目のとゞく範圍にあるのだから、つまり自然の一部として見れば、萬物みな風景畫家の題材である。人間も天地間の存在だ。ターナーの題材の一部であることは云ふまでもない。神に創造されたまゝのアダムとエバとが遊んで居るエデンの園の光景を描いたとして、其れに何の不思議があるであらう。其の中の一要素たる人體と人間の生活の中に特別の美を見出して、其れを畫筆に依つて再現しようとしたからとて、ターナーに取つて其れは何の不思議もないことである。不具でない人體の何れの部分にでも美を見出すのは當然である。人間の生活に於る當然の現象に於て美を見出すのもこれ又勿論當然である。

然しラスキンはさうは考へなかつた。畫家がかゝる題材を扱つて居たと云ふ事其の事が既に其の人格に關する問題であるとまで考へたのである。若しかゝる遺稿の存在が世に知られるなら、其れは畫家の名聲に容易ならぬ影響を及ぼす、之れは畫家に取つての恥づべき祕密である。闇から闇へ葬り去る可きだと考へた。畫家が折角の心血を注いだに相違ない幾百枚とも知れぬ祕稿をラスキンは誰にも相談せずに燒き棄てゝしまつたのである。其れを事後にフランクハリスが聞いて激怒した。

ハリスは「イーヴニング・ポスト」や「土曜評論」などの主筆をつとめ、英國第一流のヂャーナリストであつた。其の自傳は千九百十何年かにヂャーナル界を退いた頃に第一册を出したのであつたと覺えて居るが何分原本を私が所持して居る譯ではなく、取つて置いたノートも不幸にして失はれ、今直ぐ其れを確かめる事が出來ないのは殘念である。私に取つての興味は其のラヴに關する部分にあつたが、彼自身の性的生活が、正直に有りのまゝに述べられて居るばかりでなく、彼が交遊した名士などの珍らしい逸話にも富んでゐる。ラスキンの事柄などが其の一例である。是非一本を備へて置き度い書物であるが、何しろ日本金貨で

は何百圓かに當るので、殘念ながら未だ手に入れる事は出來ないで居る。

人知れず畫筆を以てターナーが描いた人體の美と人生の美とをハリスは言葉を以て書いたのである。しかも自己に於る現象は自己のものとして書き現はし、私版にもせよ、之を書物として世に送り、然る可き方法を以て、他人の讀むに任せたのである。ハリスは其の事に最高の意義を見出して居る。ラスキンとハリスとの間に如何に大なる相違があつたかは、其れによつて明らかである。若しターナーの祕稿がハリスに託されたのであつたなら、どれ程其れはハリスを喜ばせた事であつたらう。どれ程の尊敬を以てハリスは其れを保管し研究した事であらう。或は然る可き人々に如何に研究の便宜を與へた事であつたらう。此の祕稿の研究はターナーの人と藝術とに關し、人體の美、人生の美に關して如何に大なる光を發見させる事になつたであらう。

然しすべては灰に歸してしまつたのである。散逸とか、行方不明とかには、尙ほ希望がある。灰になつてしまつて、其の灰までが散つてしまつたものを、どうしようもないではないか。それにしても、なぜターナーはそれ程の仕事を誰にも話さずに祕して居たのか。其れを今から推量するためのよすがとなる可き一つの事實が、近頃新に發見されたのは學者に取つて思ひがけない僥倖である。と云ふのはターナー同樣の習作を誰にも知られずに何千枚とも知れずに畫きためて置いて世を去つた畫家が現代の日本にあるのが知られたのである。幸ひに日本のターナーはハリスと同樣に理解のある受託者を友人の中に持つて居た。祕稿の一部は完全に保管されて後人の研究に備へられる事になつた。私も亦研究の便宜に與る事が出來た。それにつけても、英國のターナーは何と不幸な事であつたらうと思はれるのである。

日本のターナーは風景畫家ではなく、また藝術院の會員でもなかつた。豐かな收人をも持たなかつた。獨身でもなかつた。然し世捨人のやうな生活を送つて居たのは似て居た。其の死後に、未亡人自身も知らなかつた祕稿の包みが其所からも此所からも出て來た事を未亡人から知らされて、それの處置を相談された友人は意外な發見に全く驚いたのである。幸ひに了解ある友人達が故人の遺品に公正な處置を施し、其の勞作は後人の貴重な研究資料として保管される事になつたのは僥倖の至りであつた。生前に於ては不幸であつたターナーの死後の不幸に較べ合せて誠に感慨無量である。

ラスキンの取つた處置は公正であつたらうか。彼自ら公正の神に叛いたのではあるまいか。此の神の威德が地上に行はれないのに絕望した彼は、實は自己に絕望させられたのではあるまいか。自分の遺品は人類の寶の如くに珍重せられて居るのを見ては彼の靈が何と思ふであらうか。

其れはともかく、ターナーにしても、此の日本の畫家にしても、何故に特別の祕密を其の仕事の中に保つたのであらう。私は幸ひに與へられた便宜に依つて、此の問題を研究しつゝあるのである。

御木本真珠店が折角築き上げた身代を息子の道楽で破産に瀕してあること、不思議な出来事であるが、其の道楽といふのは相場の失敗と酒色の借金などは、其の破産の原因であるけれども[illegible]それらよりは[illegible]知れてゐるのは、書籍店の[illegible]と云はれてゐる、殊にラスキン店に於で、ラスキンの遺品と云ふへの原稿一枚に何萬圓を費やすと云ふ事があつたれば、本の[illegible]ことびある。望湯家の息子が書籍店に於て巨萬の金を散じ[illegible]必ずしも無いかもするが、ラスキンとの集注した道楽は[illegible]は此の破産は日本の書中に於ても[illegible]ある事實であるので、書物店[illegible]御木本の[illegible]ことをこま

收めておく（九月三日）

航空燈臺とは？（下）

防空演習等にも重大な役割

裏日本唯一本社の燈臺

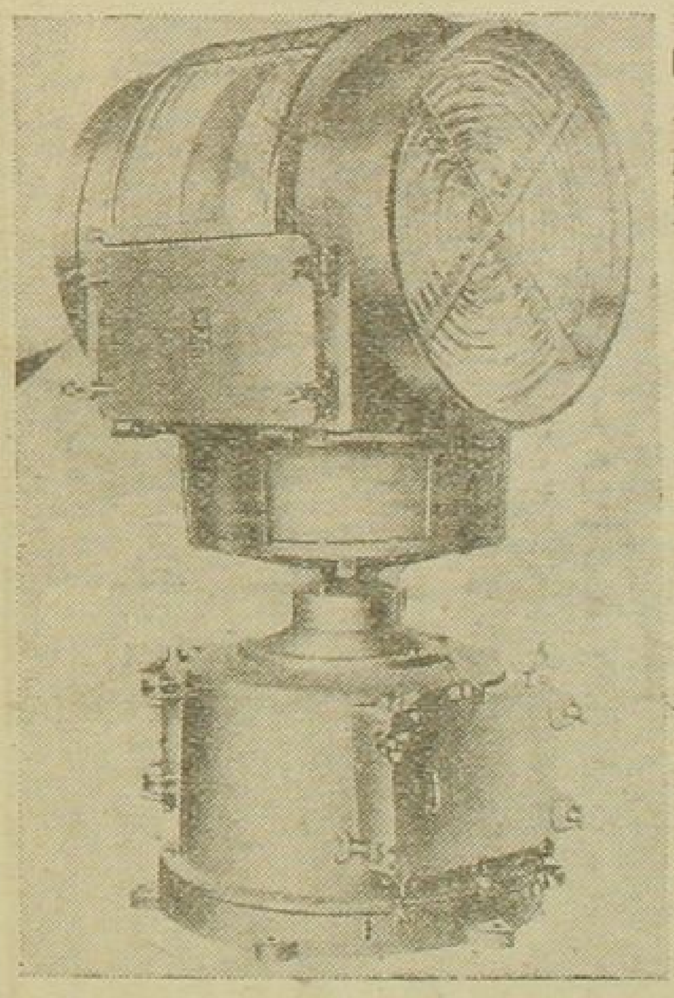
我國の公設私設航空燈臺は昭和六年大阪朝日新聞社の屋上に設置されたのがはじまりで、それ以來東海道、山陽線、九州、滿洲の各地に増設せられ燈そのものも年々進歩してより大型の完全精巧なものが出來ました今回新潟新聞社屋上に設置されたものは最新式の三秒閃光式大型航空燈臺で、この大型燈臺の現在設置場所は内地では箱根十國峠、燒津、常滑、生駒、鉢取山、苅田、冷水峠、名古屋新聞社で、滿洲では大石橋、鳳凰山、四平街、ハルピンの十二ヶ所で、新潟新聞社のそれは大型燈としては第十三番目で日本海沿岸北海道をかけて唯一のものであります

本燈台は新潟新聞社航空燈台と名命し、東經一三九度三分、北緯三七度五五分の

新潟 新聞社の屋上鐵塔に燈器を設け地上より灯火の中心まで三六米七七六の高さあり、遠く越後平野及び海上よりも望まれます

航空の標識燈は主として山間僻地に整備し使用するものですから構造は堅牢で、風雨、雪その他の障害に對しても何らの支障なく、毎日夕刻より日出まで四季變りなく三秒閃光を放射するものであります、も一電球が斷芯した樣な場合は自働的に電鈴及び電燈をもつて保守員に報知するとともに

豫備 の電球が自働的に斷芯したる電球と交替し焦點の位置に移動するやうになつてをり瞬時も消灯する樣なことがないのです。毎日の點灯、消灯の時間も非常に精巧な自働時限スヰッチで全く自働的に行ひ、新潟の緯度と經度から割出した日の出日沒時間を毎日少しづつかへながら忠實に働くのです。回轉裝置は原動力として四分の一馬力電動機を使用し作動は極めて圓滑に、燈籠内の温度整節をなす構造設備を有してゐます



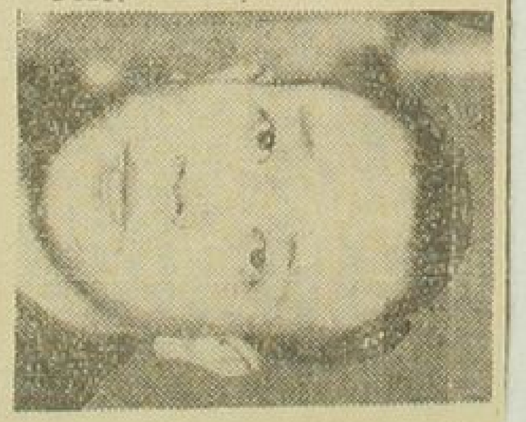
今や 新潟が空の港として裏日本の重要なポイントとなつて日本海制空時代に乘り出す時、こゝに航空燈臺の建設をみたのは極めて有意義なことで、平和の時に交通安全のしるべとなるのみならず、もし一朝事ある時、この燈臺は直ちに防空の看視塔となり、國防上重要な役目を演ずることゝなりそれ故防空演習などの時は本燈臺が防空演習の本部たる事を條件づけられてゐるわけで

或は 燈火管制の任にあたり、偽裝、遮蔽、防空監視、警報傳達等の重要任務はこの燈臺に課せられるものであります【寫眞は燈器】

浪花節

軍國の母！末期の乳房

八・五〇 梅中軒鶯童



〽胡砂吹きまくる滿洲や炎熱燃ゆる北支那の濁流渦まく揚子江、遠く異郷を血に染めて、骨を碎きし同胞が、祖國にかざる勲功は、歴史を彩る日本魂、散れや萬朶の櫻花

昭和十二年八月初旬のある日非常時色に包まれた某驛に辷り込んだ下關行き列車最後部の窓に老いたる母に見送られてゐるのは水兵服の中川正男君、職場の靜岡から召に應じて某地に向ふ途中久しく逢はぬ母と暫しの名殘を惜しむべく相擁したのであつた

〽嵐の如き歡呼を浴びてすべり出したる汽車の窓、身を乘出して會釋するたつた一人の愛し兒が、戰の場の首途と笑顏で送る老の母、之に應へて萬歳と叫ぶわが子今一目、顏が見たいとのび上り、のび上れども血眼は、いつか涙にかきぬれて、かくせど洩るゝ嗚咽の聲もかすれて消えて行く、けふの名殘は薄けれど、健氣な母や村人の、厚い心や熱情を、胸に抱いていざさらば、忠勇義烈の益良夫が行くは曠野か海原か

正男の負傷を村長から聞かされた母は正男に卑怯な振舞無かつたかをのみ案じたが上海北四川路附近で便衣隊狩りに奮戰した勇猛振りは軍の花と賞揚されその重態を惜まれ内地へ移送された、某病院からの通知に馳せつけた母は上官から健氣な勲功を聞いて心を休め病室に導かれたが正男はすでに耳も眼もその用をなさず懐かしい母の見舞を判らせる方法がなく軍醫も涙に顏をそむけるのであつた「軍醫樣一寸お待ち下さい、どうなる事か判りませぬが、最後のためしにこのわたしの乳房を含ませてやりませう、ハイ正男に取つては忘れる事の出來ない母親の乳ヒヨツとしたらわたしの來てゐることが通じるかも判りませんから」

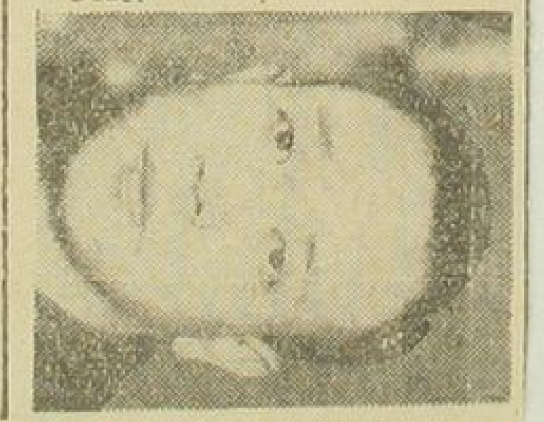
〽軍醫を始め人々が好奇の眼を見張る中、弱い腕に一杯の力を籠めてベットの上、抱き起して含ませた老い萎れた小さい乳房、時の經過が二分間、慈愛に滿ちた母親の一念漸く通じたか、今は微に呼吸のみ續ける瀕死の面差しに、感動の色アリ／＼と見えぬ眼にハラ／＼熱い涙が溢れ出る……たとひ一分一秒でも母の慈愛が通じたらそれで私も本望よ、そしてお前も戰場で思ふ存分手柄して母に抱かれて死んで行く、こんな冥利がどこにある、心殘りはないであらう

【寫眞は梅中軒鶯童氏】

○昨八月三十日夜の浪花節梅中軒とラジオで聞き母性愛の切なる情、乳を含ませるあはれに涙を誘はれた。

この昨八月三十日夜の浪花節
梅中軒とラジオで受けし母
壮言の切なる乳を含ま
せるあたりは涙を誘はれる

[illegible]



[illegible]

浪花節

軍國の母！末期の乳房

八・五〇 梅中軒鶯童

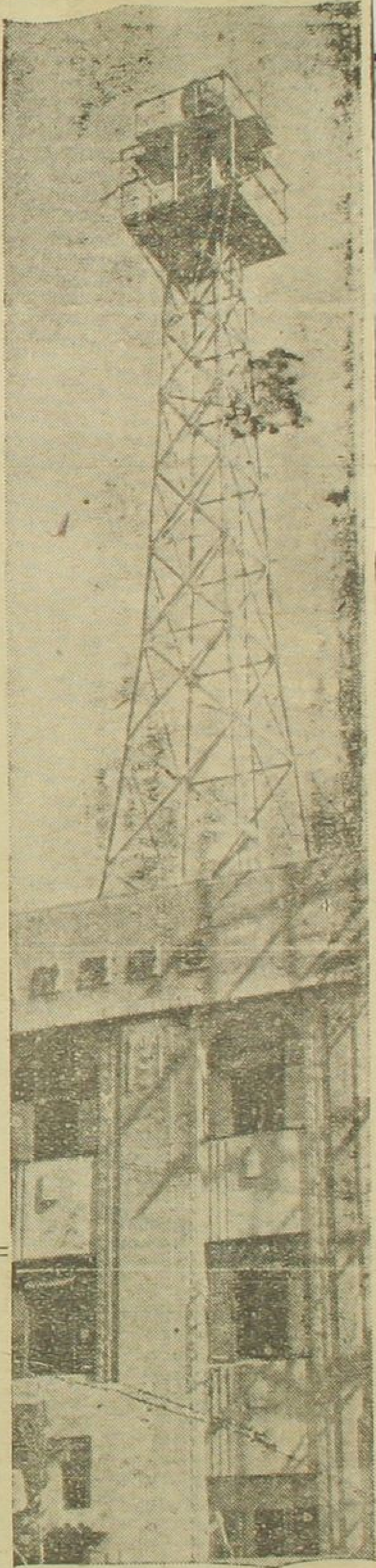
新潟新聞 十二年九月五日

（第三種郵便物認可）　昭和十二年九

本社航空燈臺

あすぞ晴れの竣功式

石油王新津恒吉翁の愛國篤志により去る二十二日工事完成、二十三日歴史的試驗點燈を行ひ縣民に力づよき感銘を與へた本社航空燈臺はいよ〳〵明五日、新秋の大氣も澄みわたり爽かな午前十時から本社屋上において盛野の名士の來臨下國家的意義も深き竣功式が盛大に擧行されることになつた、二十二日來港した遞信省逓上航空官の現場檢査を確認され公式點燈の許可がこの程下つたもので五日夕刻より連夜巨光は越佐の空を照すことになつた譯である、而して式は來臨者着席のうち神官によつて型の如く神事が行はれ、寄附者を美事パスしその優秀なる性能新津翁の手によつて塔上高く大國旗が揚げられることになつてゐる、なほ燈臺は極めて精巧なる構造であり日沒と共に點燈、日の出と共に消燈するのはすべて自動式でしかも緯度經度より割出された日沒、日の出時刻に分秒もたがはないもので、本社航空燈臺によつて日沒日の出はハツキリと知れる譯である【寫眞は航空燈臺】



本間正吉、芝澤正雄、曾川傳三、高橋萬喜、渡邊勘一、村山市作、上村孝平、田邊富治、榎　勘一、原平松、小池小一、三浦喜代作、高橋善五、中村作平、高橋典一、上村德一、乙川順作、村山昌平、村山與四郎、吉田三藏、菊地萬

負傷に乗客

改めて知る（九月三日）

榛原製

の破間川と言ふのは、越後國北魚沼郡小出町の下手で魚沼川へ合流するのであるが、これも水量は相當に多いのである。越後國と岩代國の國境銀山平の方から流れ出て來る大溪流であつて、淸冽な水が岩を嚙んで蕭々の響きを打つ。

小出町から上流三里のところに、破間川の大將淵と言つて底無しの淵がある。昔、この淵の崖の上に古寺があつた。或る年の夏の暴風雨に、恐ろしい山海嘯が起つて古寺は一瞬の間に、破間川へ押し流されてしまつた。

その時、寺境にあつた鐘樓も共に大將淵へ押し流されたが、その後鐘樓は鐘を失つたまゝ下流の岸へ漂ひついた。そんな譯で村人は、大將淵の底深く鐘が、沈んでゐるものと判斷したのであつた。

五六年過ぎて、寺も鐘樓も再建したけれど鐘がないので、大將淵の底から昔の鐘を曳き上げることになつた。そこで、杉の丸太で大きな筏を組み、それを淵の眞ん中へ繫いで筏の上へ水泳の達者な若者五六名を乘せ、綱を持つた猛者を水底に潛らせ、鐘の龍頭に綱を結び、引き揚げることにしたのである。

ところが、作業半ばに、どうしたはづみか筏が轉覆してしまつた。岸に見てゐた多くの村民が、アレヨ〳〵と言ふ間に、乘組の五六人の若者は水中へ落ち込んだまゝ、悉く行衞不明となつたのである。

不思議なことに、若者の屍體は一つも上らない。村中は大騷ぎとなつた。家族の者は泣き叫ぶが、死體は水中深く吸ひ込まれたと見えて下流の岸へ漂ひついたのが一つもない。

思案にあぐんで、小出町から鱒突きを稼業とする潛水の名人を雇つて來て、死體の搜索をやらせることになつた。潛水の名人は腹に白布を卷き、萬一の場合に備へるため銳い銛を持つて、ザンブと淵の底目がけ水中深く潛つて行つた。

ところが、三十秒ばかりの後潛水の名人は蒼くなつて泳ぎ上りブル〳〵と慄へ上つた。そして言ふに、鐘はたしかに淵の一番深いところに沈んでゐる。けれど若物の屍體らしいものは、一つも見當らない。その代り、鐘の傍に長さ一丈に餘る恐ろしく大きな眞鯉が、饅頭笠もある大きな鰓蓋を動かして泳いでゐた。もう、二度と潛つてく氣はありませんと、死體の搜索を拒絕してしまつた。

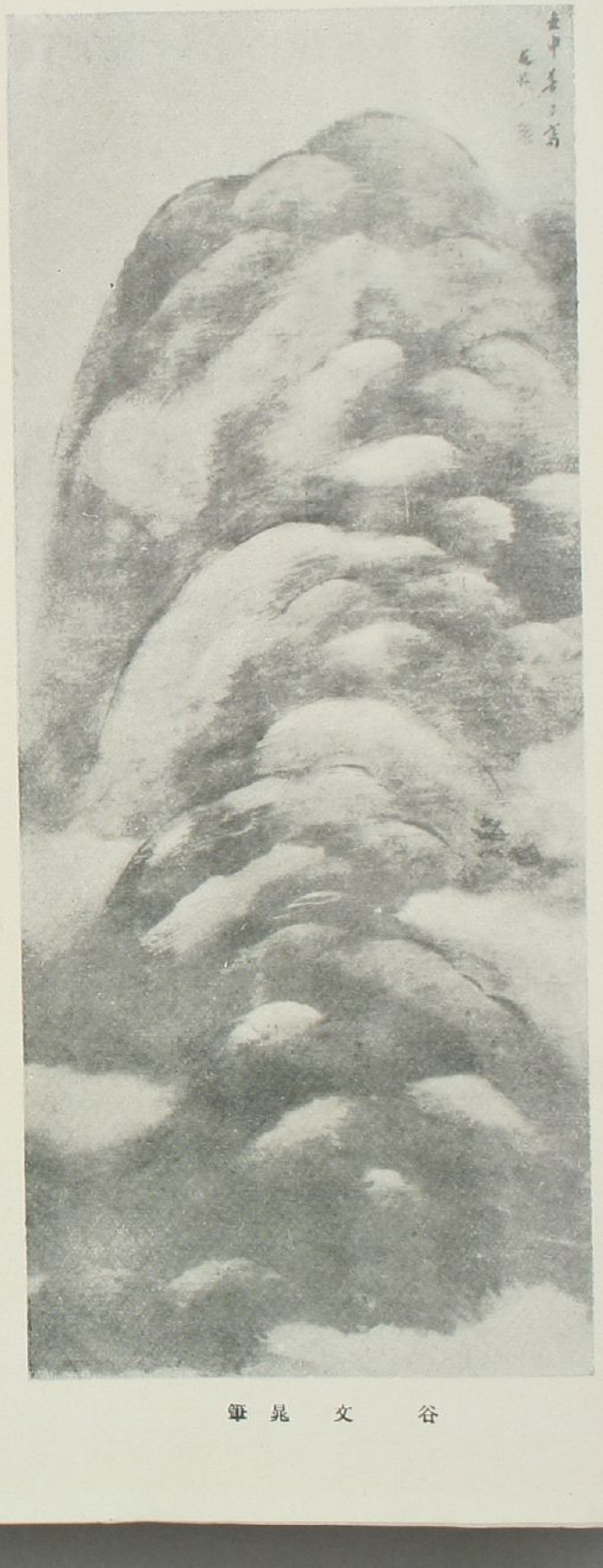
それから後每年、筏が沈んだ日が來ると、淵の水面にその大きな眞鯉が跳ね上つて姿を現す。

そして續いて淵の底から陰にこもつた鐘の音がゆるやかに聞えて來ると一緒に、淵の上へ漲つた霧の中から、五六個の人の姿がまぼろしのやうに泛び出すのを例とするさうである。

筆者は二三年前、破間川へ遠征して大將淵の鮎を狙つたのであつたが、村の人からこの怪話を聞いたのである。どんな激流も恐れない筆者もこの大將淵だけへは、竿を入れる氣にはなれなかつた。

——完——

榛原製



谷文晁筆

平綏線復興途上へ

八達嶺にて田中特派員發

支那人唯一の誇りに 自ら暴虐の魔手

修理に辛苦の我が兵

めちやくくに破壊された平綏線――南口より八達嶺にわたる平綏線路は鐵橋もトンネルも破壊され、レールも枕木も到るところはづされて支那軍敗走後の亂暴さは呆れる外はない、わが追撃を恐れて、防戦しつゝも鐵路破壊に一生懸命になつてゐたドサクサ紛れの狼狽振りが思ひやられる、いま皇軍進撃の跡を追ひ着々同線修理作業を進めてゐる戸澤部隊とともに全線を歩いてみた

南口から 八達嶺まで約二十キロ、この間すでに南口、居庸關間の十キロの修理は完成したが殘り十キロはいまだ手のつけられぬ暴虐の跡、無殘にかきむしられたまゝである、この平綏線こそ支那人のみの手によつて出來た唯一の隧道である、三十メートル進む毎に一メートル高くなる三十分の

の破壊の跡を修理してゆくわが部隊の苦心は想像以上である、しかしわが兵隊さんたちはすこしもひるまない

ナーニたかが支那軍の猾智恩でやつたことだ、大したことはない、すぐ復舊してみせるよ

〇〇車を眞先に立てゝどんどん進んでゆく

居庸關ま での破壊も亘數

へ假橋をつくりやうやく渡前ひの渡峽だ、さらに進むとレールが外されてゐる、假に殘つてゐても鋲が拔かれてゐる、枕木が外されてゐる、約百五十メートルの長さにわたつて全然枕木さへもなくなつてゐるところはザラにある

よくもまあ根氣よく徹底的にやつたものだ

多い、トンネルは大關、八達嶺間に二つ、八達嶺トンネルとともに三つだが、いづれも支那軍の宿營

に當てられたものらしく、西瓜や南瓜やなすびなどがゴロゴロ轉がり、眞暗な中では人間の頭かと氣味の惡いことおびたゞしい、手榴彈が箱につまつて積み重ねられ、シャベルが百數十散らばつてゐる、支那兵は退路の跡にひもを張り手榴彈をくゝりつけて、うつかり觸れると爆發する仕掛けをよくやつてゐる、トンネル內などは最も危險地帶だ、胴衣や帽子などや鋲、釜などがころがつてごつた返してゐる中をビクビクしながら足摺りしながら歩いてゆく

大關から 少し先の鐵橋は約六十メートルばかり、六つの橋桁のうち二つは根こそぎやられて橋板は川底にひつくりかへつてゐる

こいつあ、壊すのに骨折れたらう、支那軍も中々骨折るもんだと大笑ひ、御苦勞さんな破壊大作業もわが皇軍部隊にかゝつては笑殺されるだけのはなしである、殘つてゐる品はいふまでもなくわが部隊の戰利品である

しかし八達嶺の大トンネルだけは最も厄介なもの、入口が破壊されて土砂、岩に埋まり中には貨物列車が機關車もろとも十數輛脫線してゐる、トンネル內の石壁も崩れ、支那兵宿營の後は糞で臭い

八達嶺の 峠を越えてもまだ破壊の跡は中々絶えない、察哈爾省と河北省を結ぶ唯一の道路はかくてさんざんに破壊されてしまつたのだ

皇軍の北支新建設の第一歩はまづこの平綏線復舊工事から着々始められてゆくのである、すでに寒い山間に大汗を流す〇〇部隊の辛苦は連日の奮闘の上に重ねられてゆく

議員慰問團上海へ

北支にある皇軍將士慰問を行つた衆議院議員皇軍慰問團小泉又次郎氏等一行に次いで、は上海皇軍慰問のため西岡竹次郎氏を團長に理事平野光雄、同大野伴睦、川崎巳之太郎、信太儀右衛門、杉山元治郎、岡田春夫、羅井義道、喜多壯一郎、武知勇記、西川貞一各代表議員及び生野衆議院理事官、齋藤屬の慰問團一行は九日午後一時衆議院に集合、宮城遙拜、明治神宮に參拜、皇軍の武運長久を祈願の後午後三時東京驛出發した

平綏線復興途上へ

八達嶺にて田中特派員發

支那人唯一の誇りに 自ら暴虐の魔手

修理に辛苦の我が兵

めちや／＼に破壊された平綏線――南口より八達嶺にわたる平綏線路は鐵橋もトンネルも破壊され、レールも枕木も到るところはづされて支那軍敗走後の亂暴さは呆れる外はない、わが追撃を恐れて、防戰しつゝも鐵路破壊に一生懸命になつてゐたドサクサ紛れの狼狽振りが思ひやられる、いま皇軍進撃の跡を追ひ着々同線修理作業を進めてゐる戸澤部隊とともに全線を歩いてみた

南口から 八達嶺まで約二十キロ、この間すでに南口、居庸關間の十キロの修理は完成したが殘り十キロはいまだ手のつけられぬ暴虐の跡、無殘にかきむしられたまゝである、この平綏線こそ支那人のみの手によつて出來た唯一の鐵道である、三十メートル進む毎に一メートル高くなる三十分の一の傾斜は普通の機關車では登れぬ急坂である、この急峻な山道を攀ぢ登る線路建設は、支那人技術界の誇りとして威張つてゐたのも今は憐れ、彼ら自身の手によつて破壊し去つてしまつたのだ

不遜にも 皇軍の威力を認めず挑戰した結果、この「誇りの鐵路」を毀さなくてはならなくなつた彼らの不明を今こそ痛感してゐることだらう、それにしてもこの破壊の跡を修理してゆくわが部隊の苦心は想像以上である、しかしわが兵隊さんたちはすこしもひるまない

ナーニたかが支那軍の猿智恵でやつたことだ、大したことはない、すぐ復舊してみせるよ

〇〇車を眞先に立てゝどん／＼進んでゆく

居庸關までの破壊も百數十ケ所に達してゐたが、しかし、これから先の慘状に比べればまだ質のいゝ方だつた、居庸關を出るとすぐ谷にかゝつた、高さ四十メートルのコンクリート鐵橋がある長さ約十メートル下を覗けばぞつと身の毛のよだつやうな峽谷の底にレールも枕木も鐵板も木つ葉微塵になつて投げ込まれてゐる、コンクリートも爆破されて向ひ側へ渡れない、大木を切つて向ひ側へ假橋をつくりやうやく渡前ひの渡峽だ、さらに進むとレールが外されてゐる、假に殘つてゐても鋲が拔かれてゐる、約百五十メートルの長きにわたつて全然枕木さへもなくなつてゐるところはザラにある

よくもまあ根氣よく徹底的にやつたものだ

呆れることは、しかしこれだけでない、呆れ方にも色々あつてナンセンスなことには折角外したレールも枕木も遠くへ運んでおけばいいものをすぐ線路の側に置いたまゝだ

こいつあ 修理も樂だ、ヨイショ／＼と力を合せてまたゝく間に元通りになつてゆく、夜營の暖を取るために枕木を燃やした個所がある、トンネル附近には殊に多い、トンネルは大關、八達嶺間に二つ、八達嶺トンネルとともに三つだが、いづれも支那軍の宿營に當てられたものらしく、西瓜や南瓜やなすびなどがゴロ／＼轉がり、眞暗な中では人間の頭かと氣味の惡いことおびたゞしい、手榴彈が箱につまつて積み重ねられ、シャベルが百數十散らばつてゐる、支那兵は退路の跡にひもを張り手榴彈をくゝりつけて、うつかり觸れると爆發する仕掛けをよくやつてゐる、トンネル内などは最も危險地帶だ、胴衣や帽子など鍋、釜などがこんがらがつてごつた返してゐる中をビク／＼しながら足探りしながら歩いてゆく

大關から 少し先の鐵橋は約六十メートルばかり、六つの橋桁のうち二つは根こそぎやられて橋板は川底にひつくりかへつてゐる

こいつあ、壊すのに骨折れたらう、支那軍も中々骨折るもんだと大笑ひ、御苦勞さんな破壊大作業もわが皇軍部隊にかゝつては突破されるだけのはなしである、殘つてゐる品はいふまでもなくわが部隊の戰利品である

しかし八達嶺の大トンネルだけは最も厄介なもの、入口が破壊されて土砂、岩に埋まり中には貨物列車が機關車もろとも十數輛脱線してゐる、トンネル内の石壁も崩れ、支那兵宿營の後は糞で臭い

八達嶺の 峠を越えてもまだ破壊の跡は中々絶えない、察哈爾省と河北省を結ぶ唯一の道脈はかくてさん／＼に破壊されてしまつたのだ

皇軍の北支新建設の第一歩はまづこの平綏線復舊工事から着々始められてゆくのである、すでに惡い山間に大汗を流す〇〇部隊の辛苦は連日の奮闘の上に重ねられてゆく

議員慰問團上海へ

北支にある皇軍將士慰問を行つた衆議院議員皇軍慰問團小泉又次郎氏等一行に次いで、は上海皇軍慰問のため西岡竹次郎氏を團長に理事平野光雄、同大野伴睦、川崎巳之太郎、信太儀右衛門、杉山元治郎、岡田春夫、羅井義道、喜多壯一郎、武知勇記、西川貞一各代表議員及び生野衆議院理事官、齋藤屬の慰問團一行は九日午後一時衆議院に集合、宮城遙拜、明治神宮に參拜、皇軍の武運長久を祈願の後午後三時東京驛發出發した

（第三種郵便物認可）　昭和十二年八月二十九日　（日曜日）　東京朝日新聞

草の根で飢を凌ぎ 戰友の屍背負ひ前進

彈丸盡きて敵彈逆用

壯烈・鬼神も泣く長城線上の山嶽戰

戰端開始以來の激戰・わが戰史に燦たる一頁

天津にて磯野・天野兩特派員二十七日發

察哈爾省内に中央軍五個師を送り南口鎭から八達嶺、一九三〇米高地鐵道城を連らねる長城線一帶の峻嶮な山嶽地帶に據り虎視眈々として平津の奪回を策してゐた敵軍は我が空軍の二週間に亙る鬼神の如き攻擊によつて遂にその天嶮を固守し切れず潰走するに至つたがこの山嶽戰は北支における日支の戰端開始以來の最大の激戰であり我が箱根山の天嶮を一層大きくした大行山脈支脈で、この天嶮は二千年の昔秦の始皇帝が北方の夷狄に備へて蜿蜒たる長城を構築して略し安泰を期しただけあつてこの歷史的な山嶮を再び擁して我が皇軍を背後から邀擊せんとの作戰に出でた敵軍攻擊のためには我が皇軍は殆ど想像に絶する惡戰苦鬪を重ねたが、親しく戰場を視察した我が軍司令部の某幕僚は壯烈な奮鬪の模樣を次の如く語つた

敵大軍が占據

した山嶽地帶は箱根の嶮よりもなほ峻嶮な山又山の地帶で千四百米に近い高地もある上に我が部隊が進擊すべき道とては南口鎭から出る鐵道とこれに沿うた一本の隘路しかなく道なき峻嶮の山を岩にすがり絶壁を攀ぢて攻擊して行く勇苦は殆ど想像に絶するものがあつた、地圖の上で見れば僅に四キロ位しかない道程を實際に攻擊してみると五時間もかゝる始末である、その上に山の頂きは深い霧がかゝつてゐるので飛行機の偵察は全くきかず、それのみか霧に包まれて山頂に突き當て墜落戰死するといふ犧牲すら出した位だこの天嶮に據る敵軍は逐次增加されて東部の交戰が始まる頃には既に中央軍の精鋭五個師團集結、平津一帶の日本軍に對して背後から一擧に攻擊して徹底的打擊を與へるといふのが蔣介石の企圖であつた、而も裝備も決して馬鹿にならず優秀なチェッコ製の輕機關銃、重機關銃を備へる外支那軍

獨特の迫擊砲

を多數備へてゐる有樣で重機關銃の如きは我が軍よりも多く兵力も我に數倍する大軍でじりじりと寄せて來た而も峻嶮な山嶽戰だけに我が軍の攻擊は平地戰と違つて多大の時日を要し糧食彈藥の補給も戰局の進展につれて益々困難となり前線將兵の困難言語に絶した、而し北支全般の戰局を思へば補給の圓滑を待つ余裕とてはなくたゞ遮二無二進擊突擊して敵軍の企圖を未然に防止せなければならなかつた、此ため我が將兵は苦戰し前線の指揮に當つた○○部隊長の如きは自ら飛行機に乘つて隈なく前線を飛翔し各戰場に機上から激勵の通信筒を投下して前線兵士を鼓舞激勵、將士も機上の部隊長を見上げて感激する等の場面が前線に展開した、この戰鬪は殆ど未曾有ともいへる將兵一體となつた肉彈戰だつた、かくて長城線上の敵陣も遂に二週間の攻擊で完全に崩壞するに至つた、この肉彈戰は彈藥糧食全く盡きた程で敵軍の遺棄した彈丸を拾ひ集めて敵に浴せる等はまだいゝ方で手榴彈盡きた後は

煉瓦を敵陣に

投付けて突擊するといふ肉彈戰で我が將兵の苦鬪は想像に絶する

最初坂田部隊は南口鎭攻擊に先立つ十日の夜半に行動を起し、白羊城、陳家堡方面から長城線を突破して敵陣地を側面から攻擊する手段に出でたが敵軍は我に數倍する四個師團の多數、八月十三

あゝ壯烈な進擊

米國通信社が確認

【ニューヨーク特電二十七日發】北平二十七日發AP(米國聯合通信社)の報道によれば北支における日本軍は長城線を突破して南口鎭及び宣化、懷來方面において徹底的に支那軍を壓迫しつゝあることが確認さるゝに至つた

即ち日本軍の部隊は本隊から遮斷され食糧彈藥を使ひ果したが險しい巖山を攀ぢて南口鎭を見下す四二〇〇フイートの高地に占據する支那軍の側面部隊に對し僅に敵から分捕つた一挺の機關銃と戰友の屍を楯として攻擊、つひにこの地點を奪取した、これに對して猛烈な逆襲を試みた支那軍主力に向つて大きな岩石を投落してこれを潰走せしめた、この戰鬪は豪雨の中で行はれ日本軍は屢々敵の脅進路を失つたが退却する支那軍の生々しい血の跡を辿つて追跡したのであつた

草の根で飢を凌ぎ 戰友の屍背負ひ前進 彈丸盡きて敵彈逆用

壯烈・鬼神も泣く長城線上の山嶽戰

戰端開始以來の激戰・わが戰史に燦たる一頁

天津にて礒野・天野兩特派員二十七日發

察哈爾省内に中央軍五個師を迭り南口鎭から八達嶺、一九三〇米高地鎭邊城を連らねる長城線一帶の嶮峻な山嶽地帶に據り虎視眈々として平津の奪回を策してゐた敵軍は我が空軍の二週間に亙る鬼神の如き攻撃によつて遂にその天嶮を固守し切れず潰走するに至つたがこの山嶽戰は北支における日支の戰端開始以來の最大の激戰であり我が箱根山の天嶮を一層大きくした大行山脈支脈で、この天嶮は二千年の昔秦の始皇帝が北方の夷狄に備へて蜿蜒たる長城を構築して誇し安泰を期しただけあつてこの歴史的な山嶮を再び擁して我が皇軍を背後から邀撃せんとの作戰に出でた敵軍攻撃のためには我が皇軍は殆ど想像に絶する惡戰苦闘を重ねたが、親しく戰場を視察した我が軍司令部の某幕僚は壯烈な奮闘の模樣を次の如く語つた

敵大軍が占據

した山嶽地帶は箱根の嶮よりもなほ嶮峻な山又山の地帶で千四百米に近い高地もある上に我が部隊が進撃すべき道とては南口鎭から出る鐵道とこれに沿うた一本の隘路しかなく道なき嶮峻の山を岩にすがり絶壁を攀ぢて攻撃して行く勞苦は殆ど想像に絶するものがあつた、地圖の上で見れば僅に四キロ位しかない道程を實際に攻撃してみると五時間もかゝる始末である、その上に山の頂きは深い霧がかゝつてゐるので飛行機の偵察は全くきかず、それのみか霧に包まれて山頂に突き當て墜落戰死するといふ犧牲すら出した位だこの天嶮に據る敵軍は逐次増加されて東部の突戰が始まる頃には既に中央軍の精鋭五個師團集結、平津一帶の日本軍に對して背後から一擧に攻撃して徹底的打撃を與へるといふのが蔣介石の企圖であつた、而も裝備も決して馬鹿にならず優秀なチエッコ製の輕機關銃、重機關銃を備へる外支那軍

獨特の迫撃砲

を多數備へてゐる有樣で重機關銃の如きは我が軍よりも多く兵力も我に數倍する大軍でじりじりと寄せて來た而も嶮峻な山嶽戰だけに我が軍の攻撃は平地戰と違つて多大の時日を要し糧食彈藥の補給も戰局の進展につれて益困難となり前線將兵の困難言語に絶した、而し北支全般の戰局を思へば補給の圓滑を待つ余裕とてはなくたゞ遮二無二進撃突撃して敵軍の企圖を未然に防止せなければならなかつた、此ため我が將兵は苦戰し前線の指揮に當つた〇〇部隊長の如きは自ら飛行機に乘つて隈なく前線を飛翔し各戰場に機上から激勵の通信筒を投下して前線兵士を鼓舞激勵、將士も機上の部隊長を見上げて感激する等の場面が前線に展開した、この戰闘は殆ど未曾有ともいへる將兵一體となつた肉彈戰だつた、かくて長城線上の敵陣も遂に二週間の攻撃で完全に勝敗するに至つた、この肉彈戰は彈藥糧食全く盡きた程で敵軍の遺棄した彈丸を拾ひ集めて敵に浴せる等はまだいゝ方で手榴彈盡きた後は

煉瓦を敵陣に

投付けて突撃するといふ肉彈戰で我が將兵の苦闘は想像に絶する

最初坂田部隊は南口鎭攻撃に先立つ十日の夜半に行動を起し、白羊城、陳家堡方面から長城線を突破して敵陣地を側面から攻撃する作戰に出でたが敵軍は我に數倍する四個師團の多數、八月十三日午前十時半頃坂田部隊長が約〇〇名の兵力を以て前進中を發見した敵軍は我が軍少しと見て忽ち猛烈な攻撃を始めて來た、七百名余の敵軍が山を越え谷を渡つて蟻の大軍のやうに眞黒な一團となつて突如逆襲して來た、坂田部隊は直に攻撃を開始し敵は我が高地の機關銃隊の猛射を浴びて逃走三百の死體を殘して敗退

然しこの時坂田部隊は我が主力と全く聯絡杜絶し攻撃の生命である彈藥と糧食も殆ど盡きたので敵の遺棄した輕機關銃と彈丸を拾ひ集めてこれを逆用し、また兵士の堅パンや米も食べ盡してしまふといふ有樣だ、粟、高粱を食ひ始めたが高峻な山の中に入つてはこれも直ぐ見當らなくなつたので玉蜀黍を掘り野生の林檎や馬鈴薯を唯一の食物として進む外なかつた、友軍から時々飛行機で堅パンや食糧を投下してくれる時は無性に嬉しかつた、この戰闘で前の上海戰の勇士栗原大尉は敵彈を受け悲壯な戰死を遂げた、次いで石川枝隊長は〇〇名の部下を率ゐて眞先に長城線に飛込みその一角を奪取

最初の凱歌を

揚げたがこれ又その後主力と離れること一週間文字通り草の根を嚙り木の葉の露をすゝつてこの一角を死守しつゞけ戰死した勇士の屍は敵に一指も觸れさせじと背中に子供を負ふやうにしてくゝりつけて悲壯な前進と行軍を續けひたすら友軍の到着を待つたのであつた

十九日正午頃坂田部隊救援の命を受けた大場部隊は車軸を流すやうな豪雨の中を急行した、道とてもなく、雨のため増水し腰まで没する中を盲滅法一列縦隊に前の戰友の帶皮にしつかりと摑み合ひ、雨を吸つて一層重くなつた軍裝を捲り上げつゝ手さぐりで、闇の中を進軍を續け二十日午前六時漸く坂田部隊の苦戰する山を望む山麓に到着した

既に戰機は切迫してゐる、隊中より健脚の突撃兵〇〇名を選り健脚部隊を組織した、率ゐる者は大本部隊長だ、何しろ臍を突く峻嶮だ

猿も登れない

酷い傾斜だ、午後四時日沒前に漸くその一部が頂上に辿り着いた、部隊長同士は唯手を握り合つて涙の眼を見合はせるのみ、かくて二十一日夜明けには殘りの全員も前進を開始したこの山は後に山田山と命名されたが敵の砲撃は猛烈を極めて漸く山腹に辿りついた我が勇士も次から次と敵の迫撃砲彈に殪れる、偶然にも我が方に射ち殘りの〇〇彈五發があつた、一齊射撃だ、確實な命中に敵の迫撃砲も完全に沈默した、その間に突撃だ、正午頃山上で痛烈な肉彈戰が展開された、夕刻近く山の一角に突然、眞に突然「萬歳々々」の歡聲が起り日の丸の旗が翻つた、山の一角は奪はれた、志鶴部隊長が腕に貫通銃創を受けながら飛込んだ、次いで松尾部隊長が飛込んだ、大本部隊長は重傷を負ひながら突入した、泉部隊長は僅々〇名になつた手兵を率ゐて馳上つた、喜びの瞬間、しかし一三九〇高地から逆襲する敵を撃破すべく二時松尾部隊は壯烈なる夜襲を敢行した、さしもの敵も潰滅、拂曉近く我が方は約半數の犧牲者を出しながらも完全にこの山を占據したこの激戰は日露役の二〇三高地の激戰にも比すべく、夥しい敵の死骸の中に我が將校の軍刀で眞二つにされ鳥柱から下まで兩斷された敵將校の死體もあり慘として面を覆はしめた

山を占領した

我が軍は更に息も繼がず逃げる敵を猛追撃だ、その目印は谷底の石の上に點々と續く敵の血痕だ、遺棄された兵器彈藥、鐵兜だ、かくて大場部隊の二キロの突出戰により我が軍の全面的長城線突破の機緣を作つたのだ

大場部隊の三日三夜の惡戰苦闘は他の戰史にも見られぬもので我が兵は負傷した戰友を肩に、戰死者の遺骸は數名代る代る背に負ひ進軍を續け筆舌に絶する惡戰苦闘は漸く成果を得て二十四日夕刻遂に部隊は懷來の平地に進出することが出來たのである

あゝ壯烈な進撃

米國通信社が確認

【ニューヨーク特電二十七日發】北平二十七日發AP（米國聯合通信社）の報道によれば北支における日本軍は長城線を突破して南口鎭及び宣化、懷來方面において徹底的に支那軍を壓迫しつゝあることが確認さるゝに至つた

即ち日本軍の部隊は本隊から遮斷され食糧彈藥を使ひ果したが險しい巖山を攀ぢて南口鎭を見下す四二〇〇フイートの高地に占據する支那軍の側面部隊に對し僅に敵から分捕つた一挺の機關銃と戰友の屍を楯として攻撃、つひにこの地點を奪取した、これに對して猛烈な逆襲を試みた支那軍主力に向つて大きな岩石を投落してこれを潰走せしめた、この戰闘は豪雨の中で行はれ日本軍は屢々敵の爲進路を失つたが退却する支那軍の生々しい血の跡を辿つて追跡したのであつた

映畫界始まつての新企劃・勇壯空中戰の典型・日本古來の幽玄な

肉彈・寶山城を占領

――寶山城にて高橋特派員六日發――

爆藥を抱き敵陣突入

壯烈・金田部隊決死隊

揚子江とその支流黃浦江の合流點の突角に位置し揚子江の要害を扼する寶山城は遂に完全に我が軍に占領された、記者は最前線に決死從軍し壯烈なる戰鬪の狀況を目のあたり見ることが出來た、六日江南の空は一點の雲もなく快晴である、午前九時を期して友軍の飛行機が寶山上空に快翔を續け後方砲兵陣地よりは寶山城目がけて猛烈なる一齊射撃を開始した、城内よりは濛々たる砲煙土煙が上る○○は躍進又躍進、寶山城に迫り城壁に砲撃を浴せる、金田部隊長の命令は下つた、寶山城南門目がけて江岸を前進した○○部隊長の指揮する決死隊がその最先頭を突進する

我が砲撃

は益〻猛烈だ見よ！煙幕の中を突進するは加藤勉伍長の指揮する渡河班十三名である、天佑なるかな城壁外側のクリークは今しも干潮で河中は狹く水は淺い、渡河班は擔いで來た竹作りの橋を渡り次いで渡邊義郎伍長の指揮する一班十八名が四つの梯子を提げてクリークを渡り突進し高さ四十尺の煉瓦と石疊の城壁に梯子をかける、敵は城壁上の彼方此方から機關銃、小銃を猛射するが決死のわが勇士は少しも怯まず進む、南門の右手、わが梯子を掛けた附近には城壁の上から百名ばかりの敵が盛んに手榴彈を投げつける、四つの梯子の中第一と第四の梯子から佐野宗平伍長の指揮する九勇士が城壁をよぢ登る、敵は機關銃小銃を猛射する、○○の火蓋は切られ、眞つ赤な火柱が揚つた、この中を磯野員正伍長の指揮する十三勇士が四つの梯子から城壁によぢ登るその先頭を行くは堀政一上等兵、三井伊佐男、石川平一、櫻木定治一等兵の四勇士、いづれも背中に爆藥を背負つて居る、敵は猛烈に射撃を浴せる爆藥は城壁の上に置かれた、磯野伍長の點火！の命令一下導火索に火が點ぜられ城壁上の勇士は四十尺の城壁上から飛降り

その瞬間

天地も裂ける大音響と共に二十尺幅もある城壁は爆破され黑煙濛々として四邊を包む、爆藥に點火して爆發まで僅に二十秒、わが決死隊勇士の神業にも等しい迅速な奮闘だ、後方砲兵陣地よりの城内目がけての砲撃は尚盛んに續けられてゐる、寶山城南門の前面に展開する金田部隊は城内目懸けて○砲、機關銃の猛射を浴びせる、城壁は既に完全に爆破された、この時安藤部隊長の指揮する突撃隊が天も裂けよとばかりの喊聲を擧げて突撃する、城壁上及び城内にあつた數百名の敵は算を亂して退却する

城壁上は

既に我が軍のものだ、逃げて行く敵に機關銃の猛射を浴びせる、敵は城内にある市街へと算を亂して逃げ込む、何時の間にか金田部隊長も二十貫の巨軀を城壁上に見せて「射て〳〵」と號令を下してゐる見よ南門は我が一番乘りの勇士によつて日章旗が高く掲げられて蒼空に飜つた、寶山城占領萬歳は高く強く叫ばれる、時正に午前十一時

"國の爲喜んで死ぬ"

前線に語る一兵士

六日の朝が明けた、別項の如き決死爆彈六十一勇士について安藤部隊長の指揮する突撃隊が前進する、將兵の面には堅い決心の色が見える、敵彈は絶え間なく飛んで來る、勇猛壯烈な金田決死隊の突撃を見て記者はどうしてぢつとして居ることが出來よう、記者の全身は血沸き肉躍る、日本男兒だ！記者も敢然決死隊の後に從つたのだ『記者殿、報道班も全くの決死隊の一員ですね』一兵士が記者に言葉をかけてくれる『この壯烈な光景を眼前に見ながら記者もあの城壁をよぢ上らなければ日本男兒の恥だ』と記者は答へる『それでも新聞記者は少し後方にゐて敵彈を避けなければ報道の任務が果せないでせう私達はこの戰鬪の有様をあなたによつて全國に報道して貰ふのだと思ふと益〻士氣が昂り熱血が全身に迸ります、私達は陛下のためお國のためこの爆藥筒を抱いてあの敵城壁の上で喜んで名譽の戰死を遂げます』壯擧を前にして何といふ我が勇士達の落着き拂つたその態度、その言葉であらう

記者は第二突撃隊の勇士と共に木蔭に隱れて決死隊の突撃を見送つた、やがて城壁爆破後勇士達と一緒に梯子を上り城壁上に驅け上つたのであつた

午後一時半を期して我が後續部隊は續々と入城廢墟の街を逃げ惑ふ敵を追撃に夕刻に至り遂に城内の敵兵を殲滅したのであつた

殊勳の勇士

【寶山城にて高橋特派員六日發】寶山城占領の爆彈六十一勇士の内の殊勳者は

城壁爆破班藤井部隊の磯野員正伍長を班長とする近藤春三、堀正一の二上等兵、石川德太郎、鈴木春治、大橋榮、洞田秋夫、柴田秋、三井磯男、海野啓次、彦坂太一、石川平一、櫻木定信各一等兵の十三勇士、○○班佐野宗平伍長を班長とする夏目正夫、大宮消長、近藤直正四勇士梯子班渡邊義市伍長を班長とする伊藤寬代吉上等兵、新堀哲夫鈴木寅二、鈴木正行の各一等兵の五勇士である

鈴木中尉戰死す

【上海七日發同盟】五日午前十一時頃寶山附近大新巷宅附近の敵陣地に敢然軍刀を揮つて突入、身に六個の彈丸を受けながら敵兵七名を見事に斬り倒した鈴木正英中尉（福島縣出身）は壯烈な戰死をした、又同中尉と共に杉浦源松准尉も腹部に敵彈を受けて名譽の戰死

【上海特電六日發】五日午前寶山城南方大廟附近における激戰で金田部隊の大島富士雄、澤田龍の兩一等兵は壯烈なる戰死を遂げ渡邊健造一等兵は重傷負つた

靜官屯占據

津浦線

【唐官屯にて林田特派員六日發】馬廠攻撃第三日の六日早朝、我が赤柴部隊は馬廠河と運河の三角地帶にある靜官屯を占領し今や馬廠の敵營も愈〻近くなつた、この日戰場一帶濃霧が立籠め視界百メートル、敵は馬廠河の津浦線以東に泥水を氾濫させ田野は四尺の水浸りとなつてゐる中に○○部隊は激戰中

○近刊の郷土関東誌に「江戸前のすし」を云ひ出たのがひどく気分を喰らつた、如

今雑誌の由縁の著者であるらしいが、ここに始めて

置くこととしたが、其の自分は特に鮨に趣味をもつてゐたのであるから述

人であるから、自分の幼年の頃のことどもを考へてみると、自分の生

れた家の今は小さい町だが、維新前は天領で代官所があり金場の藩

ある小さな関係から、宅中で「ハゲの鮨」と通呼して食つても安いけれども

だけは、伊勢の関係、鮨米は「ハゲ」を限ることを思つてゐたもの。自分の母方の明治

に今もなほ「すし屋」と呼んでゐる料理屋があるが、此家の主人は俳諧

の江戸流で、料理人でも殿の藩の鮨を作ることが専門で、其

地柄不似合の老人であつた。自分が明治八年自母方の祖父と同伴

して出京した時、書画や俳諧であつたのが此のすしやの主人で

その作品を田舎まれに此、今尚へてあるのは蒲焼の葉山葵の表

ぢのみーしを副へ作りして江戸前ではあつたが鮨はどこでもあつたと今なほ

覚へかきへ。従つて考へるとコンナに縁因があるが、郷里での鮨は

正月若い衆祝ひにも飲ませたもので雑いとしたものは鮭の領ずりで、之は家庭

で作る押し鮨で糀をつけたもので年少者の口には容易に這入らないもの

であつた。寺泊や出雲崎などの海濱では小鯛の腹を割き一豆腐の

カラを入れ各々鮨と田舎で唱へてゐたが、うまかつた。東京へ出て来て夢の

様に思つたのは鮨が江戸時代から一名物でどこへ行つても自慢して

馳走に出されるものであつた。後で考へると東京濱の小魚

が尤も鮨の材料に適するからと握りの技術に長じてゐるものとも

が自慢の原因でもあらうが、自分などは味覚が鈍かも知れないが大

まで感心もしなかつたが、段々其の技術に連れられて行つたりして漸

やく、鮨は江戸的の芸術であると感じ始めたが、尤も感じたこと

の追憶を一二語ると或る時鮨屋を訪ねて酒の下物にコハダの鮨
のようなものを注文しようとすると流石はここのは料理屋などの通つて如何にも鮨
がよく利いてゐるので、酒の量を過した。是から飛驒屋と名高
かい屋の薹鮨店があつてある通人に案内されて立喰をやつた時
種々の材料を自分の好きに任かせて目前で握らせて食つてみた
いとく感心したが、其の材料の甚だ價の高いのも無理はない。醇な、
一回位を合はせ平均するのに何んでいらう。それ。亦或る時或る此道の通
人に頼んで、蠣売町の鮨幸に入り特別注文の握りずしを食
つたが、贅を尽して材料を選び盛つて出すので、一種の風味が出して
が、其の一方の職人がよく工夫をしてゐて、生姜を出すと次きに
玉子焼のようなものを出し、山葵の入つたもの又次ぎには海老のおぼろを出
すといふ塩梅にしし調和がとれてゐるのに感心した。是がテンプラ

ま激つて世家に鮨を握らせ杯を挙げるのも一興である。先年鮨
は江戸趣味のようで酸味の利いてゐる所に味があり、自分などは
大阪ずしを甚だいやがるが、志かし京都のすしも又々種類多く
、あるのは遺憾だ。マグロのすしが無闇に頭店されてコハダなどが
が影を潜めたがまでよろづいふよを材料とするのに鮨の本義から
外れてゐる、別して醤油を點ずる風は田舎くさくつて厭
ふべきものである。自分は近頃の絵画を今の時のすしに比しれ
ことがある、すしの形態は著しく変つて其の頃の
以き方、材料の選み方、材料の調理方が各々下落した
てに入れて見たら、著しく甚しく異様であるさを感ずるが、今の
絵画もそんなようで形は兎も角も一応検討すると醤
油と山葵の附け味一般がある の糊塗のまいの吃味を考へる

江戸前のすし

小泉迂外

江戸前といふと、一般にはにぎり鮨を指していふやうになつてゐるが、今のやうに鮨を握つて食べさせるといふことは文政以降で、それまでは、江戸つ子も京阪のやうに壓した鮨を食べさせられて喜んでゐたわけである。

鮨を握つて賣り出したのは、巷説では、筆者の家祖のやうに傳へられてゐるが、これについては、二代目與兵衞鮨の次男で、筆者の叔父にあたる吉田文久子（淺草の古本商淺倉屋主人）が、明治二十三四年頃に書きつづつた『握鮨考』に初代與兵衞が握り鮨を發明した動機を述べて、

> 當時の鮨は、魚の脂肪をしぼりて握りたる飯につけ、箱の中に列らべ、徒にて一つ宛仕切り、其上を蓋にて掩ひ、石を置き、四五時間ほど經て蓋を取り、鮨ベラといふ竹箆にて一つづゝ剝がし取るなり。故に三日位置いても味變らず、客來れば、只今直ぐに出來ますなどといふ。翁（與兵衞）は、此製法の悠長なるを厭ひ、又壓鮨にては、折角美味をもてる魚も、脂肪を搾り、味を失ふ故に、かれこれ考案せし上にて初めて握り早漬を工夫せしなり。

と説明してある。與兵衞は元來鮨屋の職人ではなく、越前家の八百屋御用の伜で、淺草藏前の札差坂倉屋の手代となり、年季が明けて、茶道具商となつたり、菓子屋となつたりしたが、馴れない商賣のために悉く失敗に歸し、遂にその日の生活にも差支へるやうになつたので、性來の食道樂から思ひついて、我流で握鮨を案出し、兩國廣小路に屋臺店を引張り出し、その場で立喰ひをさせるやうに工夫したのである。

當時の兩國は今日の淺草公園の如く、小劇場あり、見世物小屋あり、並び茶屋ありで、一茶が「蝙蝠やさらば行かうぞ兩國へ」といつた位に殷賑をきはめ、ことに本所松井町には岡場所があつたから、夜通し往來の人足が絶えず、與兵衞の握鮨は忽ちのうちに評判となり、天保頃には小金もいくらか

山葵を鮨にはさんで握るのは、鮪のやうな生身の解毒に藥味として用ひるのであるから、ほんの僅ばかり用ひればよいので、小鯛、小はだ、小鰺、さよりなどの如き酢で殺した、所謂光り物は、酢そのものが既に殺菌劑であるから、山葵などは必要がないわけである。否それがために、上手に作つた酢加減をゼロにして終ふことになるのである。故に酢加減を大事にした江戸時代の老舗では、鮪の外には絶對に山葵は挾んで握らないことを本筋としたのである。

時代が變るとともに、それにつれて鮨を食べる客の嗜好も非常に違つて來た。明治前には、

坊主欺して還俗させてこはだの鮨でも賣らせたい

といつた俗謠が出來たくらゐに小はだの鮨が流行して、小はだを食べなければ、鮨通でないやうにあつかはれたが、近頃では小はだがちつとも歡迎されず、殊に婦人客などには、十人が九人まで嫌厭れるやうになつた。かういつた傾向は、本筋の酢加減を修行しない職人が多くなつたので、俗にヒカリ物といふ酢魚を美味しく食べさせることを知らない結果である。

これと反對に鮪を喰べる客が非常に殖えて來た。元來鮪といふものは、あまり上等な魚ではなく、昔は握りにもあまり用ひなかつたが、天保頃に、馬喰町の夷鮨といつた安鮨屋で握り出したのが原因で、今のやうな流行を見るやうになつたのである。

それ故明治の中頃までは、重詰や折詰などの進物には勿論上等の皿盛などにも、絶對に鮪は握れないものと定められてゐたが、近頃では重詰でも、折詰でも、上等の皿盛でも遠慮なく鮪が姿を見せ、これが這入つてゐぬとお客が承知せぬやうになつた。

鮪をほそく切つて芯に加へて巻いた鐵火巻などといつた海苔巻は、江戸時代には無かつたが、明治の末期に博奕場などで、博徒が注文して作らせたのが、最初で鐵火巻といふ名稱も、そんなところ付けられたものと思はれるが、これが今日婦人客などに受けてゐるのは不思議である。

昔の鮨通は、海苔巻を一切食べれば、その家の鮨のうまいまづいが分ると言つてゐたが、海苔巻は味が淡白であるから飯の味も、酢の加減も良く分るので、胡麻化しが利かぬからである。この海苔を焦がさず、ムラなく光澤よく焙ることを昔は職人が自慢としたものだつたが、今日では、かういつた職人も少くなつた。

江戸時代には諸大名へ進物などに、鮨がさかんに用ひられたので、重詰や桶詰に手際を見せた名人肌の職人が澤山あつたが、今日では斯やうな進物が跡を絶つたので、この種の修行をする職人が、少くなつたといふよりも、寧ろマルで失くなつたといふやうになつた。

今日行はれてゐる、東京の握鮨は、數に於て、はるかに明治時代を凌駕してゐるだらうが、本筋の江戸前の握り方を見せてくれる店は遺憾ながら一軒もないといつてよいと思ふ。極端に言へば、今の東京の鮨は、握鮨でなくつて握飯に過ぎないものである。

貯つたので、回向院近くに家屋を新築するやうになつたから

銅脈山人の『江戸名物狂詩選』に、

流行鮨屋町々在。　此頃新開兩國東。
路次奥名與兵衛。　客來爭坐二間中。

と詠はれるやうになつた。

その頃までは鮨だねには專ら酢で殺した魚貝類が用ひられたが、握るやうになつてから穴子だとか、鮑だとか、白魚だとかを甘く煮て用ふやうになつたのである。又芝海老を味淋で茹でて擂つたおぼろなども與兵衛が工夫したので、又このおぼろを利用して、今のやうな散らし五もくを製り初めたりなどした。

さうして段々に繁昌するにつれて、高價な材料を思ひ切つて使用し、きび〳〵とした鮨を賣つて喝采を博したお蔭で、天保の御趣意（水野越前守の改革令）には、贅澤品を賣つた咎で檢擧され、手錠の上町内預の所罰を蒙つたといふことが喜多村信節の隨筆『聞のまにまに』に載つてゐる。

◇

與兵衛が握りを賣出した頃は、今のやうに、なんでもかんでも、無暗やたらに、鮨に醬油をつけて喰べるやうなことはしなかつた。廣重と豐國が合作で評判を博つた『高名會席盡』の中にある燕々亭の鮨の圖にも、醬油を入れた手鹽皿などは描き添えてはない。筆者が少年の頃は、「與兵衛」なぞでも、特にお客から注文されなければ、醬油は添へて出さなかつた。それでお客が醬油を吳れろといふ、オヤ〳〵田舍者だネへなぞと漬場で蔭口を叩いたものであつた。

一體本筋の握りを賣る店では、穴子とか鮑とかいつた煮物類は勿論、海老でも、小鯛でも、小はだでも、鰺でも、それ〳〵相應に苦心して味をつけてあるから、醬油の力を借りずとも立派に美味く食べられるので、鮪のやうな生身のまゝで握るものでも、俗にヅケともいはれるやうに、握る前に、一度味淋を少量交ぜて煮つめた醬油で洗つて、生ぐさ味を消してから握つて出すので、食べる時に、改めて醬油をつけなくつても、うまく食べられるのである。

しかし近頃では、かういつた江戸前の本筋の修行をしてこない職人が多いので、味淋醬油を潜らせずに鮪を握るから、醬油でもつけて食べなければ、まづくつて咽喉へは通らないやうになつたのみならず、小はだでも、鰺でも、本筋の酢加減を知らない職人が多いために、山葵を入れたり、醬油をつけて食べたりしなければ、食べられないやうな邪道が定式となつた。

山葵を鮨にはさんで握るのは、鮪のやうな生身の解毒に薬味として用ひるのであるから、ほんの僅ばかり用ひればよいので、小鯛、小はだ、小鰺、さよりなどの如き酢で殺した、所謂光り物は、酢そのものが既に殺菌劑であるから、山葵などは必要がないわけである。否それがために、上手に作った酢加減をゼロにして終ふことになるのである。故に酢加減を大事にした江戸時代の老舗では、鮪の外には絶對に山葵は挾んで握らないことを本筋としたのである。

時代が變るとともに、それにつれて鮨を食べる客の嗜好も非常に違つて來た。明治前には、

坊主欺して還俗させてこはだの鮨でも賣らせたい

といつた俗謡が出來たくらゐに小はだの鮨が流行して、小はだを食べなければ、鮨通でないやうにあつかはれたが、近頃では小はだがちつとも歡迎されず、殊に婦人客などには、十人が九人まで嫌厭れるやうになつた。かういつた傾向は、本筋の酢加減を修行しない職人が多くなつたので、俗にヒカリ物といふ酢魚を美味しく食べさせることを知らない結果である。

これと反對に鮪を喰べる客が非常に殖えて來た。元來鮪といふものは、あまり上等な魚ではなく、昔は握りにもあまり用ひなかつたが、天保頃に、馬喰町の夷鮨といつた安鮨屋で握り出したのが原因で、今のやうな流行を見るやうになつたのである。

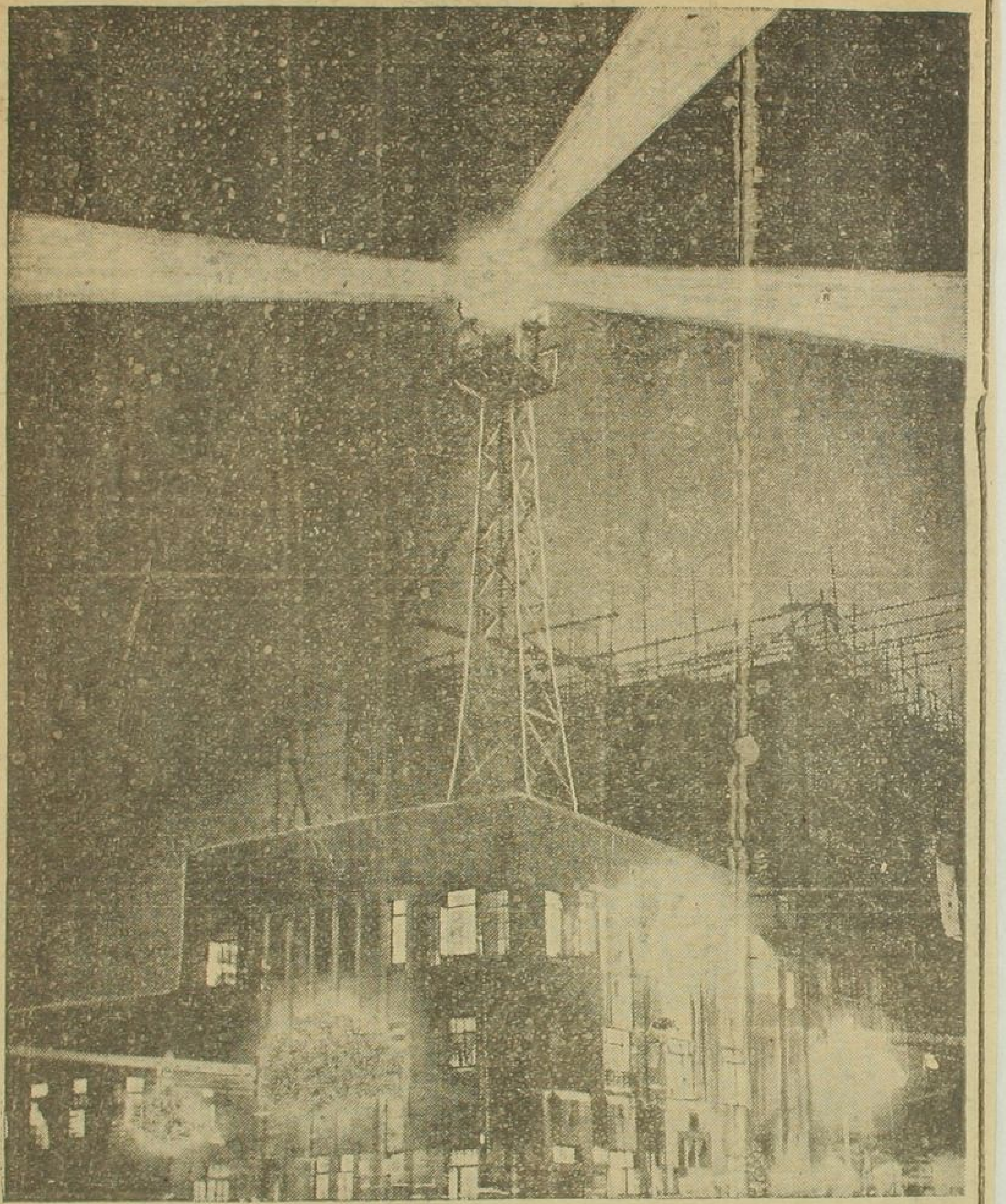
それ故明治の中頃までは、重詰や折詰などの進物には勿論上等の皿盛などにも、絶對に鮪は握れないものと定められてゐたが、近頃では重詰でも、折詰でも、上等の皿盛でも遠慮なく鮪が姿を見せ、これが這入つてゐぬとお客が承知せぬやうになつた。

鮪をほそく切つて芯に加へて卷いた鐵火卷などといつた海苔卷は、江戸時代には無かつたが、明治の末期に博奕場などで、博徒が注文して作らせたのが、最初で鐵火卷といふ名稱も、そんなところ付けられたものと思はれるが、これが今日婦人客などに受けてゐるのは不思議である。

昔の鮨通は、海苔卷を一切食べれば、その家の鮨のうまいまづいが分ると言つてゐたが、海苔卷は味が淡白であるから飯の味も、酢の加減も良く分るので、胡麻化しが利かぬからである。この海苔を焦がさず、ムラなく光澤よく焙ることを昔は職人が自慢としたものだつたが、今日では、かういつた職人も少くなつた。

江戸時代には諸大名へ進物などに、鮨がさかんに用ひられたので、重詰や桶詰に手際を見せた名人肌の職人が澤山あつたが、今日では斯やうな進物が跡を絶つたので、この種の修行をする職人が、少くなつたといふよりも、寧ろマルで失くなつたといふやうになつた。

今日行はれてゐる、東京の握鮨は、數に於て、はるかに明治時代を凌駕してゐるだらうが、本筋の江戸前の握り方を見せてくれる店は遺憾ながら一軒もないといつてよいと思ふ。極端に言へば、今の東京の鮨は、握鮨でなくつて握飯に過ぎないものである。



巨光燦然！

本社航空燈臺試驗點燈

越佐の空に遂に巨光は放たれた！完成を見た本社航空燈臺の歴史的試驗點燈は豫定の如く二十三日川開の終夜、絢爛の煙火しきりに空を彩る午後七時三十分、坂口本社理事の手によつてスヰッチが入れられるや赤・青・白の三連光は月明を暗せんばかりに輝き始めた、おゝその美觀よ！紺碧の空にくつきりと起る三色の光芒！川開きに集まつた大群衆の眼は一瞬この巨光に注がれたのであつた、村松、新發田、巻、加茂、新津地方から〝見えた〳〵〟の快報が本社へ電話でもたらされ、かくて大成功裡に試驗點燈は九時半終了した（寫眞は昨夜寫す）

和宮様の人夫物

ソレからこれも、少女心に焦げ付いてゐる拜見物といふのは、和宮様御降嫁の時で、〇〇〇〇ですか、川越在に近親がありまして、大宮に一同拜観に出ましたが、この御行列に、村々から、次々人夫五十人づゝ出たといふことでしたが、其人夫の御用は、諸種の御道具類がありましたが、御道具類の外に、大變なものだと思つたのは、御家屋を一軒擔いで參つたんですよ。和宮様の途中御用を辨じる爲め、京風の家屋を人夫が擔いで通つたので驚きました。貴人方は大變なもんだと吃驚しました。

何でも六疊二間に、御化粧室に御風呂に、御不淨場が附いてゐる、御家屋を一軒擔いで參つたんですね。これには全く驚いて、これぢやア人夫の五十人も御入用の譯だとみんなで申しました。

篠田鑛造の女百話の内に
維新前ヨリ伝ハル内容
あり直話せる上の如き話
がある。和宮御降嫁行列
に斯る物ありしとは驚くこと
もあろうしが信じ難くも
あるが恐らくこゝに収め
おく

新潟新聞社の屋上に航空燈臺を据付けることは前月から
知れて居り自分も祝意を寄せ居たが、今川開の時を期し
試験點燈をし其の光景は左の圖の如くである

榛原製

日本文學全史

月報

昭和十二年七月號

第七號

東京市麴町區九段下

株式會社 東京堂

電話九段(33)四一一一番

振替東京二七〇番

よろこびの回顧二つ

五十嵐力

『平安朝文學史』上卷の校正から、やつと解放されて、さてくつろいで心に浮かぶ事は、先づ第一に慚愧悔恨の數々であるが、不快の思出は今更繰返したくもなし、せめては嬉しい回想でもと、乞はるゝまゝに、その二三を書きつけて見る。

第一は弘法大師の『聾瞽指歸』に現はれた本邦最初の小說らしい『睡覺記』の名の發見である。たしか一昨年の寒い頃であつたと思ふ。高島屋か三越かで、弘法大師紀念の展覽會の開かれたことがあつた。その折に大師直筆の『聾瞽指歸』が展列されたが、これが後に『三教指歸』と改題されたといふことが書き添へてあつた。讀んで行くと、序の初めの部分に、

復有㆓唐國張文成㆒、著㆓散勞書㆒。詞貫㆓瓊玉㆒、筆翔㆓鸞鳳㆒。但恨濫縱㆓淫事㆒、曾無㆓雅詞㆒。面㆑卷舒㆑紙、柳下興㆑歎、臨㆑文味㆑句、桑門營動。本朝日雄人、述㆓睡覺記㆒。勝辯巧發、詭言雲敷。遙聞㆓彼名㆒、尸居之士、拍㆑掌大笑、倩對㆓其字㆒、喋啞之人、張㆑口擧㆑聲。並雖㆓先人之遺美㆒、未㆑足㆓後誡之準的㆒。

といふ一節がある。その後『弘法大師全集』に就いて調べて見ると、全集には『聾瞽』も『三教』も隣接させて、各々の全部を揭げてあるが、此の一節は『聾瞽』にだけあつて『三教』の方には影もなく、而して『聾瞽』の方の序が文學青年らしい洒落れた事を云つてゐるのに對して、『三教』の方の序がすつかり道學者らしく取りすまして裃を着けてゐるのに氣がついた。私は三十餘年前

民族の國語に對する愛と誇りとは、神代から續いて來た遠い傳統の觀念であつたのであらう。また重要な關心事に際して高唱した奈良朝の歌人等に取つて、共通の信念であつたのであらう。けれども萬葉の暗示する所によると、彼等の國語愛は處世的、習慣的、獨善的のもので、語學的、自覺的、對他的のものではなかつたらしい。旅する人に對して道中の安全を祈り、愛人の心を自分に傾かせるために、言葉の靈力を借らうとするやうな場合にのみ、此の語の用ゐられてゐることが、これを證據立てゝゐるやうに思はれる。

之れに對して此の興福寺の賀詞は、國民が語學的に、自覺的に、對他的に、而して藝術的に目ざめた國語愛の現はれである。外國語に對する一種の挑戰であり、尊貴重要の事柄を自家の領分に收めようとする一種の宣言である。興福寺の大法師等は一體どういふ心持でかういふ挑戰的宣言めいた歌詞を作つたのであらうか、しかも奉賀の詞として乙夜の御覽にまで進めたのであらうか。思ふにこれは嵯峨天皇、淳和天皇の弘仁、天長以來仁明朝に至る漢文の跳梁跋扈が、彼等の反撥觀念を喚び起こして、この不穩ともいふべき痛快なる漢文排斥、國語愛護の宣言をなさしめたのであらう。「唐の詞を借らず、書き記す博士やとはず」などは、隨分思ひ切つた爆彈的宣言である。また「歌語に詠み反して神事に用ゐ來たり、皇事に用ゐ來たれり」などは、神聖重要事を獨占した、思ひ切つた見識の宣言である。

私は大正十二年に『國歌の胎生及び發達』を著した時に、長歌に於ける七五調の萌芽を此の長歌に見出して、反覆諷誦したが、此の點には少しも氣づくことが出來なかつた。今度の讀み直しにふと心づいて、そゞろに昔を恥ぢ今を悅んだ次第である。

五十嵐力著述目錄抄

文章講話	明治三十八年
新文章講話	明治四十二年
新國文學史	明治四十五年
半農生活	大正三年
平家物語の新研究	大正十二年
國歌の胎生及び發達	大正十三年
國語の愛護	昭和三年
五十嵐力集	昭和三年
純正國語讀本	昭和四年
我が三大國民道	昭和四年
軍記物語研究	昭和六年
六十一莖集	昭和十年
我執轉々記	昭和十一年

以上

「日本文學全史」既刊書目

第一回配本	江戸文學史 上卷	高野辰之
第二回配本	明治文學史 上卷	本間久雄
第三回配本	上代文學史 上卷	佐佐木信綱
第四回配本	江戸文學史 中卷	高野辰之
第五回配本	上代文學史 下卷	佐佐木信綱
第六回配本	室町文學史	吉澤義則
第七回配本	平安朝文學史 上卷	五十嵐力

に村上專精博士の日本佛教史の講義を聞いたことがある。そしてその講義によつて、『三教指歸』をば唯だ儒老佛三教の比較研究とのみ思つてゐたのが、今度實作を讀んで見ると、論旨としては、改めて言ふに足るほどのものではなく、その興味は專ら小說風に物語化したるところにあり、委しくいふと、道德宗教に關する抽象的理說を代表人物の言行に具體化した味はひに存することを見出だした。而して彼れ是れと逓闘させ比較考慮して見た結果、これを前にしては、張文成が『遊仙窟』に比較され、後にしては大師の『聾瞽指歸』の仲間と見られてゐるのを見ると、日雄人の『睡覺記』は、必ず一種の小說であつたであらう。而して大師が之れを評して「遙聞二彼名一、戸居之士、拍レ掌大笑、傑對二其字一、噤啞之人、張レ口擧レ聲」と云つて居るところを見ると、これは必ず滑稽本位の小說で、『竹取物語』に於ける五人の大官達の妻爭に關する連續滑稽は、恐らく此の『睡覺記』の遺風を繼いだものであらうと考へた。同時に大師の『聾瞽指歸』をも我が小說史の源頭を飾るべき一種の宗教小說であると考へるやうになつた。「發見」などいふのは烏許がましいが、高島屋の弘法大師紀念展覽會に於ける大師眞筆の『聾瞽指歸』が機緣となつて、我が小說史の開闢初發に關する未知の現象を考へることの出來たのは近頃の感謝であつた。

もう一つは偶然、『續日本後紀』に於いて國語愛の思想の現はれた最初の文獻を見出だしたことであつた。

仁明天皇御即位十七年の嘉祥二年に、天皇寶算四十年にならせられた。その御賀の爲めに、奈良の興福寺の大法師等が非常に長い萬葉風の長歌を奉獻した。此の長歌は記紀の長歌の最長五十一句、萬葉の長歌の最長百四十九句に對する三百十句といふ空前絕後のものであるが、その終りに近い部分に左の四十餘句がある。

大御代を　萬代祈り　佛にも神にも　申し上ぐる　事の詞は
この國の、本つ詞に　逐ひ倚りて、唐の詞を假らず　書き記す　博士やとはず。この國の　言ひ傳ふらく、日の本の　やまとの國は、言靈の　さきはふ國とぞ、古語に　流れ來たれる、神語に　傳へ來たれる。傳へ來し　事のまに〳〵、本の世の　事たづぬれば、歌語に、詠み反して、神事に　用ゐ來たれり、皇事に　用ゐ來たれり。

この要點を現代語譯すると、ざつとかういふ事になるであらう。

吾等が此の長歌は、逐一我が日本固有の詞によつたので、毛頭漢土の詞を借らず、また之れを書き現はすに當たつては、一切漢文の博士の厄介にならないのである。わが國の言傳に「我が日の本は、言葉に靈力があつて、その靈力が常に強く活動して國民を幸福にする國である」と言つてあり、これが大昔から、神聖なる尊い詞として傳へられてゐるのである。また皇國本來の仕來を尋ねると、凡て神樣に關し、大君に關する事は、日本語に言ひ現はすべきもの、のみならず日本語の中の風雅な、調子の高い歌詞に言ひ直して表現すべきものとなつてゐたものである。

之れを見て、誰れか國語愛護の思想が熱烈に言ひ現はされてゐるのを見逃すことが出來よう。無論國語禮讃の思想は大昔からあつた。萬葉集に「空見つ、倭の國は、言靈の、さきはふ國」「敷島の、倭の國は、言靈の、助くる國ぞ」など云つて、そして「神代より言ひ傳てけらく」と添言をしてゐるところを見ると、大和

民族の國語に對する愛と誇りとは、神代から續いて來た遠い傳統の觀念であつたのであらう。また重要な關心事に際して高唱した奈良朝の歌人等に取つて、共通の信念であつたのであらう。けれども萬葉の暗示する所によると、彼等の國語愛は處世的、習慣的、獨善的のもので、語學的、自覺的、對他的のものではなかつたらしい。旅する人に對して道中の安全を祈り、愛人の心を自分に傾かせるために、言葉の靈力を借らうとするやうな場合にのみ、此の語の用ゐられてゐることが、これを證據立てゝゐるやうに思はれる。

之れに對して此の興福寺の賀詞は、國民が語學的に、自覺的に、對他的に、而して藝術的に目ざめた國語愛の現はれである。外國語に對する一種の挑戰であり、尊貴重要の事柄を自家の領分に收めようとする一種の宣言である。興福寺の大法師等は一體どういふ心持でかういふ挑戰的宣言めいた歌詞を作つたのであらうか、しかも奉賀の詞として乙夜の御覧にまで進めたのであらうか。思ふにこれは嵯峨天皇、淳和天皇の弘仁、天長以來仁明朝に至る漢文の跳梁跋扈が、彼等の反撥觀念を喚び起こして、この不穩ともいふべき痛快なる漢文排斥、國語愛護の宣言をなさしめたのであらう。「唐の詞を借らず、書き記す博士やとはず」などは、隨分思ひ切つた爆彈的宣言である。また「歌語に詠み反して神事に用ゐ來たり、皇事に用ゐ來たれり」などは、神聖重要事を獨占した、思ひ切つた見識の宣言である。

私は大正十二年に『國歌の胎生及び發達』を著した時に、長歌に於ける七五調の萠芽を此の長歌に見出して、反覆諷誦したが、此の點には少しも氣づくことが出來なかつた。今度の讀み直しにふと心づいて、そゞろに昔を恥ぢ今を悦んだ次第である。

五十嵐力著述目録抄

文章講話	明治三十八年
新文章講話	明治四十二年
新國文學史	明治四十五年
牛農生活	大正三年
平家物語の新研究	大正十二年
國歌の胎生及び發達	大正十三年
國語の愛護	昭和三年
五十嵐力集	昭和三年
純正國語讀本	昭和四年
我が三大國民道	昭和四年
軍記物語研究	昭和六年
六十一莖集	昭和十年
我執轉々記	昭和十一年

以上

「日本文學全史」既刊書目

第一回配本	江戸文學史 上卷	高野辰之
第二回配本	明治文學史 上卷	本間久雄
第三回配本	上代文學史 上卷	佐佐木信綱
第四回配本	江戸文學史 中卷	高野辰之
第五回配本	上代文學史 下卷	佐佐木信綱
第六回配本	室町文學史	吉澤義則
第七回配本	平安朝文學史 上卷	五十嵐力

★

政界時の人々

☆

遞信大臣

永井柳太郎君

君も國務大臣として今度で二度の御奉公である。林内閣の折にその出盧を慫慂されて斷つた君も、此度は何のこだわりなく組閣に加はり、近衞内閣は君を得たことによつて、一段の新鮮味を加へたかに見えた。今や單に雄辯家永井ではなくなつた。思へば大きくなつたものである。

しかも現在の君は行き詰まるところを知らない。時流に敏感であり、鋭き洞察力の持主である君の將來は坦々としてまことに矚きことを想はせる。加ふるに君の絶えざる學究と努力、眞面目なそして人を親しめさせる人格と、驚くべき忍耐力とは、現在の君を築きあげたものと言へよう。スロー・アンド・ステッディな歩み方は些かも危氣がない。

君は早稻田時代には弱者に對する同情が非常に强く、世界人類の共存共榮を考へてトルストイ等に私淑した人道主義的な平和論者であつたが、歐羅巴留學中激烈な民族的闘爭を眼のあたり見て、殖民政策の研究を志し、祖國を如何にして强大にすべきか、有色人種を如何にして救ふべきかを學んで、大いに今日の政治的識見を涵養したといふ。

昨年母校の高杉教授が歐米視察旅行に出發の際、多忙の寸暇を割いて東京驛に駈けつけ教授を見送つて舊師を喜ばせたとのことであるが、からした君の人一倍恩義に厚いことなどもその人となりを偲ばせて實に床しいものを感じさせる。(三八大政卒)

貴族院議長

伯爵

松平頼壽君

君は舊讃岐高松十二萬石の領主、今なほ高松には漫々たる堀に廻らされて天守閣が堂々と聳えてゐる。君の祖先によつて築造された栗林公園は風致まことに複雜多樣、他の追隨を許さぬ天下の名園として高松の名を高からしめてゐる。この一城の主も流石早稻田畑で育つただけあつて華胄界の苦勞人である。快活ものにこだわらない上に俠氣な肌合を多分に持つ君は、例の十五銀行事件の時などのやうに私財をあつさり投げ出すなどの胸のスクやうな快男兒振りを發揮する。貴族院での君の人氣と信望は相當なものだ。それは兎角家柄がものを言ふ貴族院にあつて、滿場一致君が議長に推されたことによつても判る。

清浦内閣時代護憲運動が全國に起つた時、研究會が第一にねらはれたことがある。三派の人たちが物凄い形相で研究會の事務所にやつて來て暴れ出さうとした時、他の人人が色を失つて逃げだしたのに、君だけは流石に落ち着いて最後まで殘り彼等と應對したなど如何にも膽の据つた君らしく、古藩主の面影が髣髴として來る。

貴族院改革といふ難しい問題が、未解決のまゝに殘されてゐる貴族院に、近衞公の後を襲つた君の力量と手腕とは、見事に舵を引きをゝせる名舵手として信頼されて良い。(三五邦法卒)

衆議院議長

小山松壽君

名古屋新聞、其の他で長い間新聞事業に携つて業界に重きを爲して來た君の名は政界に

北越草莽維新史 83

田中惣五郎作

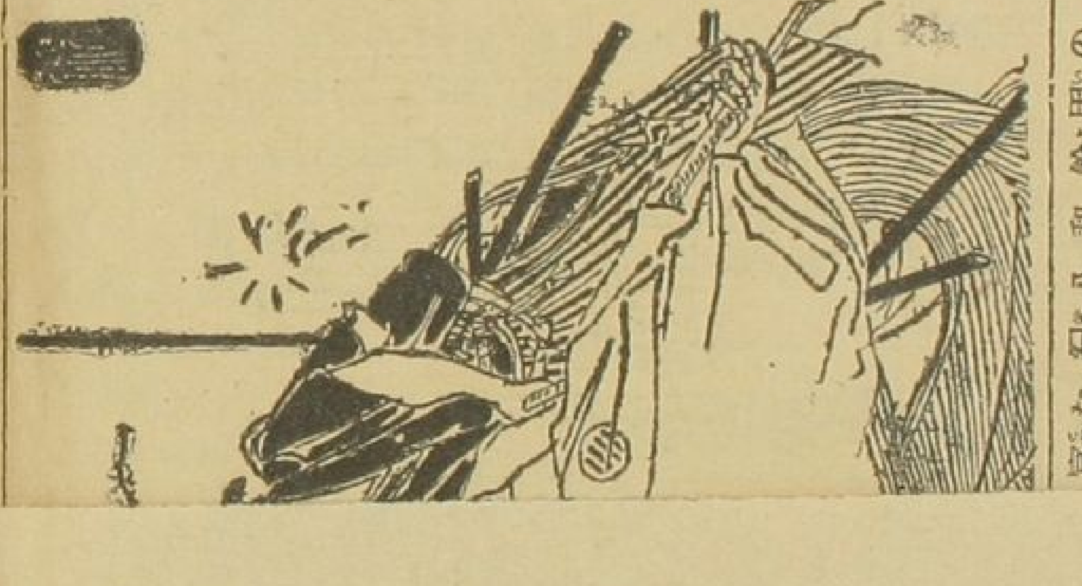
倉藤秀彌畫

維新前夜【83】

八一八の事變(七)

京都の謀議全盛、攘夷親征行幸の氣運を反映し、大和行幸の先驅を承つて、攘夷のさきがけをしようとしたものに、天誅組と生野の舉がある。

一見してそれは、維新黎明のお先走りの運動にも見える。が、それは結果から言つた論であり、八一八事變を抜きにして考へれば、



で、に罷々は本間精一郎の同志として舞に上ぜて居る。そして、天誅組の謀首藤本鐵石も、越後とはゆかり深い志士なのだ。

鐵石藤本津之助は、備前の人、尊攘に挺して、畫をよくした。文久年間の前半は、彼と清川八郎、本間精一郎らが、草莽の志士として天下に鳴つたものである。越後にあそび五泉の和泉律一の邸にとどまること數旬、肝膽を吐露したために律一は、天誅組の舉を知る

大和五條の代官鈴木源内を血祭りにあげて、櫻井寺を本陣と定め、同志と金穀をつのつた。この舉を後れはせに知つた三條、東久世らの謀議公卿は、平野次郎に後を追はせて中止せしめようとしたが、使者の平野がかへつて言ひ負されて彼らの參謀格を承へて京都に復命する役を頼はされ、おまけに、脱走つた安積五郎まで、踏みとゞまつて天誅組に合流してしまふ始末である。

留め役の平野が、つゞいて生野の舉の指導者となつたのも奇しき因縁であらう。そして、九百六十餘人の同志が集まつて雄叫び堂々大和の山野を壓した天誅組も、八一八事變の結果は、津、郡山、彦根、紀州の追討軍に包圍されてしまつた。さうなると脆いものである。官軍でないといふことが、土地の

過失？自殺？

矢代田附近に轢死体

十二日午前四時頃、信越線羽生田矢代田間に無殘の轢死体を通行人が發見し届出により調査すると右は南蒲原郡田上村大字中郷相田喜治(三)と判明したが本人は四時近く迄湯田上温泉附近新五郎方で飲み明して出たものであるが泥醉の爲めかそれとも自殺か判明しない

村大字藤井谷木商野沢某(三)と去ふ孫まである男と懇ろになり去る六日の丑の日に兩人手に手を取り鄕部村大字藤長生館へ夫婦氣取りで一泊して出發した儘歸宅しないので後に殘された娘は困り果て近ぐ\/\吉田警察部湯澤出所へ搜索方を願ひ出た

瀬川中學對新田中學

(同日正午より)

山形中學對長野商業

(同日午後二時半より)

△第四日

福岡工業對北海中學

(十六日午前八時より)

青島中學對盛岡中學

(同日正午より)

天氣豫報(十二日)

高田測候所

今晩　は風弱かで良い天氣沿海部は時に曇り雨があるさうです

明日　南のち北の風で良い天氣

北越草莽維新史 (83)

田中惣五郎 作
倉藤秀彌 畫

維新前夜の卷【83】

八一八事變（七）

京都の激派全盛、攘夷派横行の氣運を反映し、大和行幸の先驅を承つて、攘夷のさきがけをしようとしたものに、天誅組と生野の義擧がある。

一見してそれは、輕挙盲激なお先走りの運動にも見える。が、それは結果から言つた論であり、八一八事變を抜きにして考へれば、當然起つてよい先驅的行動なのだ。惜むべし、二階へあがつた瞬間に八一八事變によつて梯子がはづされてしまつた。

その必然性は、この擧の首腦部を見れば瞭然であらう。天誅組にかつがれた中山忠光は、若氣の過ちと思はれる行動が多いが、かついだ藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎の三總裁は、立派な志士である。生野の平野次郎は思慮深い首領だ。そして、松本と吉村は、すでに吾々は本間精一郎の同志として雛に上せて居る。そして、天誅組の謀首藤本鐵石も、越後とはゆかり深い志士なのだ。

鐵石藤本津之助は、備前の人、草莽にして儒、繪をよくした。文久年間の前半は、彼と清川八郎、本間精一郎らが、草莽の志士として天下に鳴つたものである。越後にあそび五泉の和泉佳一の邸にとどまること數旬、肝膽を吐露したために佳一は、天誅組の擧を知るや、直に上京し、戰敗るゝと聞きこれを機緣に變裝して道場巡拜に事よせて遺族の生活費、同志の運動資金の募集に奔走した。

更に、藤本の同志三條の畫家村山半牧は、當時播州にあつたが、變を聞いて京に歸り、門生筒井香山をして、鐵石の妻子をその郷里備前に護送し、難を避けしめた。

これらの人々の事蹟はいづれ後の志士屈起の卷にこれを詳にする。

とまれ、事變を知らぬ天誅組は大和五條の代官鈴木源内を血祭りにあげて、櫻井寺を本陣と定め、同志と金穀をつのつた。この擧を後ればせに知つた三條、東久世らの激派公卿は、平野次郎に後を追はせて中止せしめようとしたが、使者の平野がかへて言ひ負されて彼らの奏聞書を携へて京都に復命する役を負はされ、おまけに、伴つた安積五郎まで、踏みとゞまつて天誅組に合流してしまふ始末である。

留め役の平野が、つゞいて生野の擧の指導者となつたのも奇しき因緣であらう。そして、九百六十餘人の同志が集まつて旗鼓堂々大和の山野を睥睨した天誅組も、八一八事變の結果は、津、郡山、彦根紀州の追討軍に包圍されてしまつた。さうなると脆いものである。官軍でないといふことが、土地の人々の意氣を沮喪せしめて、不平の聲が陣中に滿ちる

九月十五日中山忠光は一同を會して、十津川の郷民背く、この地も保ち得ない。我ら始めより死を決して來るもの、さはれ、中途より加はつた人々まで殉ぜしめるに忍びぬ。進退去留は一に諸子に任さう。萬一再會の期もあらば、共に國事につくさう。陣中酒を用ひぬことにしてあるから、水を酌んで別れを告げようと、天誅組の解散を宣する。

あとは、ちり〴〵である。藤本鐵石、松本奎堂、那須信吾らは戰死した。安積五郎は生擒にされ、後斬られた。忠光は上田宗兒等六人と飢渇を忍んで潛行すること數日、二十七日大阪に潛し、道頓堀近江屋治一郎方で旅裝を整へ、長州邸に入り海路三田尻に脫出したが、後長州の俗論黨の爲に斬られた。

重傷の吉村寅太郎は、後れて鷲家村の茶屋に休んで居るところを津藩の兵に圍まれた。

吉野山風にみだるゝもみぢばは
我が打つ太刀の血煙と見よ

これが辭世である。

政界時の人々

逓信大臣 永井柳太郎君

北越草莽維新史 (83)

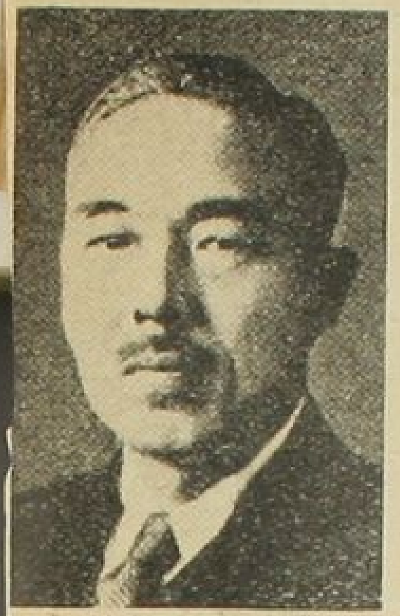
田中惣五郎 作
倉藤秀彌 畫

維新前夜 八・一八事變【83】

永井柳太郎君

伯爵松平賴壽君

小山松壽君



風見章君

於ても相當舊いものである。嘗ては、議會の精悍な闘士として其の名をうたはれながら彌次連の一人と目されて來たが、現在はすつかりと落ちついてしまつて其の當時の片鱗すらうかがふことが出來ないが、併しその果敢なる闘爭心と實行力とはいさゝかも衰へを見せず、又その機を見るに敏にして當りの强いことも昔と餘り變つてゐない。かつて君が衆議院副議長當時あの堂々たる態度で副議長席につくと、反對黨の心膽を寒からしめたといふから相當に强氣であつたことがうかがはれる。

君には讀書以外にこれと云つて趣味はない一にも二にも唯政治、政治が君の生命であると云つてもいい。憲政會内閣當時には時の農林大臣町田氏の下で農林政務次官としての腕前を見せ、副議長の經驗も持つ君に、名議長たるべく期待するのは、あながち無理な注文ではあるまい。(二八邦法卒)

内閣書記官長

風見章君

ジャーナリストとして天下に令名を馳せた風見君は情熱に燃えたつ明朗濶達な人物である。茨城縣水海道の產である君は今まで議會に於ける言論の雄として恐ろしく齒切れのいい茨城辯で政府に痛烈な批判攻撃を機關銃的に浴せかけてきたが、聞いてゐて些かも憎げがない。話が巧みで相手に好感を與へるところ全く人德の士だ。

君は大朝を振り出しに國際通信の主筆となり更に信濃每日の主筆となつた。農村問題に特異の關心を持つ君は、爾來農村改革の諸問題に關し口に筆に輿論の喚起に力め農村青年等の間に絶大なる支持を受けてきた。

昭和三年に鄕里茨城縣から代議士に立候補した時は落選の憂目を見たが昭和五年以來四回當選、昭和七年の選擧の際は大物故原脩次郎氏と爭つて見事當選。更に今春は國同を脱黨して無所屬であるにもかゝはらず最高點で當選、もはや君の地盤は貧乏ゆるぎもしない。

かつて水戶の演說會で「眞の愛國者は水戶光圀の如き人物ではなく田畑に立つて默々として働く農民群である」と絶叫でした君は今や野人翰長としてをさまつてゐる。近衛内閣も君を得て評判が良かつた。が君自身としても今日あるをも豫想しなかつたらうし、吾々にも意想外なことであつた。冀くば好漢自重あれ。(四二大政卒)

大藏政務參與官

中村三之亟君

片岡直温氏の信任を得て、片岡氏の商工大

北越草莽維新史 83

田中惣五郎 作
倉藤秀彌 畫

大和五條の代官鈴木源内を血祭りにあげて、櫻井寺を本陣と定め、同志と金穀をつのつた。この擧を後れはせに知つた三條、東久世らの親政公卿は、平野次郎に後を追はせて中止せしめようとしたが、使者の平野がかへつて言ひ負されて、彼らの密謀を擁へて京都に報命する役を負はされ、おまけに、同行つた安積五郎まで、踏みとどまつて天誅組に合流してしまふ始末である。

留め役の平野が、つらいて生野の擧の指導者となつたのも奇しき因縁であらう。そして、九百六十餘人の同志が集まつて雄図堂々大和の山野を壓した天誅組も、八一八事變の結果は、津、郡山、彦根、紀州の追討軍に包圍されてしまつた。さうなると脆いものである。官軍でないといふことが、土地の

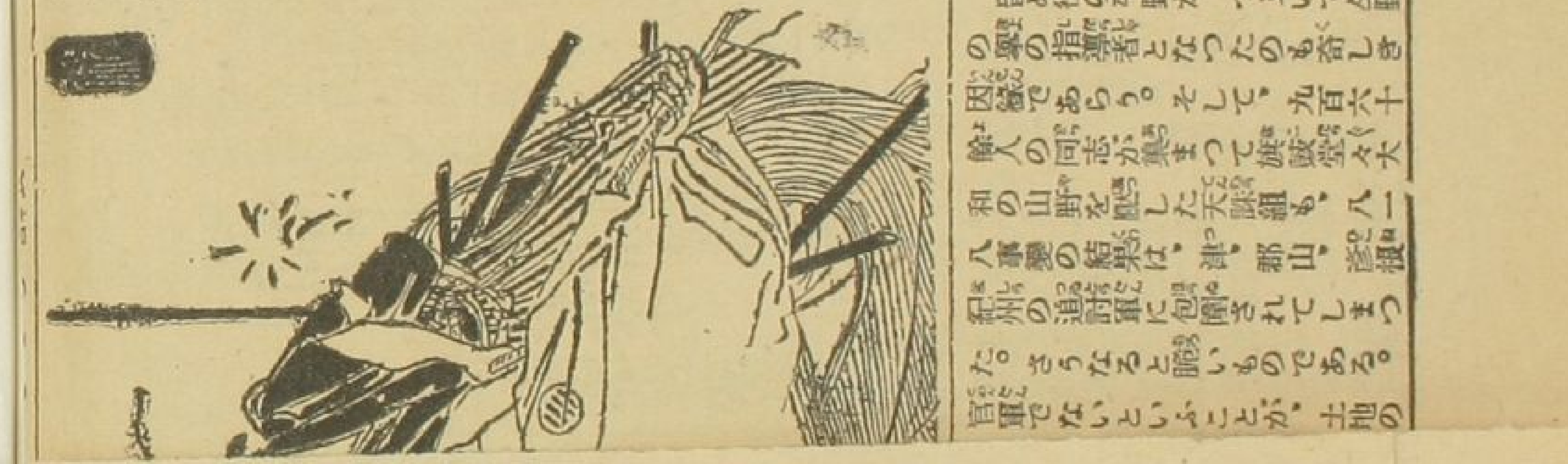
で、諸々は本間精一郎の同志として鎌に上せて居る。そして、天誅組の謀首藤本鐵石も、越後とはゆかり深い志士なのだ。

藤本鐵石こと津之助は、備前の人、若年にして鬪、浪人とした。文久年間の前半は、彼と清川八郎、本間精一郎らが、尊攘の志士として天下に鳴つたものである。越後にあそび五泉の和泉伴一の家にとどまること數旬、胆略を吐露したために伴一は、天誅組の擧を知る

維新前夜の巻〔83〕
八一八事變（七）

京都の政界全部、攘夷親征の氣運を反映し、大和行幸の先驅を承つて、攘夷のさきがけをしようとしたものに、天誅組と生野の擧がある。

一見してそれは、輕擧盲動なお先走りの運動にも見える。が、それは結果から言つた論であり、八一八事變を抜きにして考へれば、



過失？自殺？
矢代田附近に轢死体

十二日午前四時頃信越線羽生田矢代田間に無殘の轢死体を通行人が發見し届出により調査すると右は中蒲原郡田上村大字中條相田喜計（三〇）と判明したが本人は四時近く羽生田上郷梨郎本新五郎方で飲み明して出たものであるが泥酔の爲めかそれとも自殺か判明しない

村大字川井澤本商藤評某（二〇）と云ふ彼女まである男と懇ろになり去る六日の丑の日に兩人手に手を取り新潟村大字藥長生館へ共に陶氣取りで一泊して出發した儘歸宅しないので後に殘された娘は困り果て泣く〳〵吉田警部補派出所へ搜索方を願ひ出た

瀬川中學對新田中學（同日正午より）
山形中學對長岡商業（同日午後二時半より）
△第四日
長岡工業對北海中學（十六日午前八時より）
青森中學對新潟中學（同日正午より）

天氣豫報（十二日）
高田測候所

今晩 は風穏かで良い天氣沿海部は弱い雨か雪がありさうです
明日 南から北の風で良い天氣

中村三之丞君

比佐昌平君

藤田若水君

助川啓四郎君

臣及び大藏大臣時代に秘書官として腕の冴えを見せて活躍した君は、頭腦緻密にして明晰徹底した洞察眼は事象の奥底までも極めつくし、一度判斷が定まればその實行に際しては驚く程迅速である。人一倍の勉强家である君は理論闘爭に於ては實に華々しく果敢な闘士である。訪問者は初對面の時からそのピリピリした電撃のやうな氣魄にうたれてしまふ。いざとなれば相當度胸のいいところも見せるし、仲々腹の据つた人物である。自己の所信を以て事に當る場合には滅多なことでは後には引かない。

强力國家の下に於ける公債經濟の確立を現下の急務であるとなし、又、軍事費の尨大化は尨大なる軍事製産力を要求する。我が國資源を海外よりの輸入に俟つと同時に、戰時的計畫經濟を樹立、平和經濟の要求する生産を調整し、全産業を軍事的に動員せしむべき時代に進みつゝあると力説する君の大藏參與官就任は時局柄まさに最適任者と言はずして何であらう。(7大政卒)

陸軍政務參與官

比佐昌平君

學生時代には雄辯會を牛耳り、山森利一君等と共に鳴らした君は、勤勉實直、温厚篤實の人格者であり、また强固な意志の持主。人に對しては誠心誠意、會ふ者をして信頼と親しみを感ぜしめずにはをかない。君の獨身生活は餘りにも有名な話であるがそのよつて來るところは明かでない。若い頃には斗酒尚辭せずといつた酒豪であつたが、禁酒してからは一滴すら口にしない。福島縣第三區に强固な地盤を持ち信望を集めてゐる君は六回連續して當選。初めて代議士に當選した當時既に田淵豐吉君と共に憲政會の少壯代議士として大いに將來を嘱望されたものである。昭和四年濱口內閣當時には見出されて陸軍參與官となり敏腕を奮ひ其の才幹をうたはれたものである。

また農村問題の研究と郷黨青年子弟の薫育に身を委ねてゐる君は、世の記憶に尚新らしい昭和六年の悲慘を極めた東北地方の大凶作以來、その救濟運動の爲に寢食を忘れて奔走したが、その熱意に對して人人は感謝の眼をむけてゐる。再び此度陸軍より所望されて參與官に就任されたのはその卓拔せる人物見識が物を云つたからではあるまいか。(四一大政卒)

大藏政務參與官

藤田若水君

君が廣島法曹界に於ける元老であり同時に

政界に於ける有力者であることは、今更呶々する必要はあるまい。

君は當世政治家には珍らしい是々非々の人だ。之は職業意識から來たものでなく、生れついての性格だ。他の不正なる言行については毫も假借するところがない、が一度了解するにいたれば、前のことを忘れたるが如く光風霽月一點の塵を留めない。

君の趣味は法曹社會人には稀れな宗教研究である。それは宗教信者を或る意味に利用するといふのでなく、自己が信仰によつて慰安を得ようといふのである。が何んといつても趣味の第一に指を屈しなければならぬのは圍棋であらう。しかも棋局に對する君の態度に、最もよくその性格を窺知することが出來る。

一般人と異つて、君は上手に向つて全力を傾倒するのと同時に、下手に對しても同樣である。『君は棋枰に面して少しも掛引を言はない棋客の常として、勝算あつても、ア、負けたといひ、勝算なくても勝つたと聲明するものであるが、君は此點に於て全く正直すぎるほど眞實を云ふ。この眞實を言ふことは遊戲の上のことにあるが、君の性格はその總てが「眞實を云ふ」ことに表れてゐると思ふ』とは君と二十年來の棋相手である中川朝三郎君の言である。蓋し君の司法參與官は役柄といひ、人柄といひまことにうつてつけのものと言へやう。(三一邦行卒)

農林政務參與官

助川啓四郎君

沈默寡言東北人特有の一見無表情とも見える冷徹さの底に灼きつくやうな熱情を祕めたる君は、政友會切つての農村問題研究家であると共に、また疲憊せる農村の青年子弟の優れた指導者である。その發表された數多の火を吐く如き烈々たる論說の中には隨分と思ひ切つた改革意見を述べてゐるが、發表毎に非常な反響を捲き起してゐる。最近の社會に於て一番問題となるのは軍備を擴充すると共に他方如何にして窮乏のどん底に喘ぎつゝある地方農村を甦生さすべきかといふ問題である。兵農兩全主義の叫ばれてゐる今日、粉骨碎身、農村青年の指導と窮迫せる農村の振興の任に當つて寧日なき君の役割は實に重且つ大と云ふべきである。擧國一致、庶政一新を標傍せる近衞內閣に農林參與官としての椅子を得たる君は、之また適材適所と言ふ言葉をそのまゝ當嵌ていゝだらう。(三九專政卒)

佐藤孝一講師消息

拜啓

初夏清新之候、益々御健勝に渉らせられること、存じ上げます。小生儀も相變らず元氣に、愉快に且つ有意義なる海外研究生活を續け居りますれば、何卒御休神下さい。過日は早大新聞御送附下され、有難う存じました。私も既に倫敦生活二ケ月餘りに相成りましたが、在伯林の親戚からの慫慂に從ひ明後日(六月十六日)夜ハーウチ港を發し和蘭を通過して伯林に參ります。

伯林には約三ケ月半位滯在する豫定です。久し振りで北村さんにもお逢出來ることゝ喜んでゐます。

(土屋氏に宛しもの)

榛原製